

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2012年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001223

国立国語研究所

年報

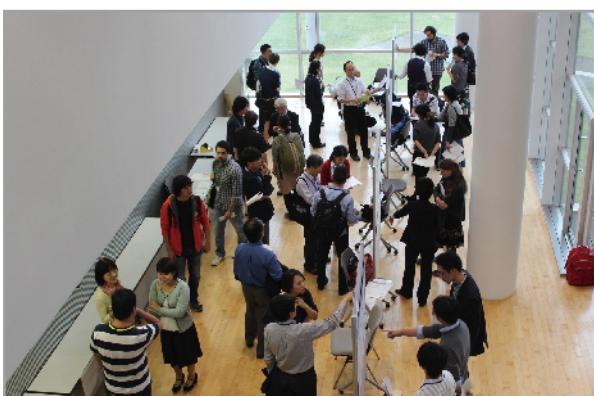
2012 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2012年度）

国際学会・シンポジウム等



ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所との研究協力による国際シンポジウム
"NINJAL International Symposium on Valency Classes and Alternations in Japanese"
(2012年8月4日～5日：於国語研)



国際学会 "The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference"
(2012年10月12日～14日：於国語研)

NWAV ASIA-PACIFIC 2
New Ways of Analyzing Variation in Asia Pacific 2
1st-4th August 2012
NINJAL, Tokyo

Invited Speakers: Jack K. Chambers (U Toronto)
Junko Hibiya (ICU)

Unpublished website:
<http://www.ninjal.ac.jp/nwavnjap/>

Contact Information: (Coordinator: Toshiyuki Asai) NINJAL
nwavnjap@gmail.com

NINJAL
National Institute for Japanese Language and Linguistics

国際学会
"New Ways of Analyzing Variation and
Change in the Asia-Pacific Region 2"
(2012年8月1日～4日：於国語研・統計数理研究所)



国立国語研究所・
オックスフォード大学合同シンポジウム
「通時コーパスと日本語史研究」
(2012年7月31日：於国語研)



シンポジウム
「コミュニケーションのための日本語教育研究」
(2012年11月17日：於星陵会館)

第7回 NINJAL チュートリアル
「日本語教育に生かす第二言語習得研究
—学習者にとって何が難しいのかー」
(2012年6月24日：於北海道大学)

一般向けイベント



第6回 NINJAL フォーラム

「グローバル社会における日本語のコミュニケーション

—日本語を学ぶことはなぜ必要か—」

(2013年3月10日：於一橋大学一橋講堂)



「二ホンゴ探検2012—1日研究員になろう！」(2012年7月21日：於国語研)



「国語研の一般公開」

(2012年10月20日：於国語研)

ことばの文化講演会

主催：国立国語研究所、統計数理研究所
後援：鶴岡市、鶴岡市教育委員会

国立国語研究所と統計数理研究所は、昭和25年から約20年間隔でことばの調査を継続し、平成23年度には第4回調査を実施しました。60年間にわたる調査結果をご報告する調査報告会を開催します。

司会：横山 貴一（国立国語研究所）

講演① 「方言における意味のいろいろ」
佐藤 亮一（国立国語研究所名誉所員）

講演② 「庄内弁の生命力
—鶴岡共通語化調査と言語変化研究—
井上 史雄（明海大学教授、国立国語研究所客員教授）

調査報告
「第4回鶴岡調査の調査報告」
米田 正人（国立国語研究所名誉所員）、阿部 貴人（統計数理研究所客員准教授）、中村 隆（統計数理研究所教授）

3月10日(日) 13:30~16:30
会場：山形県鶴岡市中央公民館・大ホール

「ことばの文化講演会」
(2013年3月10日：於鶴岡市)



国立国語研究所セミナー（第6回八丈方言講座）

八丈・島ことば調査のつどい

<プログラム>

1. 開会のことば
2. 教育長あいさつ
3. 国研研究所あいさつ
4. 八丈語の紹介（島ことばカルタ）
…………休憩…………
5. 八丈方言調査の報告「八丈のことば」
講演「八丈方言の文法」

金田章宏（千葉大学教授）

「八丈方言の発音」

トマ・ペラール（フランス国立科学研究所常勤研究員）

「八丈方言と古代日本語」

平子達也（京都大学大学院博士後期課程/学振研究員）

パネルディスカッション

司会 木部暢子（国立国語研究所）

6. 閉会のことば

日時：平成24年9月9日(日)

13:30~16:00

場所：八丈町保健福祉センター



主催：国立国語研究所・八丈町教育委員会

「八丈・島ことば調査のつどい」
(2012年9月9日：於八丈町)

国立国語研究所セミナー

沖永良部・島ことば調査のつどい

① プログラム

1. 開会のことば
2. 教育長あいさつ
3. 国立国語研究所あいさつ
4. 講演
「沖永良部方言研究歴史」 先田光津（和泊町歴史民俗資料館）
「アクセントからみる沖永良部方言の主要性」 松森晶子（日本女子大学教員）
「海外の言語事情」 クリス・デイビス（琉球大学講師）
5. ディスカッション
司会 木部暢子（国立国語研究所）
6. 閉会のことば

主催：国立国語研究所・和泊町教育委員会

「沖永良部・島ことば調査のつどい」
(2012年12月5日：於和泊町)



国立国語研究所セミナー

与論・島ことば調査のつどい

& プログラム

1. 開会のことば
2. 教育長あいさつ
3. 国立国語研究所あいさつ
4. 講演

日時：平成24年12月2日(日)

16:00~18:30

場所：与論町中央公民館

5. ディスカッション

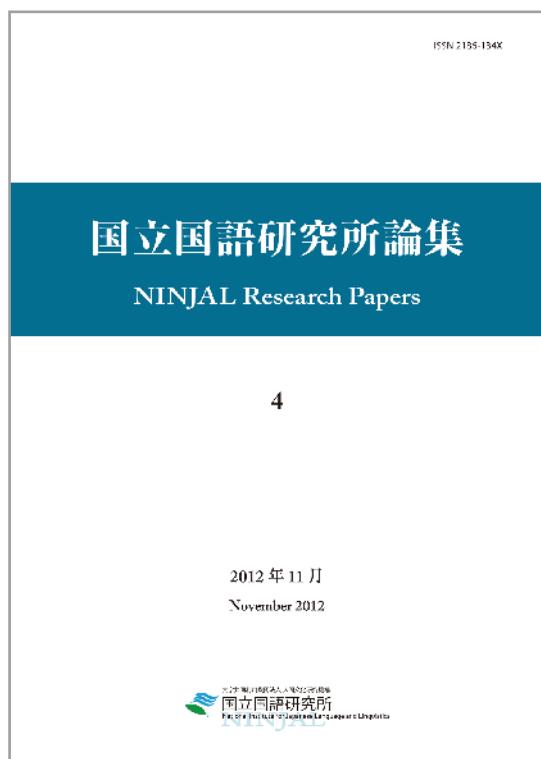
司会 木部暢子（国立国語研究所）

6. 閉会のことば

主催：国立国語研究所・与論町教育委員会

「与論・島ことば調査のつどい」
(2012年12月2日：於与論町)

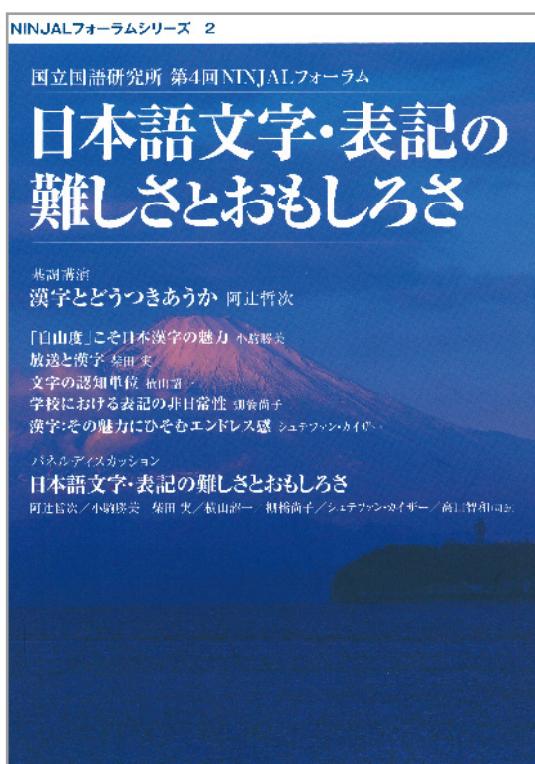
刊行物



『国立国語研究所論集』

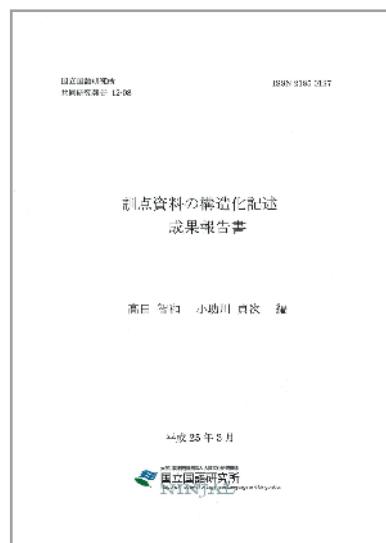
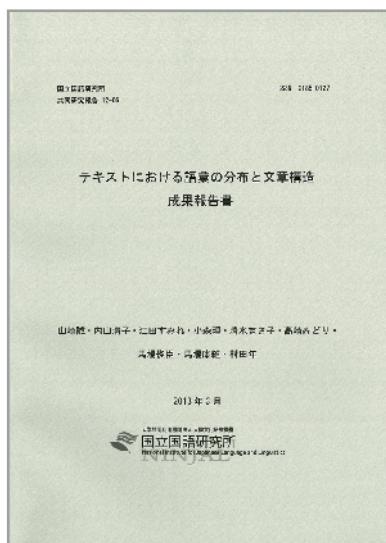
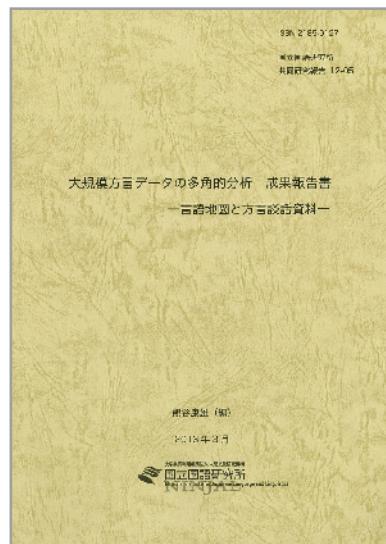
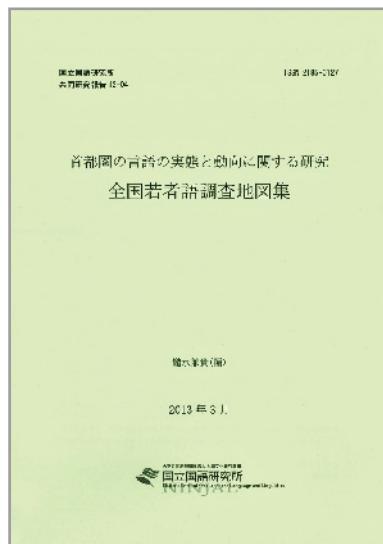
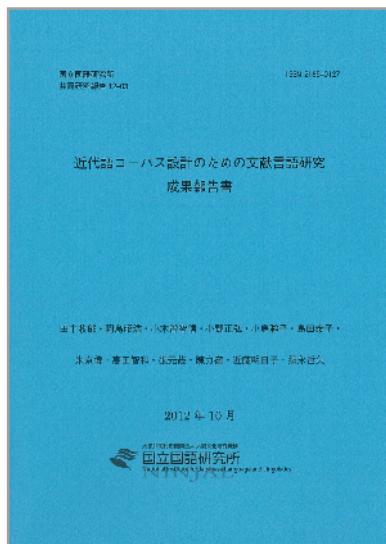
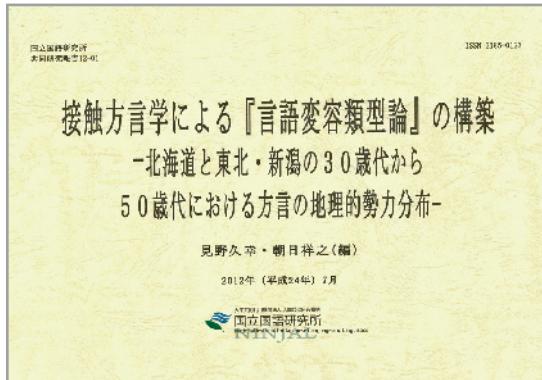


『国語研プロジェクトレビュー』



NINJAL フォーラムシリーズ2
『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』(2012年6月)

『国立国語研究所共同研究報告』



目 次

2012年度年報の発刊にあたって	1
I. 概要.....	3
1. 国立国語研究所のめざすもの.....	4
2. 組織.....	5
(1) 組織構成図.....	5
(2) 運営組織.....	6
運営会議.....	6
外部評価委員会.....	6
所内委員会組織.....	7
(3) 構成員.....	8
専任教員・特任教員.....	8
客員教員.....	9
名誉教授.....	10
プロジェクトPDフェロー.....	10
外来研究員.....	10
II. 共同研究と共同利用.....	13
1. 国語研の共同研究プロジェクト.....	14
基幹型.....	15
領域指定型.....	28
独創・発展型.....	34
萌芽・発掘型.....	41
2. 人間文化研究機構の連携研究等.....	48
連携研究.....	48
アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明.....	48
海外に移出した仮名写本の緊急調査.....	48
大規模災害と人間文化研究.....	48
日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散.....	49
日本関連在外資料の調査研究.....	49
研究資源の共有化.....	49
3. 外部資金による研究.....	50
4. 刊行物.....	52
『国語研プロジェクトレビュー』.....	52
『国立国語研究所論集』.....	53
NINJAL フォーラムシリーズ	54
5. 2012年度公開中のコーパス・データベース	55
6. 研究成果の発信と普及	58
A. 国際シンポジウム	58
B. 研究系の合同発表会.....	63

C. プロジェクトの発表会	72
D. NINJAL コロキウム	89
E. NINJAL サロン	91
F. その他	92
7. センター・研究図書室の活動	95
研究情報資料センター	95
コーパス開発センター	95
研究図書室	96
III. 國際的研究協力と社会貢献	97
1. 國際的研究協力	98
オックスフォード大学との提携	98
マックスプランク研究所との提携	98
アメリカ議会図書館との研究連携	98
国際シンポジウム・国際会議の開催	98
英文日本語研究ハンドブック刊行計画	98
海外の研究者の招聘	99
各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化	99
2. 社会貢献	100
消滅危機方言の調査・保存・分析	100
日本語コーパスの拡充	100
多文化共生社会における日本語教育研究	100
地方自治体との連携	100
訪問者の受入	100
学会等の共催・後援	101
一般向けイベント	101
NINJAL フォーラム	101
NINJAL セミナー	102
人間文化研究機構関係 公開講演会・シンポジウム	102
国語研の一般公開	102
児童・生徒向けイベント	103
職業発見プログラム	103
ジュニアプログラム	103
ニホンゴ探検	103
3. 大学院教育と若手研究者育成	103
(1) 連携大学院	103
(2) 特別共同利用研究員制度	104
(3) NINJAL チュートリアル	104
(4) 優れたポストドクターの登用	105
IV. 教員の研究活動と成果	107
略歴、所属学会、役員・委員、受賞歴、2012年度の研究成果の概要、研究業績（著書・編書、論文・	

ブックチャプター、データベース類、その他の出版物・記事)、講演・口頭発表、研究調査、学会等の企画運営、その他の学術的・社会的活動、大学院教育・若手研究者育成

V. 資料	189
1. 運営会議.....	190
2012年度の開催状況	190
運営会議の下に置かれる専門委員会.....	191
(1) 所長候補者選考委員会.....	191
(2) 人事委員会.....	192
(3) 名誉教授候補者選考委員会.....	192
2. 評価体制.....	193
自己点検・評価委員会.....	193
外部評価委員会.....	193
共同研究プロジェクトヒアリング.....	194
3. 広報.....	195
4. 所長賞.....	195
5. 研究教育職員の異動.....	196
VI. 外部評価報告書	199
平成24年度業務の実績に関する外部評価報告書	201
1. 評価結果報告書.....	204
平成24年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	205
平成24年度「基幹型共同研究プロジェクト」に関する評価結果	207
2. 資料.....	209

2012年度年報の発刊にあたって

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に創設され、独立行政法人を経て、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所となりました。第二期中期計画がちょうど半分過ぎた節目にあたり、ここに、2012年度の研究所における活動全般をまとめた年報を発刊いたします。

新しい国立国語研究所（略称「国語研」）は、日本語学・言語学および日本語教育研究の国際的拠点として国内外の大学・研究機関と広範な共同研究プロジェクトを実施し、言語研究の観点から私たち人間というものの存在について理解と洞察を深めることを研究目的としています。創設からの長い伝統の中で培ってきた研究と、大学共同利用機関としての新しいアプローチを織り合わせることによって、従来は考えられなかつたほど幅広い研究プログラムを展開することが可能になりました。

国語研は古くから、膨大な量の言語データを収集し大型電子計算機で統計的・数理的に処理する研究手法を先駆的に開拓してきました。この伝統的な研究方法は、現在の国語研では主として、〈時空間変異研究系〉における全国諸方言（消滅危機方言を含む）の詳細な調査研究と、〈言語資源研究系〉における現代及び過去の日本語資源を電子化するコーパス構築の研究へと発展してきました。これらは日本語の具体的な運用・使用の実態を明らかにし、日本語の多様な姿を示すことを主眼としています。他方、国語研の歴史の中で新しい観点の研究とは、主として、〈理論・構造研究系〉における一般言語学を背景とする日本語の構造と仕組みに関する研究と〈言語対照研究系〉における世界諸言語と日本語との比較研究で、これらは日本語話者が脳内に持っている抽象的な言語能力の解明と結びづきます。4つの研究系は互いに知見を提供し合いながら研究を進めていますが、いずれの研究系も研究成果を日本語教育・学習に活かすことを心がけています。〈日本語教育研究・情報センター〉は、4研究系と連携しながら、国語研の伝統的な日本語教育研究に新しいコミュニケーション研究を融合させることで、外国人への日本語教育の改善に資する成果を提供しています。

大学共同利用機関の重要なミッションは、共同研究から得られた研究成果や、関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供し、学術研究と一般社会を結ぶ架け橋の役目を果たすことです。そのため、研究成果は、各種の刊行物やコーパス・データベースのオンライン公開、あるいは一般講演会や地方自治体でのセミナーなどのイベントを通して逐次お伝えしています。

通常、日本語の研究は現在と過去のデータを対象としています。しかし、2011年の大災害を契機に改めて意識したことは、現在と過去の研究は揺るぎない日本語の将来につながるものでなければならぬということです。国語研では、研究者社会と一般社会からの幅広い御支援を支えに、私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていきたいと思っています。この年報を通じ、研究所の活動への忌憚のないご意見、一層のご支援をお願いする次第です。

国立国語研究所長
影山太郎

I

概要

1 国立国語研究所のめざすもの

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が1948年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。この後、独立行政法人（2001年4月1日～2009年9月30日）を経て、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に設置され、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関となり、活発な活動を展開している。

ミッション

新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所として発足したことに伴い、国立国語研究所（略称「国語研」）の英語名を National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称 NINJAL（ニンジャル））とした。創設以来の長い伝統と研究の蓄積を踏まえながら、日本語学・言語学・日本語教育研究の国際的研究拠点として、コトバの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深め、国語および国民の言語生活ならびに外国人に対する日本語教育に貢献することを目的としている。日本語を世界諸言語のひとつと位置づけ、国内外の大学・研究機関と大規模な理論的・実証的共同研究を展開することによって日本語の特質の全貌を解明しようとしている。また、共同研究の成果や関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供し、自然言語処理など様々な応用面に寄与することも重要な使命としている。

国語研の活動の概略

国語研では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開している。それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて、各研究系・センターで研究テーマを定め、数々の共同研究プロジェクトを実施している。

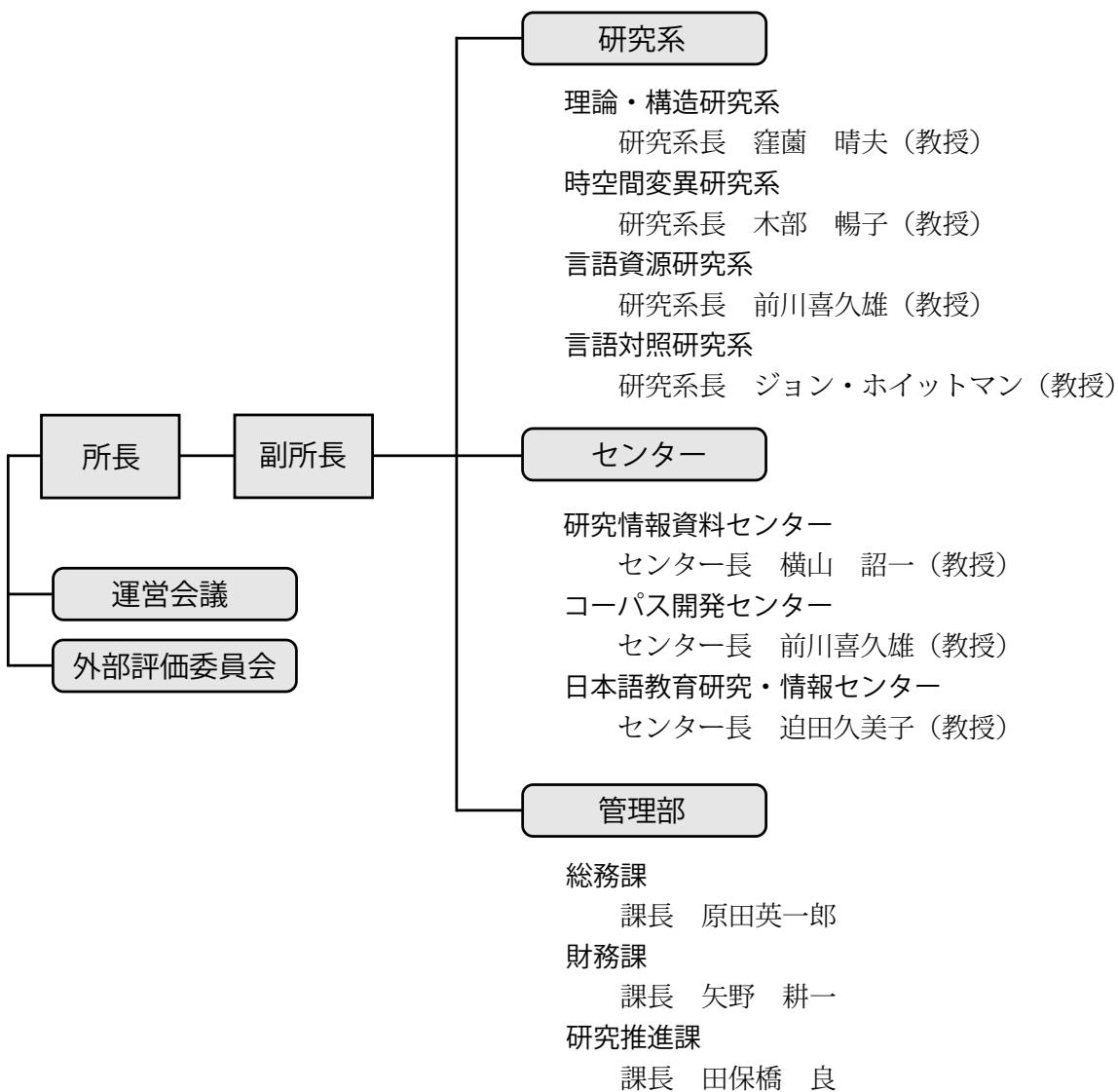
国際的研究協力では、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、オックスフォード大学日本語・日本語学研究センター、ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所との学術提携や、アメリカ議会図書館との研究連携を通して、日本語の国際的研究拠点としての活動を進めている。

社会連携として、学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきと考えている。

2 組織 (2013.3.31 現在)

(1) 組織構成図

所長 影山 太郎
副所長 相澤 正夫, 木部 暢子
管理部長 山本日出夫



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

梶 茂樹	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長／教授
工藤眞由美	大阪大学大学院文学研究科教授
斎藤 衛	南山大学人文学部教授／言語学研究センター長
砂川有里子	筑波大学大学院人文社会系教授
月本 雅幸	東京大学大学院人文社会系研究科教授
東倉 洋一	国立情報学研究所名誉教授
仁田 義雄	大阪大学名誉教授
日比谷潤子	国際基督教大学学長／教授

(内部委員)

相澤 正夫	副所長／時空間変異研究系教授
木部 暢子	副所長／時空間変異研究系長／教授
窪薙 晴夫	理論・構造研究系長／教授
迫田久美子	日本語教育研究・情報センター長／教授
ジョン・ホイットマン	言語対照研究系長／教授
前川喜久雄	言語資源研究系長／教授／コーパス開発センター長
横山 詔一	理論・構造研究系／教授／研究情報資料センター長

任期：平成 25 年 9 月 30 日まで

外部評価委員会

樺山 紘一	印刷博物館館長, 東京大学名誉教授, 元国立西洋美術館館長
林 史典	聖徳大学言語文化研究所長／教授, 筑波大学名誉教授, 元筑波大学副学長
仁科喜久子	東京工業大学名誉教授
門倉 正美	横浜国立大学留学生センター教授, 日本語教育学会副会長
後藤 齊	東北大学大学院文学研究科教授
渋谷 勝己	大阪大学大学院文学研究科教授, 日本学術会議連携委員
早津恵美子	東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
峰岸 真琴	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

所内委員会組織

連絡調整会議（所長、副所長、研究系長、センター長、専任教授、管理部長）

連絡調整会議のもとに、各種委員会を設置

＜管理運営関係＞

- 自己点検・評価委員会
 - ・組織・運営部会
 - ・研究・教育部会
- 情報システム・セキュリティ委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会

＜学術関係＞

- 成果刊行物編集委員会
 - ・プロジェクトレビュー編集部会
 - ・論集編集部会
 - ・英文ハンドブック編集部会
- 研究図書室運営委員会
 - ・選書部会

＜発信・普及関係＞

- 広報委員会
- 研究情報委員会
 - ・研究資料・データベース部会
- NINJAL プログラム委員会
 - ・NINJAL 国際シンポジウム
 - ・NINJAL コロキウム
 - ・NINJAL サロン
 - ・NINJAL チュートリアル
 - ・NINJAL フォーラム
 - ・NINJAL 職業発見プログラム
 - ・NINJAL ジュニアプログラム
 - ・人間文化研究機構公開シンポジウム
 - ・大学共同利用機関協議会関連事業

●安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所長

影山 太郎 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論

専任教員・特任教員

○理論・構造研究系

教授

窪薙 晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

ティモシー・バンス (Timothy Vance) 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

横山 詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学

准教授

小磯 花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

高田 智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

助教

三井 はるみ 日本語学, 社会言語学, 方言文法

○時空間変異研究系

教授

木部 暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

相澤 正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

大西 拓一郎 言語学, 日本語学

准教授

朝日 祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学

井上 文子 言語学, 日本語学, 方言学, 社会言語学

熊谷 康雄 言語学, 日本語学

新野 直哉 言語学, 日本語学

特任助教

竹田 晃子 日本語学, 方言学, 社会方言学

○言語資源研究系

教授

前川 喜久雄 音声学, 言語資源学

准教授

小木曾 智信 日本語学, 自然言語処理

柏野 和佳子 日本語学

田中 牧郎 言語学, 日本語学

丸山 岳彦 言語学, 日本語学, コーパス日本語学

山口 昌也 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

山崎 誠 言語学, 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

○言語対照研究系

教授

ジョン・ホイットマン (John Whitman) 言語学, 歴史比較言語学, 言語類型論

プラシャント・パルデシ (Prashant Pardeshi) 言語学, 言語類型論, 対照言語学

特任准教授

アンナ・ブガエワ (Anna Bugaeva) 言語学, アイヌ語学

○研究情報資料センター

教授（併任）

横山 詔一

○コーパス開発センター

教授（併任）

前川 喜久雄

特任准教授

浅原 正幸 自然言語処理, 計算言語学, コーパス言語学, 心理言語学

○日本語教育研究・情報センター

教授

迫田 久美子 日本語教育学, 第二言語習得研究

野田 尚史 日本語学, 日本語教育学

准教授

宇佐美 洋 日本語教育, 評価論, 言語能力論

野山 広 日本語教育, 社会言語学, 多文化・異文化間教育

研究員

島村 直己 言語教育, 教育史, 教育心理学, 教育社会学

福永 由佳 日本語教育学, 社会言語学, リテラシー, バイリンガリズム

客員教員 (2012年度在籍者)

客員教授

[理論・構造研究系]

上野 善道 東京大学名誉教授

中山 峰治 オハイオ州立大学教授

益岡 隆志 神戸市外国語大学教授

アーミン・メスター (Armin Mester) カリフォルニア大学サンタクラーズ校教授

[時空間変異研究系]

井上 史雄 明海大学教授

狩俣 繁久 琉球大学教授

金水 敏 大阪大学教授

真田 信治 奈良大学教授

田窪 行則 京都大学教授

松森 晶子 日本女子大学教授

[言語資源研究系]

近藤 泰弘 青山学院大学教授

伝 康晴 千葉大学教授

ビヤーケ・フレレスビッグ (Bjarke Frellesvig) オックスフォード大学教授

[言語対照研究系]

アレクサンダー・ボビン (Alexander Vovin) ハワイ大学教授

柴谷 方良 ライス大学教授

ピーター・フック (Peter Hook) ミシガン大学名誉教授

[日本語教育研究・情報センター]

白井 恭弘 ピッツバーグ大学教授

鳥飼 玖美子 立教大学特任教授

南 雅彦 サンフランシスコ州立大学教授

客員准教授

[時空間変異研究系]

青木 博史 九州大学准教授

[言語対照研究系]

下地 理則 九州大学准教授

ハイコ・ナロック (Heiko Narrog) 東北大学准教授

名誉教授

角田 太作 2012.4.1 称号授与

プロジェクト PD フェロー (2012 年度在籍者)

儀利古 幹雄 理論・構造研究系

竹村 亜紀子 理論・構造研究系

神崎 享子 理論・構造研究系

小川 晋史 時空間変異研究系

保田 祥 コーパス開発センター

今田 水穂 コーパス開発センター

中北 美千子 日本語教育研究・情報センター

外来研究員

黄 賢暉 (日本学術振興会外国人特別研究員) 受入教員: 窪薙 晴夫

「日本語と韓国語のプロソディーに関する対照研究」(2010.9 ~ 2012.9)

巴達瑪敖德斯爾 (内モンゴル大学 (中国) モンゴル語研究所長) 受入教員: 木部 暢子

「危機言語の保護と再活性化についての研究」(2011.10 ~ 2012.9)

Galina Vorobeva (キルギス民族大学 (キルギス) 上級日本語講師) 受入教員: 横山 詔一

「漢字字体の階層性構造の分析とそれにもとづく『千話一話漢字物語』漢字教材作成」

(2011.10 ~ 2012.9)

黄 鈺涵 (国立台湾大学 (台湾) 助理教授) 受入教員: 宇佐美 洋

「モダリティ表現の語用論的分析と習得研究」(2012.3 ~ 2012.8)

沖 裕子 (信州大学・教授) 受入教員: 木部 暢子

「現代日本語における談話的変異の研究」(2012.4～2012.9)

高松 亮（埼玉大学准教授） 受入教員：前川喜久雄

「話し言葉と書き言葉の比較分析」(2012.4～2013.3)

長屋 尚典（日本学術振興会特別研究員（SPD）） 受入教員：プラシャント・パルデシ

「東インドネシア諸語の空間指示・移動表現の類型と歴史」(2012.4～2013.3)

馬 玲（ライス大学（アメリカ）・大学院生） 受入教員：プラシャント・パルデシ

「名詞修飾構造の中対照研究」(2012.6～2012.7)

ハンセン岡崎 朋子（オスロ大学（ノルウェー）准教授） 受入教員：小木曾智信

「Dative Marking of Giver with Verbs of Receiving in Japanese」(2012.11～2012.12)

中島 和子（トロント大学（カナダ）名誉教授） 受入教員：野山 広

「継承語教育文献データベースの開発—継承日本語教育を中心に—」(2012.10～2013.9)

Irena Srdanovic（リュブリヤーナ大学（スロベニア）助教授） 受入教員：迫田久美子

「日本語教育における語の共起関係」(2012.10～2013.9)

久屋 愛実（オックスフォード大学（イギリス）大学院生） 受入教員：田中 牧郎

「コーパスに基づく外来語の社会言語学的研究」(2012.11～2013.2)

John Phan（日本学術振興会外国人特別研究員） 受入教員：ジョン・ホイットマン

「ベト・ムオン語派の歴史比較研究」(2012.11～2014.11)

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構の連携研究等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として(4) 研究所からの刊行物、(5) 平成24年度公開中の各種コーパス・データベース、および(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催しを掲げる。

1 国語研の共同研究プロジェクト

第二期中期計画における国語研全体の研究課題は「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」である。これを達成するため、4研究系と日本語教育研究・情報センターは、それぞれの総合研究テーマを定め、各種規模の共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究系・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。

研究課題「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」

各研究系・センターの総合研究テーマ

理論・構造研究系	日本語レキシコンの総合的研究
時空間変異研究系	日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化
言語資源研究系	現代語および歴史コーパスの構築と応用
言語対照研究系	世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明
日本語教育研究・情報センター	日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

共同研究プロジェクトの類別と主要な成果

共同研究プロジェクトとして、基幹型（15件）、領域指定型（7件）、独創・発展型（8件）、萌芽・発掘型（9件）の4タイプを実施した。それぞれのプロジェクトの主要な成果を次に掲げるが、専任教員については、より詳しい成果報告を第IV章「教員の研究活動と成果」で記載する。

【基幹型】 15 件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。4 研究系の専任教授および客員教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	所長	影山 太郎	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
本プロジェクトは、語彙の仕組みを、辞書における静的な項目列挙としてではなく、意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え、日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため、理論的分析だけでなく、外国語との比較、心理実験、歴史的変化、方言、コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを探る。具体的には、ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れるような現象として、(1) 動詞の自他交替と項の変化、(2) 動詞+動詞型の複合動詞の意味的・統語的特性、(3) 事象表現と属性表現の対比における語彙と文法の係わり、(4) 複雑な語における意味と形のミスマッチや統語構造における語形成など形態論と意味論・統語論の相互関係、という4つの事項に着目し、これらを解明することで、日本語から世界に発信できるような一般理論を開発する。			
《2012 年度の主要な成果》			
日本語の語形成とレキシコンの諸特性の中で際立って特徴的な4つの性質（属性叙述、動詞の自他交替、複合動詞、語形成と統語・意味との係わり）について研究チームごとに1～3の活動を行った（属性叙述チームは2011年に論文集を出版した）。			
1. 「動詞の自他交替」チーム			
①マックスプランク進化人類学研究所との研究協力に基づき国際シンポジウム「日本語の自他と項交替 (Valency Classes and Alternations in Japanese)」を開催し、招待講演（17件）と公募による若手研究者ポスター発表（7件）を実施した。（2012.8.4-5、参加者延べ264名）			
②招待講演に基づく論文集 <i>Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond</i> (ed. Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen) の出版に向けて De Gruyter Mouton 社と契約を結んだ。			
2. 「複合動詞」チーム			
①公募した若手研究者の発表を含む公開発表会を名古屋大学（2012.4）と東北大（2012.9）で開催し、国内出版の準備を進めた。			
②関西言語学会第37回大会シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」（2012.6.2）で講演を2件行った。			
③啓蒙活動として、大阪大学言語社会学会（2012.6.28）での公開講演と、日本言語学会夏期講座（2012.8.20-25）での講義を行った（リーダー）。			
④「複合動詞文献一覧」（PDF）をWeb公開した。			

⑤ 2700語超のデータベース「複合動詞レキシコン（開発版）」をオンライン公開した。

3. 「語形成と意味・統語」チーム

①『レキシコンフォーラム No.6』（ひつじ書房, 2013.1）で特集「日本語レキシコン入門」（メンバーによる解説8篇）を出版した。

② Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* の出版契約を Walter de Gruyter 社と結び、執筆に入った。

参加機関名	茨城大学, 愛媛大学, 岡山大学, 九州大学, 群馬大学, 慶應義塾大学, 甲南大学, 神戸市外国語大学, 神戸大学, 大阪大学, 筑波大学, 東京大学, 東北大学, 同志社大学, 富山大学, 名古屋大学, 北海道大学, 北京外国语大学, インディアナ大学, ハーバード大学, バーミンガム大学
共同研究員数	33名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコンの音韻特性	理論・構造 研究系教授	窟薙 晴夫	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し、世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究員として参画してもらうことにより、通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で、時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し、また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。

促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが、本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより、日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを、音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域（音声学、音韻論、国語史、言語獲得、日本語教育）の専門家を集め共同研究を推進する。

アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより、(i) 日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究、類型論研究にどのような知見を与えるか、(ii) 逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。

《2012年度の主要な成果》

- ①アクセントと促音に関する国際会議を NINJAL 国際シンポジウム (ICPP 2013) として実施し、国内の研究成果（合計 28 件の発表、うちプロジェクトから 11 件）を発信した。
- ②これまでの国際会議 (ISAT 2010, GemCon 2011) の成果を編集して海外の専門誌に投稿した結果、ISAT 2010 の論文 8 本が *Lingua* 122巻 13号（特集号、Special Issue on 'Varieties of Pitch Accent Systems'）に刊行された。また GemCon 2011 の論文 3 本が *Journal of East Asian Linguistics* 特集号（22巻 4号）に採択された（2013.11月号に刊行）。

③年5回の研究成果発表会と国際シンポジウム（ICPP 2013）（計12日）を東京（3回）、関西（2回）、九州（1回）で開催した。すべてを公開とした結果、第1～3回発表会だけで合計83名（うち共同研究員以外39名、47%）の参加を得た。また発表を公募とした結果、合計90件（全5回+国際シンポジウム）の研究発表のうち55件（61%）が共同研究員以外（主に若手研究者）の発表であった。

④合計5回（計9日）の研究発表会と3日間の国際シンポジウムにおいて、合計31名の若手研究者（大学院生および非常勤講師等）に発表の機会を提供し、うち15名に対し旅費の支援を行った。また国際シンポジウムでは全国の大学院生を多数アルバイトとして雇用し、旅費を支援した。

参加機関名	青山学院大学、大妻女子大学、大阪大学、大阪保健医療大学、金沢大学、京都産業大学、京都大学、九州大学、神戸市外国語大学、神戸大学、上智大学、筑波大学、東京大学、同志社大学、日本女子大学、広島大学、別府大学、北海道大学、北星学園大学、松山大学、室蘭工業大学、法政大学、立命館大学、早稲田大学、理化学研究所、情報通信研究機構、カリフォルニア大学
共同研究員数	39名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコン—連濁事典の編纂	理論・構造 研究系教授	Timothy J.Vance	2010.11-2014.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトの最終目的是、連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は、(1) 連濁の由来と史的变化、(2) ライマンの法則、(3) 右枝条件、(4) 連濁と形態・意味構造、(5) 連濁と語彙層、(6) 他の音韻交替と連濁の相互作用、(7) アクセントと連濁の相互作用、(8) 連濁と表記法、(9) 連濁に関する心理言語学研究、(10) 方言の連濁、(11) 連濁と日本語学習、(12) 連濁研究史、等々である。事典には、包括的な参考文献一覧も含める。

本共同研究は、定期的に開催する研究発表会と国際シンポジウムを中心に推進する。研究発表の内容をそのまま事典に取り入れるわけではなく、スタイルの統一性を保証するために、プロジェクト・リーダーは各寄稿者と協力する。なるべく多くの言語学者に本プロジェクトの成果が利用できるように、日英対訳の形で出版する予定である。連濁研究に役立つ語彙のデータベースも作成し、公開する。

《2012年度の主要な成果》

- 共同研究組織に適切なメンバーを4名加え、プロジェクトの最終目的である“連濁事典”的各章の担当者を決定した。ドイツのMouton社との交渉が進み、英語版（仮称：*Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds*）の出版が内定した。
- 12月にマーク・アーウィン共同研究員と宮下瑞生共同研究員が「連濁データベース」の試用版を公開した。
- プロジェクト共同研究員による査読付き論文4件が専門雑誌に掲載された。
- “連濁事典”で取り上げる課題の1つが「連濁の方言差」であるので、総合地球環境学研究所から援助を受け、5月29日～30日に山形県河北町で方言調査を実施した。

5.	2回（計4日）のプロジェクト研究成果発表会を山口市（6月2日～3日）と東京都（11月17日～18日）で開催し、合計11件の研究発表を行なった。2月17～18日に第8回音韻論フェスティバルも窓口班（プロジェクト名：「日本語レキシコンの音韻特性」）と共に開催した。
6.	1月25～27日に国際シンポジウム（ICPP2013）を窓口班と共に開催した（参加者数：約130名、発表数：口頭発表24件+ポスター発表26件）。連続や有声性に関するセッションを設け、合計5件の発表により連続プロジェクトの活動について国内外に普及するように努めた。発表者は全員プロジェクト共同研究員以外からの応募であった。
参加機関名	大同大学、千葉大学、山形大学、名古屋大学、神戸市外国語大学、山口大学、金沢大学、文京学院大学、神田外国語大学、国際教養大学、千葉大学、会津大学、京都外国語大学、カリフォルニア大学、シェフィールド大学、ボルドー第3大学、モンタナ大学、マカオ大学、ラトガース大学
共同研究員数	24名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	理論・構造 研究系教授	横山 詔一	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

日本語の文字表記について、文字環境（文字レキシコンを含む）のモデルを作成する。そのモデルは、日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか、日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また、本プロジェクトが提唱する文字環境モデルは、音声コミュニケーションに関する研究にも利用できる。具体的には、山形県鶴岡市で1950年から約20年間隔で3回行われた共通語化の縦断調査や、愛知県岡崎市で1951年から実施されてきた敬語の経年調査などの大規模データベースを活用しながら、時空間変異研究系と連携して言語変化の新たな理論を導出する。とりわけ、山形県鶴岡市の共通語化研究については、統計数理研究所のプロジェクトと連動しながらデータ整理を進め、言語変化理論の検証に必要な統計解析を可能にするための基盤を整備する。さらに、米国シアトル市で1956年から7年間隔で継続されている「知能の生涯変化」に関する大規模な縦断研究との比較もおこない、言語習得研究や老人学研究にも貢献できる言語変化研究の方法論を確立する。このような学術的挑戦は、単に文字論だけではなく、社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をもたらし、既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

《2012年度の主要な成果》

1. 文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に関する理論研究をおこなった。その成果の一部を、日本語学習者用漢字教材開発に応用し、中央アジアに位置するキルギス国の研究者と共に国際学会において発表した。
2. 文字環境の実態把握に向けて、海外の文字研究者を含めて調査デザインや研究法の検討を進め、実務にも利用できる図書を公刊した。
3. 国語研が実施してきた言語行動の大規模経年調査をコウホート研究の視座からとらえ直し、その方法論（分析手法を含む）や結果を統計数理研究所と共同で日本心理学会や日本行動計量学会などで紹介した。
4. 第4回鶴岡共通語化調査で得られた大量データの整理の一部を継続して進めた。

参加機関名	愛知教育大学、京都工芸繊維大学、神戸松蔭女子学院大学、帝塚山大学、ノートルダム清心女子大学、弘前大学、法政大学、明海大学、統計数理研究所、キルギス国立民族大学、国立台湾大学、ペンシルベニア大学、ヴィクトリア大学
共同研究員数	25名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	時空間変異 研究系教授	木部暢子	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年2月のユネスコの発表によると、日本語方言の中では、沖縄県のほぼ全域の方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は、他の方言ではすでに失われてしまつた古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。また、これらの方言では、小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く、バリエーションがどのように形成されたか、という点でも注目される。			
本プロジェクトでは、フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して、これら危機方言の調査を行い、その特徴を明らかにすると同時に、言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行う。			
《2012年度の主要な成果》			
<p>①【共同研究の推進】東京都八丈島、鹿児島県与論島、鹿児島県沖永良部島の3カ所において、消滅危機方言の合同調査を行った。</p> <p>②【社会貢献】合同調査にあわせて、八丈町、与論町、沖永良部和泊町において、教育委員会と共催で一般市民向けの国立国語研究所セミナーを開催した。</p> <p>③【研究成果の発信】2012年8月に、昨年度実施した沖縄県宮古島の調査の報告書『南琉球宮古方言調査報告書』を刊行した。また、プロジェクトのHPで報告書を公開した。現在、HPで公開している報告書は、『喜界島方言調査報告書』、『仮名文字に表記による喜界島方言調査データ集』、『南琉球宮古方言調査報告書』の3編である。</p> <p>④【若手研究者育成】以下の若手研究者支援を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・八丈島、与論島、沖永良部島の合同調査に若手研究者を多数、参加させた。 ・「若手研究者育成のための危機方言調査」事業の一環として、2012年4月20～22日に集中講義（講師：下地理則）を実施した。 ・4名の大学院生に対し、方言調査指導を行うとともに、方言調査旅費を援助した。 ・大学院生2名を特別共同利用研究員として採用し、方言調査指導を行った。 			
参加機関名	岡山大学、沖縄国際大学、金沢大学、九州大学、京都大学、首都大学東京、千葉大学、一橋大学、広島大学、別府大学、日本女子大学、琉球大学、オークランド大学、フランス国立科学研究所		
共同研究員数	24名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	時空間変異 研究系教授	相澤 正夫	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
<p>この共同研究は、20世紀前半から21世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」、特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して、そこに見られる変異の実態、変化の方向性、すなわち「動態」を、従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明することを目的とする。あわせて、現代日本語の的確な動態把握に基づき、言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。</p> <p>国立国語研究所・時空間変異研究系のプロジェクトとして、「時間的変異」と「社会的変異」の双方の観点からサブテーマを設定し、変化して止まない現代日本語の研究に、従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓する。そのため、近接領域で類似の言語現象を研究していくながら、従来は一堂に会して議論をする機会の少なかった国語学、日本語学、言語学、社会言語学など様々な背景を持つ所内外の研究者に、情報交換や相互啓発のための「場」を提供する。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<ol style="list-style-type: none"> プロジェクトの一環として開催した12回の公開共同研究発表会の成果物として、出版社おうふうから論文集を刊行する企画をスタートさせた。共同研究メンバー12名が、①言語変化の先端現象の把握・分析、②戦後60年余の通時的变化の把握・分析、③多元的分析手法の開発、④新規資料の発掘・分析、⑤言語問題の解決に資する応用研究、といった5つの観点に関連するテーマ設定で論文を執筆し、平成25年度中に論文集『現代日本語の動態研究（仮題）』（相澤正夫編）を刊行する準備を整えた。 「言語変化の先端現象の把握」という観点に関連して、「とびはね音調」についての「全国聞き取りアンケート調査」を企画し、2012年10月に実施した。 昭和戦前期の「SP盤貴重音源資料」の文字化資料を、冊子体と電子媒体（CD-R）で整備し、プロジェクト内で利用できるようにした。 			
参加機関名	日本大学、大阪大学、神戸松蔭女子学院大学、ノートルダム清心女子大学、早稲田大学、横浜国立大学、立命館大学、NHK放送文化研究所、統計数理研究所		
共同研究員数	12名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
方言の形成過程解明のための全国方言調査	時空間変異 研究系教授	大西拓一郎	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
<p>本研究は、日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に、全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては、言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を50年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方、大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成してきた。そこで把握される方</p>			

言の分布を説明する基本原理は、中心から分布が広がると考える「方言周囲論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり、現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する、世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。

《2012年度の主要な成果》

方言分布の経年比較を通して、日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的とする研究である。日本の方言研究においては、過去30～50年にさかのぼることが可能な方言分布に関するデータが詳細な言語地図の形で蓄積されてきた。現在における日本全国の方言分布を把握するなら、このような過去に明らかにされてきた方言分布と比較することで、リアルタイムな時間軸上で方言分布の変動が把握できる。本プロジェクトでは、このことを実現させるために、全国の方言研究者が分担・協力しながら臨地調査によりデータを収集し、かつそのデータを共有する形で、全国方言の分布調査を進めているところである。リーダーとして、プロジェクト全体を統括し、また、共同研究員・調査協力者から送られてくるデータを精査して、データベース化を進めた。同時に、方言分布がどのようにしてできるのかに関する基本モデルを考察・構築し、国内外の学会・研究集会で発表を行った。全国調査は現在、進行中であるが、途中段階で得られたデータであっても、それをもとに現在の方言分布を言語地図の形で発表するとともに、過去の分布との比較を通じた基本モデルの妥当性の具体的検証を進め、必要に応じたフィードバックを行うことで、モデルの強化につとめた。

参加機関名	岩手県立大学、岡山大学、金沢大学、関西大学、共愛学園前橋国際大学、岐阜大学、熊本大学、群馬県立女子大学、県立広島大学、呉工業高等専門学校、実践女子大学、広島大学、弘前学院大学、甲南大学、高知大学、佐賀大学、滋賀大学、鹿児島大学、秋田大学、松山東雲女子大学、信州大学、新潟県立大学、神戸女子大学、神戸松蔭女子学院大学、神田外語大学、椎山女学園大学、千葉大学、大阪大学、大分大学、東北大学、徳島大学、日本大学、尾道市立大学、富山大学、福岡教育大学、福岡女学院大学、福島大学、文教大学、琉球大学、仙台高等専門学校
共同研究員数	47名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語変種とクレオールの形成過程	時空間変異 研究系客員教授	真田 信治	2009.10-2013.9

《研究目的及び特色》

アジア・太平洋の各地には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持する人々が数多く存在する。特に台湾やパラオなどでは、母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている。また、台湾宜蘭県の一部には、日本語を上層とするクレオールが形成されている。本プロジェクトでは、これらの地域（台湾・パラオ・マリアナ諸島・サハリン・中国東北部など）を対象としたフィールドワークによって、現地での日本語変種、およびクレオールの記述・記録を行い、海外における日本語を交えた異言語接触による言語変種の形成過程、ならびにそこに介在した社会的な背景を究明する。なお、台湾宜蘭県における「宜蘭クレオール（Yilan Creole）」

は、各世代を通して使用されているが、それを除けば、各地域の日本語話者は現在そのほとんどが75歳以上の高齢に達しており、その日本語運用に関するデータの蓄積と記述は、まさに急務である。

《2012年度の主要な成果》

アジア・太平洋の各地でフィールドワークを順調に進めた。研究成果を「海外の日本語シリーズ」(単行本)として順次公刊する計画に関しては、『マリアナ諸島に残存する日本語－その中間言語的特徴－』、及び『サハリンに残された日本語樺太方言』を出版した。また、海外の大学における国際研究集会等で本プロジェクトの研究成果を順次報告するという計画に関しては、パラオ共和国の教育文化省との共催で、公開の国際シンポジウムを開催するとともに、中国の延辺大学外国语学院と連携して、国際共同研究発表会を開催した。いずれにおいても共同研究員以外の研究者による発表参加を得た。

参加機関名	京都工芸繊維大学、首都大学東京、天理大学、延辺大学、国立東華大学、佳木斯大学		
共同研究員数	7名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	時空間変異 研究系客員教授	井上 史雄	2012.4-2015.3

《研究目的及び特色》

【概要】国語研では半世紀以上にわたり、山形県鶴岡市、愛知県岡崎市、北海道富良野市において、共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）を行ってきた。同一の調査内容を用いて同一の対象地域・対象者を長期間にわたって調査する、世界に類のないオリジナルな調査研究である。これにより、話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ、実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や、同一人物の加齢による変化なども知ることができる。ここから得られた共通語化や敬語変化の動向についての豊かな知見は、言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行うことができる。

本研究は、これらの大規模経年調査の多様なデータを総合的に分析することにより、実証的データに基づいて日本語の変化と日本語の将来を統計的に予測することのできる理論の構築を目指している。

【研究目的】鶴岡第4回調査は、2012年春に終了したが、その電子化とデータベース化は、これから仕事である。また国立国語研究所の以前の鶴岡・岡崎・富良野などの定点・経年調査による結果も、すべてデータベース化する必要がある。本研究の目的は、これらのデータベース・各種言語資料を高度学術利用することにより、現代日本の地域社会における言語使用・言語意識の実態を記述するとともに、言語の変化と将来予測に関する実証的な研究を行うことにある。また国際的発信、国内一般人への啓発にも配慮する。

【研究の意義】鶴岡・岡崎・富良野の経年調査は、同一の調査内容で、同一の対象地域・対象者に対する大規模な調査であり、世界に誇るべき成果である。話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができる。言語部門ではギネスブックものの、世界にまれな貴重な大規模データである。ただ、これらのデータの分析には、長期間にわたる大勢の協力を必要とするため、未分析のまま保存されている貴重な資料も少なくない。これらを公開して、研究の進展に寄与できる体制を今後、整える必要がある。また各地の調査項目には共通項目があるにも関わらず、これまで相

互に結果を参照して比較することがなかった。これらの多様な調査を相互に関連づけて、報告書で扱われた以外の観点からの分析を行う必要がある。

以上のような観点から、本研究では大規模経年調査のデータの整理、分析を行い、その成果や国語研の所有するデータの価値について、国際的に公表、発信する。

《2012年度の主要な成果》

「岡崎のティタダク」の頻用をヒントに集計を進め、New Ways of Analyzing Linguistic Variation in Asia Pacificにおいて発表した。また秋の『国語研論集』に応募して掲載できた。簡略版は月刊誌『日本語学』で公表できた。『岡崎敬語資料図集』は3月の年度末に完成し、関係者に配付した。またアジアの日本情報の届きにくい国で講演・研究発表を行って、国語研の研究成果を発表し、世界のどこにいてもインターネットで公開したデータにアクセスして、独自の研究を進めることができることを紹介した。

参加機関名	宇都宮共和国大学、滋賀大学、神戸松蔭女子大学、大阪府立大学、日本大学、福島大学、明海大学		
共同研究員数	13名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
コーパスアノテーションの基礎研究	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2009.10-2014.3

《研究目的及び特色》

国立国語研究所におけるコーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが、そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。本研究では、コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行う。

コーパスの価値は代表性とアノテーションの積として定まるが、日本語コーパスの場合、形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが、我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく、主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため、言語学の観点からすると、仕様に一貫性が欠けていたり、単位の齊一性に問題が生じていたりすることがあった。一方、言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて、現実の用例をどの程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。

本研究の目的は、自然言語処理研究者と言語学者とが協力して、現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し、検討することにある。

《2012年度の主要な成果》

本プロジェクトの目標は、コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行うことにある。本年度も共同研究員ごとに、文節係り受け構造、節境界、時間表現、助動詞レル・ラレルの意味分類、動詞項構造など各種アノテーション作業を継続実施した。一部の共同研究員には委託研究を実施した。さらに各種アノテーションの自動重ねあわせを実現するするために必要な情報収集を行った。今年度の成果としては、言語処理学会第19回年次大会においてテーマセッション「コーパスアノテーションの可能性と共有化」（2013年3月12日）を実施し、合計15件の発表があった。

参加機関名	東北大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 東京工業大学, 筑波大学, 岡山大学, 立命館大学, 慶應義塾大学, 京都大学, 山梨大学, 情報通信研究機構, 統計数理研究所
共同研究員数	14名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー	研究期間
	所属・職名	
コーパス日本語学の創成	言語資源研究系 教授	前川喜久雄 2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》		
日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は、『日本語話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが、一連のコーパスを徹底的に解析して、コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。本研究の目的は、各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得、それを学界に周知させることによって、日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり、一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。		
《2012年度の主要な成果》		
本プロジェクトの目標は、日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることにある。そのために一般からも応募可能な「コーパス日本語学ワークショップ」を年に2回開催している。本年度開催の第2回では40件、第3回では54件の研究発表があり、約半数が一般からの応募であった。これとは別に、語彙・文法・表記の研究を中心とする専門家グループ、音声・対話に関する研究グループによる共同研究も実施しており、一部の共同研究員には委託研究を依頼した。本年度の成果物としては、英國Routledge社より <i>Frequency Dictionary of Japanese</i> (Y.Tono, M.Yamazaki, K. Maekawa, 2013年2月) を刊行した。これは『日本語話し言葉コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータをブレンドして作成した現代日本語の頻度辞書である。さらに朝倉書店より刊行予定の『講座日本語コーパス』第1巻の刊行準備を進め、ほぼ完了させた。学会賞の受賞が4件あった。		
参加機関名	愛知学院大学、愛知淑徳大学、大阪大学、千葉大学、上智大学、広島大学、山形大学、神戸大学、早稲田大学、大東文化大学、筑波大学、東京学芸大学、東京女子大学、同志社女子大学、同志社大学、日本大学、法政大学、鳴門教育大学、立正大学、立命館大学、理化学研究所、統計数理研究所	
共同研究員数	34名	

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
通時コーパスの設計	言語資源研究系 客員教授	近藤 泰弘	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
<p>日本語の史的研究に用いることができる本格的な「通時コーパス」を構築する準備段階として、コーパスの設計にかかる諸問題について研究する。①コーパスの対象に含める文献資料をどのようにして選定するか、②選定した資料をどのように電子化しどのような情報を付与するか、③古典テキストに対応した形態素解析をどのように行うかなど、通時コーパス設計のための重要な問題を中心に、基礎的な研究を展開する。こうした研究は、日本語史上のいくつかの時点の主要資料についてコーパスを試作し、これを活用した日本語史研究を実践することを通して行う。また、コーパスの構築作業における他機関との連携の可能性を探り、コーパス公開のために不可欠な著作権処理の問題についての検討も行い、通時コーパスの構築・公開に向けた諸課題に見通しを付ける。</p> <p>言語資源研究系の現代語コーパスにかかる研究と連携を取り、コーパス開発センターで実施中の現代語コーパスの構築作業、著作権処理業務などとも関連付けて研究を進めていく。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>①コーパスの公開のための名称を「日本語歴史コーパス」とし、12月に「平安時代編（先行公開版）」として、『古今集』『源氏物語』等の10作品を「中納言」によって一般公開した。これは、形態素解析済みの古文テキストの日本で最初の公開コーパスであり、非常に大きな成果である。このコーパスの公開は、コーパス開発センターと連携して行っている。</p> <p>②オックスフォード大学のVSARPJプロジェクトの協力関係をさらに強力なものとし、シンポジウムを行った他、今後双方でのコーパス計画について緊密な協力体制をとっていくことが確認された。</p> <p>③出版社との関係をさらに良好にし、テキストの著作権問題がかなり解決した。</p>			
参加機関名	群馬大学、恵泉女子大学、埼玉大学、就実大学、千葉大学、東京外国語大学、東京工業大学、福井大学、科学技術振興機構、国立情報学研究所、オックスフォード大学		
共同研究員数	14名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究	言語対照研究系 教授	John Whitman	2012.4-2015.3
《研究目的及び特色》			
<p>本研究の目的は日本語とその周辺の諸言語を主な対象とし、その形態統語的・音韻的特徴と変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することである。形態統語論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語にも見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能や形、歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語や周辺諸言語の歴史的再建を試みる。そして、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。</p>			

上記の2つのテーマに沿って、プロジェクトを「統語論班」と「音韻再建班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は（1）類型論的観点と通時的言語学観点を組み合わせること、（2）言語類型論、国語学（日本語学）、言語学理論（統語論理・音韻論理）にわたる、幅広い理論・方法論的観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。

当然のことながら、研究成果の公表もプロジェクトの目的である。各班別に、年に2回の共同研究発表会と年に1回の国際ワークショップを行う。「統語論班」の一部のメンバーは、海外の出版企画 *Mouton Handbook of the History of Japanese* と *Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar* で研究成果を発表する。残るプロジェクトメンバーは国内外の学問誌や論文集で研究成果を発表する。

《2012年度の主要な成果》

1. プロジェクトの「統語論班」と「音韻再建班」の両班を結成した。
 2. 12年度には、両班を合わせて5回の研究発表会を行った。そのほかに2013年3月、言語対照研究系の合同発表研究会の形で行い、プロジェクト内外の出席者が100人を超えた。そのほかに、米コーネル大学で研究発表会を主催し、プロジェクトメンバーを招き発表してもらった。
- ①ムートン社ハンドブック (*Handbook of the History of the Japanese Language*) の執筆者42名から承諾を得、各章の要旨を含めた出版計画を出版社に提出し、出版契約を結んだ。各章の提出締め切りを2013年4月1日に定めた。「統語論班」のメンバーを幾人か執筆者として要旨を出してもらい、*Nominalizations as a source of main clause grammar* という題目で John Benjamins 社の言語類型論学シリーズ *Typological Studies in Language* に提出する予定である。「音韻再建」のメンバー3人が *Korean Linguistics* (オランダ Brill 社) の特集号 “Korean Historical Linguistics” に論文を投稿した。
- ②2013年8月に海外で開催の *Workshop on Altaic Formal Linguistics* のWebサイトを開設し、招待発表者を決め、プロジェクトメンバーの参加を勧めた。

参加機関名	茨城大学、岡山大学、九州大学、甲南女子大学、札幌学院大学、神戸大学、青山学院大学、静岡県立大学、早稲田大学、大阪大学、筑波大学、東京外国語大学、東京大学、東北大学、富山大学、福井大学、明治学院大学、琉球大学、和歌山大学、和光大学、オックスフォード大学、オハイオ州立大学、ハワイ大学、フランス国立科学研究所
共同研究員数	38名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	言語対照研究系 教授	Prashant Pardeshi	2009.10-2014.3
《研究目的及び特色》			
述語構造の意味範疇に関する重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が（i）出来事の認識、（ii）その言語表現および（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約40言語を詳細に比較・検討し、それを通じて、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。			

《2012年度の主要な成果》

意味的他動性が（i）出来事の認識〔「言語・社会心理学班〕、（ii）その言語表現〔「言語類型論・対照研究班〕および（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）〔「第二言語習得班〕にどのように反映されているのかを解明することを目標とし、班ごとに共同研究を進めた。

（i）は研究成果の一部が国際学会での発表、国際雑誌での論文掲載という成果が上がり、次の課題に向けて、引き続きデータ収集を行っている。

（ii）は共同研究会での議論等を踏まえ、成果を論文集の形でまとめるところまで進んだ。

（iii）インドでのデータ収集、「なたね」の platform で分析・公開が実現できた。類型論の方法論に基づく第2言語習得研究は新しい研究分野であり、その方法論について今後も引き続き研究を続ける予定である。

また、当初の目標に加えて、言語類型論班のメンバーを中心に、Mouton 社 *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* の英文原稿の執筆計画作成を開始した。2014年中に刊行を目指す。

参加機関名	岡山大学、小樽商科大学、神戸夙川学院大学、青山学院大学、東京大学、北海道大学、名古屋工業大学、京都府立大学、美作大学、京都大学、金沢大学、昭和女子大学、神戸大学、神田外語大学、東京外国语大学、東北大学、同志社大学、富山大学、防衛大学校、名古屋大学、総合地球環境学研究所、サンフランシスコ州立大学
共同研究員数	63名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多文化共生社会における日本語教育研究	日本語教育研究・情報センター教授	迫田久美子	2010.4-2014.3

《研究目的及び特色》

2009年の国際交流基金の調査では、世界の日本語学習者の数は365万人を超え、日本政府は2020年を目処に留学生30万人計画を発表、近年では看護・介護士の労働力を外国人に期待しており、日本社会の多言語化、多文化化がさらに進むことが見込まれる。

このような現状をふまえ、本プロジェクトでは、第二言語習得研究、対照言語学、社会言語学、心理言語学、コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により、多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について、実証的な研究を行う。特に2012年度以降は、専任の教授が2名増員されたことに伴ってサブプロジェクトの再構成を行い、「コミュニケーションについての研究」という中核的テーマのもと、各サブプロジェクト間の一層の連携を図る。研究の成果および研究の過程で蓄積されたデータは、教育現場での活用も視野に入れて積極的に発信する。

《2012年度の主要な成果》

プロジェクトリーダーは、韓国語話者3名、中国語話者3名の日本語学習者の3年間の縦断調査による発話データ（約47時間分、約87万語）をC-JAS（Corpus of Japanese as a second language）として公開した。また、そのデータを分析、日本語学習者の誤用を学習者のストラテジーととらえ、習得過程で見られる日本語使用の特徴を取り上げ、「日本語非母語話者の工夫」『日本語

『教育のためのコミュニケーション研究』(2012年5月 野田尚史編 くろしお出版)を執筆した。また、プロジェクトに関する具体的な活動としては、次の3つを行った。

1. 2012.11 「コミュニケーションのための日本語教育研究」のシンポジウムにおいて、誤用分析に基づき、日本語学習者の言語習得に関する発表を行った。
2. 2013.1 共同研究会を開催し、2012年度の成果発表を行うと同時に、日本語学習者の縦断調査の発話データ(C-JAS)を公開した。
3. 2013.3 NINJAL フォーラム「日本語を教えることの楽しさと難しさ」『グローバル社会の日本語のコミュニケーション—日本語を学ぶことはなぜ必要か—』で発表した。

学習者コーパスに基づく日本語学習者の習得に関する招待講演は、国内、海外合わせて11件、行った。

また、海外19地域、12の異なる母語の日本語学習者の言語コーパスの構築のためのグランドプランを作成し、韓国、台湾、国内（広島・浜松）での事前調査を経て、3月に上海で第1回のデータ収集調査を実施し、コーパス構築のための活動を開始した。

以上がリーダーの研究成果である。他の共同研究員の成果については、第IV章で述べる。

参加機関名	大阪大学、京都教育大学、一橋大学、横浜国立大学、広島市立大学、学習院大学、実践女子大学、上智大学、帝塚山大学、東洋学園大学、名古屋外国語大学、日本女子大学、広島国際学院大学、麗澤大学、国際交流基金、情報通信研究機構、サンフランシスコ州立大学、タマサート大学、ピッツバーグ大学
共同研究員数	55名

【領域指定型】7件

国語研が指定した特定のテーマを扱うプロジェクトで、外部の研究者をリーダーとする公募型の共同研究。

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約： 日本語獲得に基づく実証的研究	南山大学教授	村杉 (斎藤) 恵子	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

日本語獲得に関する研究は、過去に優れた記述的研究が行なわれているものの、その多くは、理論的研究の成果に基づいたものではないため、生得的な言語獲得機構がもたらす言語の普遍性に対し新たな知見を与える成果が限られている。また、理論的研究において中心的な役割を果たしてきた研究課題（格、複合名詞句構造、移動規則、削除など）は、これまでの獲得研究においては個別に扱われ、それらの獲得段階にみられる関係についての考察や分析はほとんど行なわれていない。本プロジェクトは、日本語に関する理論研究の成果を詳細に検討し、それを踏まえ、言語知識の普遍的属性を反映していると思われる現象の獲得過程を横断的かつ実証的に分析することを主な目的とする。さらに、日本語を母語とする幼児1名（1歳～3歳）の新たな縦断的発話コーパスの構築も行い、記述的な側面での貢献も目指す。本研究の主な意義は、以下の3点である。①日本語に関する理論研究を踏まえた実証的研究を行なうことにより、これまで明らかにされていない現象の獲得過程を明らかにし、言語獲得理論の構築に寄与する。②日本語に関する理論研究を獲得の観点か

ら考察することにより、言語理論研究に対して示唆を与える。③広く知られている幼児の誤用（格の誤用、自動詞と他動詞・使役動詞の代替誤用、複合名詞句内の「の」の過剰生成等）に対し、理論的研究の成果に基づいた新たな示唆を与える。

《2012年度の主要な成果》

本プロジェクトは削除現象、WH-移動、CPを中心とした右方周辺部分の構造、関係節構造、TP構造、格、複合述語文に関する諸現象に関して、言語理論研究と言語獲得研究の両面を射程に入れた研究であるが、共同研究員各自が言語理論と言語獲得研究を繋ぎ貢献しうる研究を具体的に進め、国内・国際会で発表するとともに、共同研究としての成果の中核となる部分がほぼまとめられた。

また、日本語を母語とする幼児の縦断的観察研究のデータ整理を着実に進めた。縦断的観察とテープ起こし（ドラフト）は、南山大学言語学研究センターによって過去5年にわたり行われてきており、本プロジェクトでは、南山大学言語学研究センターと連携し、コーパスあるいは資料集として公開できることをめざしている。

参加機関名	神戸大学、東北大学、南山大学、三重大学		
共同研究員数	6名		

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性－日本語諸方言の同意要求表現を中心に考える－	新潟大学准教授	岡田 祥平	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

従来の日本語話し言葉音声のアノテーションは、音声そのものの記述（分節音・音調）に主眼が置かれる傾向にあった。しかし、音調、特に文末の音調は発話意図と密接な関係があり、文末音調と発話意図とを統合したアノテーションを行うことが出来れば、音声研究のみならず、文法研究にも資するところがあろう。そこで、本共同研究では、音調と発話意図とを統合したアノテーションの可能性を模索することを目的とする。「アノテーションのしやすさ」という観点からは、まずは有標の現象を取り上げるのが妥当であると考える。そこで、本共同研究においては、日本語諸方言における同意要求表現の音調を分析対象の中心に据えることとする。その背景として、日本語諸方言における同意要求表現は、種々の先行研究で、他の発話意図とは異なる（有標の）文末音調が観察されるという報告や、当該発話意図に特化した表現形式が観察されるという報告があることが挙げられる。また、調査対象地点も、種々の先行研究において、同意要求表現特有の音調が存在するという報告がある場所を選択した（首都圏・愛媛県宇和島市）。

《2012年度の主要な成果》

①首都圏若年層の対話音声について、同意要求表現（「～クナイ」「～ジャナイ／ジャネ」）に付随して生起する音調の分析を行った。また、その音調のアノテーション方法について具体的な目処をつけた。すなわち、同意要求表現（「～クナイ」「～ジャナイ／ジャネ」）に付隨して生起する音調である「とびはね音調」、従来の音調記述方法（具体的には、X-JToBI）で基本的には対応できそうである、という見通しを得た。

②「音声研究者の立場からの研究に対して文法研究者の知見を、（方言）文法研究者の立場からの研究に対して音声研究者の知見を、それぞれ交換し、研究の分野の垣根を超えた交流を図り、研究の深化を目指す」については、十分に目標を達成したとは言えないものの、共同研究員が音声研究者、（方言）文法研究者の立場から研究を進めた。

参加機関名	大阪大学、京都産業大学、新潟大学、山梨大学
共同研究員数	5名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発	東京大学教授	峯松 信明	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
本研究は、日本語音声教育の発展に寄与することを目的とする。学習者は上級になるほど自然なアクセント・イントネーション習得を望んでいるが、従来体系的な教育が多くの機関で行われず、教材が不足し、教授法が未確立である。我々は、少なくとも共通語（東京方言話者の）アクセントに関する情報を学習者に与えるべきとの立場に立ち、比較的変形が規則的な用言のアクセント教育を支援する。なお既存のアクセント辞書は、辞書形のアクセント型が主たる記述で、アクセント変形は規則の例示があるのみで学習者にとって理解しにくく、また高価である。そこで基本活用形に関して、アクセント変形を視覚的、網羅的、聴覚的に呈示する無償のオンラインアクセント辞書を開発する。次に、基本活用形以外の複雑な後続語表現に対しても、そのアクセント型を示すモジュールを開発する。更に、用言以外の任意の文入力に対して、それを読み上げた時に予想されるピッチパターンを、アクセント変形を考慮した上で呈示する韻律読み上げチュータも開発する。この韻律読み上げチュータの開発には高精度なアクセント変形予測モジュールが必要となるが、これは、機械学習を用いて実装する。これらの辞書やモジュールは、東京方言話者ではない母語話者、非母語話者教師自身の参照用としても有用である。本辞書は規範となるアクセント情報を探求するが、アクセントは揺れを有するのも事実である。日本語話し言葉コーパスを用いた揺れの実態調査を行ない、辞書記載に反映させる。			
《2012年度の主要な成果》			
アクセント辞書の充実のみならず、後続語検索モジュール、韻律読み上げチュータモジュールの開発まで行い、日本語教育に対して当初の予定を遥かに越える貢献ができたものと想定される。既に世界中の日本語教師を対象としたアンケートを実施、終了しており、来年度以降の拡充を検討している。			
参加機関名	東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、吉林華橋外国語学院		
共同研究員数	8名		

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化	宇都宮大学准教授	森 大毅	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
<p>音声が伝達するパラ言語情報および非言語情報は、音声学・語用論を含む言語学だけでなく、音声認識・理解・合成を含む知能情報学、心理学・行動科学などの多彩な学問分野において強い関心が向けられており、パラ言語・非言語情報のアノテーションを含む音声言語資源の整備は極めて重要である。しかし、このような言語情報を超えたアノテーションの研究は未成熟であり、研究コミュニティ（学問分野・流派）や個別のコーパス開発の枠を超えた共通のディシプリン構築が喫緊の課題である。</p>			
<p>本研究は、発話の意図・態度、話者の感情状態、話者の個�性などに代表される、パラ言語情報および非言語情報に関する基本概念として、(1) 何が含まれ、(2) それらの本質は何か、を整理し体系化することを目的とする。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>日本音響学会 2012年秋季研究発表会において、スペシャルセッション「音声が何を伝えているか、もう一度考えてみよう」を実施した。本共同研究のメンバーである森・中村・高梨による招待講演の狙いには、当該研究分野のチュートリアル的な側面、本共同研究プロジェクトの中間報告的な側面、そして今後の当該研究分野への問題提起と議論の喚起の側面がある。本スペシャルセッションは研究方法に掲げた「様々な専門分野の研究者と調査結果について議論する」ことの実践の一環であり、本スペシャルセッションを成功裏に終えられたことで、研究目標に掲げた「研究コミュニティや個別のコーパス開発の枠を超えた共通のディシプリン構築」を着実に前進させることができた。</p>			
<p>また、これまでの文献調査に基づき、本年度は基本概念の文脈化のための因子の整理と文献データベースの構築を開始した。このために、文献管理システム Mendeley を活用し、メンバーが共同で文献データベースを構築するための環境を整備した。</p>			
参加機関名	宇都宮大学、京都大学、東北工業大学		
共同研究員数	6名		

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究	神戸大学教授	松本 曜	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
<p>今までの移動表現の類型論的研究においては、ダイクシス動詞が果たす役割について正当な注目がなされてこなかった。しかし、日本語などの言語の移動表現の性質はダイクシスを無視しては明らかにできない。本研究の目的は、そのダイクシス動詞の役割に注目することにより、日本語の性質がうまく捉えられるような、移動表現の新しい類型論を打ち立てることにある。</p>			
<p>本研究の特色として、通言語的な実験的研究を行うことが挙げられる。このような手法は Max Planck Institute などで意味の類型論的研究において用いられてきたものであるが、日本国内ではあまり例を見ないものである。その調査をもとに、各言語（特に日本語）が、1) どのような場合に</p>			

ダイクシスを表現し、どの場合に無視するか、2) 表現する場合に、移動の要素（様態、経路）との競合の中で、どの要素によって表現するのか、の二点を明らかにする。このような詳細な研究は、日本語の特色に迫る上で重要な意味を持つ。

《2012年度の主要な成果》

本年度は、データの収集と分析に重きを置いた。共同研究員を拡大し、当初の予定よりも多くの言語のデータを集めた。実験Aのデータの収集は、一部の言語を除いてほぼ終了したと言って良い。さらに、データが出そろった言語に関してデータの約半分に関する分析を進め、各言語の移動表現の基本的な性質を統計的に比較できるようになった。そのデータは、諸言語における移動表現の共通性と差異の検討に生かされ、国内で口頭発表の形で発表された。また、関連する研究の出版（海外）の準備を進めた。

参加機関名	上智大学、大阪大学、神戸大学、東京大学、防衛大学校、神田外語大学、神戸市立工業高等専門学校、滋賀大学、慶應義塾大学、岐阜大学、関西大学、内蒙古大学、リヨン第2大学、西アフリカ・カトリック大学、ナポリ東洋大学		
共同研究員数	17名		

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究	北星学園大学 教授	柳町 智治	2011.10-2014.9

《研究目的及び特色》

人々の実際の会話には数多くの、発話の繰り返し、言いさし、言いよどみ、重なり、ポーズといった現象が見られる。こうした現象は、本来完全であるはずの発話が不完全な形で産出された「ノイズ」ではない。むしろこれらは、近年の相互行為、会話分析の研究が明らかにしているように、「参加者間の会話への参加が微妙に調整されながら組織されていること」を強い形で示している。本プロジェクトの目的は、以上の視点から、参加者がどのように他者と協働的に個々の相互行為に参加し、社会的実践を行っているのかを明らかにすることにある。

さらに、近年では、人々の相互行為を発話以外のリソースも含め捉えることの重要性も議論されている。「言語、非言語、人工物は、並列しあわいに意味を与え合いながら人間の行動をかたち作っている」(C.Goodwin 2000) という「マルチモダリティ」の分析視点である。本プロジェクト研究においても、文脈中の諸リソースがどのように母語話者および第二言語話者による相互行為の組織化に関わっているのかを日本語のデータをもとに解明していく。

《2012年度の主要な成果》

公開の研究発表会だけでなく、7回にわたってデータセッションを行った。

後半になって新たに4名の共同研究員が参加したが、このことは、プロジェクト全体のテーマや調査フィールドの拡張、そしてデータ分析の深化・精緻化につながるという効果をもたらした。データセッションに講師やゲストを招くこともそうだが、国内外の関連研究会との横のつながりが強化されるというメリットもあった。

参加機関名	東京国際大学、北星学園大学、北海道大学、早稲田大学
共同研究員数	8名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築	実践女子大学教授	山内 博之	2011.10-2014.9
《研究目的及び特色》			
<p>現在の日本語教育における文法シラバスでは、初級で助詞や活用などの日本語の基本的な文型に関わる要素をひと通り教え、中級以降では複合辞や機能語を教えるという文法観があると言われている。この文法観の影響が大きいのは、現時点でもっとも普及している『みんなの日本語』（スリー エーネットワーク）や、世界で50万人以上が受験する日本語能力定試験の文法観でもあるからである。ただ、この文法観は必ずしも客観的なデータに基づいて導かれたものとは言えないのが実情である。また、一部の研究者からは、受身形などは初級の文法項目では難しすぎるという批判も出ている。データの整備が進み、比較的規模の大きい学習者コーパスが利用できるようになった今、学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスを構築する意義は大きい。さらには、BCCWJなど日本語母語話者コーパスも援用して、日本語母語話者の使用実態も考慮に入れた語彙・文法シラバスの構築を目指す。</p>			
<p>学習者コーパスは、第二言語習得分野ではよく用いられているが、使用者が限られており、日本語文法研究や実際の日本語教育に役立つところまでの広がりは十分とは言えない。学習者コーパスによって見出された日本語習得の難易度は、現実の日本語教育に貢献されるべきであり、また、貢献してこそ「日本語学習者会話データベース」など学習者コーパスの意義が広く認知されると言える。本共同研究では、日本語教育文法、第二言語習得、日本語教育方法論、学習ストラテジー、学習ビリーフなど、日本語教育における幅広い分野の研究者が共同で学習者コーパスを用いて研究を行う。目標は、日本語習得の難易度を考慮した語彙・文法を収集し、それらを基に日本語教育における初級・中級・上級シラバスを構築することである。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>年間に5回の共同研究を開催した。国際化に関しては、海外共同研究員（タイ）の発表の機会を持つことができ、また、共同研究員がアメリカ、中国、香港、台湾など海外での発表・講演などを行った。</p>			
<p>また、将来、研究成果を出版物として公開するために出版社と交渉を進め、その計画がより具体的なものとして進められるようになった。</p>			
参加機関名	関西学院大学、北見工業大学、首都大学東京、一橋大学、横浜国立大学、岡山大学、金沢大学、群馬大学、広島市立大学、広島大学、山口大学、実践女子大学、神戸女学院大学、相模女子大学、筑波大学、帝塚山大学、福岡女子大学、名古屋外国語大学、明海大学、鳴門教育大学、日本学術振興会、香港中文大学、チュラロンコン大学		
共同研究員数	31名		

【独創・発展型】 8件

独創性に富む斬新なテーマを扱う中小規模プロジェクト。

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
複文構文の意味の研究	理論・構造 研究系客員教授	益岡 隆志	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
日本語の複文の研究は単文の研究に比べ個別的な研究に偏りがちな傾向にあり、その進展は十分なものとは言いがたい。その現状を踏まえ、本研究では、日本語の複文研究に携わっている研究者の共同研究により、複文の総合的研究を行う。			
本共同研究は、様々な分野・地域の研究者をつなぐ「交流・対話の場」とし、個別的なテーマに絞り込むのではなく、総合的なテーマを設定し、多様な研究の方向へ発展させることを目指す。			
《2012年度の主要な成果》			
研究発表会（5月及び9月）と公開シンポジウム（12月）を実施した。本プロジェクトは運用複文構文・連体複文構文、文法史、コーパス言語学、言語類型論・対照言語学の4つの班で構成されるが、研究発表会・公開シンポジウムでは、これらすべての班で発表者・講師を依頼した。公開シンポジウムでは、各班から講演を依頼するとともに、班別にプロジェクトの中間報告を行った。研究発表会・公開シンポジウムの広報を積極的に行い、若手研究者を含む多数の参加者を得た。研究発表会・公開シンポジウムでの発表資料（計14件）を研究所HPにより公開した。また、海外の研究文献（学術論文）の情報収集の方法を検討した（その報告書を研究所HPにより公開した）。			
参加機関名	神戸市外国語大学、学習院大学、首都大学東京、筑波大学、名古屋大学		
共同研究員数	6名		

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
接触方言学による「言語変容類型論」の構築	時空間変異 研究系准教授	朝日 祥之	2009.10-2012.9
《研究目的及び特色》			
本プロジェクトは、様々な特性を持つ地域社会で生じている言語変容の類型化を、文献調査、実時間調査の手法を用いて行うことを目的とする。2011年に刊行されたPeter Trudgillの <i>Sociolinguistic Typology</i> (Edinburgh University Press) をその類型化の手がかりとし、日本国内外で形成された地域社会（地方都市、ニュータウン、移民社会）をフィールドとした調査研究を実施する。類型化を行う上でPeter Trudgillをはじめとする関連領域の研究者にもプロジェクトに参画してもらい、検討を行う。			
本研究領域は、国内外の研究動向を踏まえてもまさに前衛的な研究であり、社会言語学、接触言語学、言語類型論などの領域への貢献が期待でき、方言研究の新たなアプローチの確立を目指すものである。			

《2012年度の主要な成果》

国内外にある様々な特性をもった地域社会を対象に、既存調査の調査票を用いた経年調査（札幌市、釧路市、岡崎市）、新規調査（北海道全域～日本海域、鹿児島市・福岡市・札幌市・東京都）、既存の音声資料を活用した研究（ハワイ）、先行研究を活用した研究（奈良田、秋山郷、西神ニュータウン）を実施し、それぞれの地域社会で形成・変容する地域方言の類型化を試み、調査結果は著編著、論文、国内外の学会・国際会議で成果報告を行った。2012年度においては、共同研究員である Paul Kerswill 氏を日本に招き、時空間変異研究系主催の JLVC Talk での講演をはじめとして、関連テーマについて議論した。研究成果の国際的な発信の場として、NWAVALP (New Ways of Analyzing Linguistic Variation in Asia Pacific) を国立国語研究所で主催した。そこで研究プロジェクトの成果を発信した。

参加機関名	愛知大学、大阪大学、鹿児島大学、神戸松蔭女子学院大学、首都大学東京、福岡女学院大学、北星学園大学、ノートルダム清心女子大学、北海道方言研究会、アグデル大学、ジョージタウン大学、ニューアイランダ大学、ランカシャー大学、国立シンガポール大学、マックスプランク研究所
共同研究員数	14名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
大規模方言データの多角的分析	時空間変異 研究系准教授	熊谷 康雄	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

国立国語研究所では、日本の方言研究の基盤的な資料である『日本言語地図』（調査期間 1957～1965、調査地点数 2,400、調査項目数 285）や「各地方言収集緊急調査」（調査期間 1977～1985、全国約 200 地点）の資料等の電子化・データベース化を進めてきた。これらは全国レベルの大規模な方言研究の資料であり、日本の方言研究における重要な資料である。本研究では（1）『日本言語地図』データベースや全国方言談話データベースなどの資料・データの整備を研究基盤として進めるとともに、（2）既に電子データが公開されている『方言文法全国地図』等の利用も視野に入れ、計量的方言研究、言語地理学、日本語史、談話研究など専門を異にする共同研究員が、これらの大規模方言データを共同利用し、複数の視点から多角的に研究を実施する。研究の基盤となる大規模方言データの整備ならびにこれが持つ可能性を引き出す多角的な研究を通して、ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する新たな知見の獲得、研究方法の開発、研究基盤となる資料・データの整備・共有、公開や利用法の蓄積などを行う。

《2012年度の主要な成果》

『日本言語地図』データベース (LAJDB) の構築を進め、今年度新たに 18 項目を整備し、共同研究員間で共有化した。これにより研究期間中に合計 119 項目（地図化されている項目、240 項目のほぼ半数）まで整備した。データの一部（55 項目）を用いた分析を行った。これまで LAJ の全国的な視野での計量的分析は多くは個々に手作業で作成した県単位の集計データによるものであったが、LAJDB のデータでは LAJ 全地点について地点単位の集計が可能になる。探索的な分析により（1）語の併用現象の起こり方に有意味な地理的な分布が観察されること、（2）標準語形数の全国分布を地点単位で観察することにより、詳細なパターンを見ることができ、交通網等、言語外事象との関係も明瞭な観察ができること、（3）全体像が見えていなかった LAJ の併用処理（標準語形

と一致し、共通語的、上品、新しい、稀などの注記のある回答を掲載しない）の地理的分布に有意な分布があり、標準語形の分布、併用処理数の地点別集計と併用現象などとの連続的な関係などが観察できることなど、方言分布の形成、方言の伝播に関する有効な分析の見通しを得た。なお、2012年度は最終年度であり、12月に「大規模方言データの多角的分析」ワークショップ：言語地図と方言談話資料を開催、2013年3月に共同研究報告『大規模方言データの多角的分析：言語地図と方言談話資料』を取りまとめ、印刷刊行した。

参加機関名	信州大学、東北大学、和歌山大学、群馬県立女子大学、関西大学	
共同研究員数	10名	

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語文法の歴史的研究	時空間変異 研究系 客員准教授	青木 博史	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
本プロジェクトは、日本語の歴史に正面から取り組む研究である。歴史的変化という観点から日本語のしくみを考え、言語の構造を明らかにすることを目的としている。			
言語のしくみを考えるにあたって歴史的観点からの研究は必要不可欠なものであるが、中でも文法に関する研究は、現代語の記述に対しても有効にはたらくものとして重要である。本プロジェクトは、古典語における単なる観察・記述にとどまらず、現代語（方言も含む）までを視座に収めながら歴史変化を描く研究、あるいは現代語との対照を意識しながら理論的にも有用な研究を目指している。これらの研究成果については、国内外の学界に向けて広く発信していくものとする。			
《2012年度の主要な成果》			
公開の研究発表会を2回開催した。若手研究者の参加を呼びかけ、さらには発表の機会を与えるなどの取り組みを行った。1人あたり約90分の持ち時間の中で発表・質疑応答を行い、存分に濃密な議論を交わすことができた。			
12月には『日本語文法史研究1』（ひつじ書房）を刊行した。本邦初となる、日本語文法史をテーマとした、継続誌としての論文集である。論文だけでなく、研究文献目録やテーマ解説、書評などの内容を盛り込んでおり、「日本語文法の歴史的研究」の魅力を学界に向けて広く発信するものとなっている。研究者ネットワークを広げる場、さらには若手研究者の育成の場として、本プロジェクトの目標を体現した成果となっているといえるだろう。			
参加機関名	愛知県立大学、國學院大學、九州大学、実践女子大学、成城大学、聖心女子大学、千葉大学、東洋大学、名古屋大学、福岡大学、早稲田大学		
共同研究員数	10名		

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化	言語資源研究系 客員教授	伝 康晴	2011.11-2014.10
《研究目的及び特色》			
<p>近年の電子化文書の普及により、書き言葉コーパスの構築は飛躍的な発展を見せており。言語資源研究系・コーパス開発センターでは、1億語を超える規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を開発し、さらに100億語を超える規模のWebコーパスの開発を目指している。これに対して、話し言葉コーパスは、音声収録・転記など開発の初期段階での負担が大きく、学会講演や模擬講演などの独話を中心とする『日本語話し言葉コーパス』を除いて、大規模なものは存在しない。とくに我々の日常の言語行動の中心である会話に関しては、個々の研究プロジェクトごとに小規模なデータを独自に収集・利用している状態を脱していない。</p>			
<p>本研究では、これに対する一つの解決策として、既存の会話コーパスの共有化という方式に着目する。小規模データを所有する研究プロジェクトは多くあり、それらは音声収録・転記の段階を終え、負担の大きい初期のハードルをクリアしている。しかし、転記基準は不統一であり、韻律情報や発話機能など会話研究に必要な基本情報は必ずしも完備していない。そこで、これらの基本情報に関する共通のアノテーションを施し、相互利用可能な形でデータを共有することを目的とする。</p>			
<p>将来的には、より大規模な会話コーパスの開発を目指し、言語資源研究系・コーパス開発センターが推進しているKotonoha計画の「対話・雑談」コーパスの構築へとつなげたい。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>①『日本語話し言葉コーパス』方式と会話分析方式の転記仕様の共通化を検討し、『千葉大学3人会話コーパス』(一部)に対して施行した。</p>			
<p>②共通に付与する基本情報として、韻律情報は『日本語話し言葉コーパス』方式の拡張を検討し、発話機能は隣接ペアと遡及的連鎖の認定方法の検討を始めた。</p>			
<p>③以上の成果、および、メンバー各自の保有するコーパスの分析に基づく研究成果を国内外の論文16編、発表・講演38件として公表した。</p>			
<p>④若手研究者3名を参画させ、10件の研究成果を得た。</p>			
<p>公開発表会によって成果を公表するとともに、他のプロジェクトと共に開催で公開シンポジウムを開催した。</p>			
参加機関名	宇都宮大学、関西学院大学、京都大学、慶應義塾大学、千葉大学、広島国際大学、広島女学院大学、三重大学、早稲田大学		
共同研究員数	10名		

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
近代語コーパス設計のための文献言語研究	言語資源研究系 准教授	田中 牧郎	2009.10-2012.9
《研究目的及び特色》			
<p>国立国語研究所に対しては、日本語の史的研究に幅広く活用できる通時コーパスを構築し、これを活用した日本語史研究を多彩に展開することが期待されている。基幹型プロジェクト「通時コーパスの設計」が、江戸時代までを対象とした「通時コーパス」の設計を行うのに対して、本プロジェクトは、明治初年（1868年）から第二次大戦終了（1945年）までを扱う「近代語コーパス」の設計を行うための研究として位置付ける。また、すでに構築されている「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「通時コーパス」を接続する際の問題点を整理し、日本語の歴史を総合的にとらえる通時的なコーパスの設計に役立つ形で、研究成果をまとめしていく。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>研究目的に応じる研究成果を集めた報告書を「国立国語研究所共同研究報告」としてまとめ、今後構築するコーパスのモデルとして『明六雑誌コーパス』を完成させ公開した。研究報告書は「コーパスの設計」「コーパスの活用」の二部構成としたが、この構成にしたがって成果の要点を挙げるところの通りである。まず、コーパスの設計に関しては、資料選定、文字処理、形態素解析、モデルコーパスの構築の四分野にわたって、近代語コーパスの構築作業に進む際に重要な論点となることを精選して議論した。また、コーパスの活用に関しては、語彙研究、文法研究、日中韓対照研究の各分野において、コーパスを使うことで従来の研究を大きく進めた研究が可能になることを、具体的な研究事例によって示した。</p>			
参加機関名	明治大学、二松学舎大学、大阪大学、岩手大学、成城大学、北京外国语大学、啓明大学校		
共同研究員数	10名		

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成	言語対照研究系 教授	Prashant Pardeshi	2009.10-2012.9
《研究目的及び特色》			
<p>本研究の学術的な目標は、関連分野の知見を結集し、「理想的な日本語基本動詞用法ハンドブックのプロトタイプ」の開発を目指すことである。また、応用的な目標は、当該プロトタイプに基づいて、世界の日本語学習者の体系的且つ効率的な学習に役立つ日中、日韓、日英、日=マラーティー語版の日本語基本動詞用法ハンドブックの作成を試みることである。所内の言語資源研究系との連携で『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を最大限に活用し、コーパスから見えてくる頻度、コロケーション、文型などに関する知見を研究成果に反映させる。また、研究情報資料センターを通じて研究成果のデータベース化および公開を図り、日本語教育研究・情報センターを通じて世界の日本語教育現場への還元を図る。</p>			
<p>特色：日本初・世界初の機能を盛り込んだハンドブック・辞典の開発を目指す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーパス準拠のネット版のハンドブック・辞書 			

- ・語義ごとのコロケーション表示と、コーパスの実例との連動
- ・コーパスにおける当該動詞の文法的な振る舞いに基づいた豊富な作例
- ・視聴覚コンテンツの導入
- ・認知言語学の知見の導入
- ・該当動詞の意味拡張・統語的な振る舞いの詳細な記述
- ・対照研究の知見の導入：学習者の母語の視点からの対照情報、学習上の注意点の記述
- ・ネット上で時間と空間を超えて見出し執筆・編集の実現

《2012年度の主要な成果》

2009年10月から2013年3月にかけて日本語研究の成果を日本語教育に応用する目的で、共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」を実施した。本プロジェクトで作成している「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」では編集方針、見出し語の内容、執筆・編集方法のいずれにおいても従来の辞書にはない新たな試みが行われ、共同研究報告書『日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成』を刊行した。

参加機関名	愛媛大学、関西学院大学、関西大学、岐阜大学、九州大学、慶應義塾大学、神戸大学、神田外語大学、早稲田大学、大阪大学、大東文化大学、筑波大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京大学、東北大学、美作大学、北海道大学、名古屋大学、鳴門教育大学、麗澤大学、国立情報学研究所、延世大学校、慶一大学校、北京外国语大学、北京日本学研究センター、EFL大学、ジョージア工科大学、サンフランシスコ州立大学、ピッツバーグ大学、メルボルン大学
共同研究員数	54名

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究	日本語教育研究・情報センター准教授	野山 広	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

本プロジェクトでは、主として旧センター（日本語教育基盤情報センター）で実施した縦断調査（約2年半）で得られた会話データの分析や新たなデータの収集・整備、分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ、蓄積する。そのことで、多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得、言語生活の実態をより的確に捉え、日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ応えようとする、応用言語学的アプローチの基盤を築くのが目的である。

特色は、定住外国人の日本語習得と言語生活の実態を探るために、その方法として、例えば地域の定住外国人＝日本語学習者の会話データの収集のためにOPIの枠組みを活用したインタビューを実施し、そのデータを毎年1回ずつ収集しながら旧センター時代から現在に至るまで、5年間の縦断調査を行ったことである。また、こうした調査やデータ収集に際しては、ウェルフェア・リンクダイスティクス（福利としての言語学）（徳川：1999）の考え方を尊重しつつ、以下のような現場生成型の調査方法を基盤として協働実践研究を行い、質的なデータの収集を重ねてきたことも特徴の一つである。

現場生成型研究（佐藤他：2006）の観点から、関係者へのインタビュー調査や協働実践活動等を行う。なお、現場生成型の研究では、地域の特徴や研究分担者・協力者の専門性や独創性を考慮しつつも、①～③の方法を基本として、協働実践研究を行い、大量調査では把握しきれない質的情報の収集を目指す。

- ①関係性の組み替えのための方法の模索
- ②自らその「場」に関与し、その関与を含めた実践活動と「場」の変容を観察し、記述するという方法の模索
- ③自らの関与を織り込み、関係性の中で自己の変容と「場」の相互変容を記述し、さらに課題解決にむけた新しい関係性の構築というダイナミックな過程をとらえる方法

《2012年度の主要な成果》

1. OPI の枠組みを活用した縦断調査で、学習者の会話データを中心に収集、文字化し分析することで、以下のことを明らかにした。
 - (1) 調査方法：縦断調査の場で、形成的評価として OPI を活用することの可能性と課題
 - (2) 会話の特徴 – 特に分散地域の生活の場で以下の会話の特徴がみられた
 - 1) 言い切りの形の有無が曖昧、2) 声真似による引用（直接話法と省略）、3) 地域方言と社会方言（地域特有のインプット）、4) 統語的・文化的に異なる言語規範を持つ、母語話者と非母語話者の共同作業、5) 地域の言語生活・環境がもたらす話題の展開、6) 発音の化石化とスタイルの習慣化
 - (3) 事例研究：スタイルの課題の分布と経年変化
2. 「話し合い」を通した外国人支援の可能性を探ることで、以下のことを明らかにした。
 - (1) 発話量の不均衡は OPI の日本語力とは必ずしも相関せず、以下の要因が大きく影響
 - 1) 滞日年数や年齢などによって、参加者間に非対称な関係性が生じる可能性がある。
 - 2) 「話し合いの目的」が共有されないことで、参加者間の関係性や話し合いの流れに影響を与える。
 - (2) 話し合いの過程に生じる問題（発話量の不均衡や言いたいことが言えない・他者の話が分からぬ）を日本語力に帰属させる傾向が強い
 - (3) 学習者同士の話し合いの場は実は少なく、情報共有の場としての意義が大きい

参加機関名	関西学院大学、佐賀大学、滋賀大学、東京国際大学、東京女子大学、名古屋外国語大学、常葉学園大学、モナシュ大学、イースタン・ミシガン大学、カリフォルニア大学
共同研究員数	15名

【萌芽・発掘型】 9件

研究系・センターの枠を超えた新たな研究領域の創成が期待されるプロジェクト。

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
会話の韻律機能に関する実証的研究	理論・構造 研究系准教授	小磯 花絵	2010.11-2013.10
《研究目的及び特色》			
<p>本研究の目的は、音声コーパスに基づく定量的分析を通して会話相互作用における韻律の特徴・機能を実証的に解明することである。会話における韻律の特徴や機能を検討する際、会話音声のみを分析対象とする従来の研究方法に限界があることを踏まえ、本研究では、同一話者による会話と独話を対象に韻律（句末音調や声の高さ・大きさ・速さ・ポーズ・言い淀みなど）の傾向を比較し、両者の類似点・相違点などを明らかにした上で、会話における韻律機能を会話固有の機能（話者交替や相槌など話者間の相互作用に関連する機能）と、会話・独話を含む話し言葉一般に見られる機能（統語構造や談話構造など多様なレベルの情報の終了性・継続性に関する表示機能など）に分けて捉え直す。具体的には、(1) 主に統語構造（従属度の異なる3種類の節単位情報や挿入構造・統治構造など）・談話構造（数段階の切れ目の強さで認定される談話境界情報）との関係から会話と独話の韻律の比較を行い、両者の類似点・相違点を体系的に明らかにすると同時に、(2) 会話研究の中で指摘されてきた個別現象（例：発話権保持のために文末のあとポーズを置かず文末から次の文頭まで発話速度を上げて発話する現象など）に着目して会話と独話の比較を行うことによって、韻律の機能について総合的に検討する。</p>			
《2012年度の主要な成果》			
<p>『日本語話し言葉コーパス』を対象に、主に、①上昇調・上昇下降調などの複合句末境界音調の発言継続表示機能の検討、②複合句末音調のピッチレンジ制御に関わる要因の分析、③発話中のF0に関わる主に統語的要因の分析、の三つの研究を実施した。また分析の対象とする『日本語話し言葉コーパス』を対象に、各種追加アノテーションや修正作業をした上で、リレーションナルデータベース（RDB）を構築し、CSJ-RDB version 1.0として3月に一般公開した。またCSJ-RDBの利用に関する講習会も開催した。</p>			
参加機関名	京都大学、広島大学、早稲田大学、国立情報学研究所		
共同研究員数	5名		

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
訓点資料の構造化記述	理論・構造 研究系准教授	高田 智和	2009.10-2012.9
《研究目的及び特色》			
<p>漢文訓点資料は、文字、音韻、語彙、語法などの面で、日本語史研究の資料として活用されてきた。訓点資料は歴史的・文化財的・教学的価値の高いものが多く、原本調査の難しいものが多い。そのため、重要典籍については、研究者による釈文や、影印、複製が公刊されているものもあるが、釈</p>			

文は純然たる一次資料ではなく、影印、複製それ自体が稀観品であったり、白黒印刷であったりと、研究利用にあたって少なからず問題もある。また、訓点資料研究においては、釈文の電子テキスト化や、原本の画像化など、総じてデジタル技術の導入が、他の分野に比べて立ち遅れている現状である。

本研究では、国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』（平安末期書写加点）を例に、(1) 原本調査に基づいて、解読結果である釈文の構造化記述の方法を検討し、(2) 釈文と原本デジタル画像とを対照表示できるシステム開発の基礎研究を行う。総じて、資料研究における共同利用・共同研究のやり方を模索し、国立国語研究所における資料研究の定着を図る。

また、韓国の口訣資料を扱う研究者との共同研究によって、研究方法や資料共有について知見を交換するとともに、漢文訓読の日韓対照研究の可能性を探ることも視野に入れる。

《2012年度の主要な成果》

(1) 国立国語研究所蔵金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經閲覽システムの公開

<http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/>

(2) 国立国語研究所共同研究報告 12-8『訓点資料の構造化記述成果報告書』

参加機関名	札幌大学、富山大学、立命館大学、早稲田大学、岐阜高等専門学校、崇実大学校、ソウル大学校
共同研究員数	9名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
首都圏の言語の実態と動向に関する研究	理論・構造 研究系助教	三井はるみ	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

首都圏の言語は多様性・多面性に富むが、研究対象としては、それぞれの方法論にしたがった角度から部分が切り取られ、分析が行われてきた。これまでの代表的な研究は、(1) 近世期の江戸語から東京語がどのように成立したかを捉える「東京語」研究、(2) 伝統的地域方言としての関東方言・東京方言を記述し、分布と変化を捉える「東京方言」研究、(3) 社会調査の手法を用いた大規模調査による「都市言語」研究、に大別される。さらに 1990 年代後半以降は、「首都圏」という地域を指定して、その内部における言語の実態と動向を、背後にある言語意識とともに捉えようとする「言語動態」研究が現れた。

これらの研究はそれぞれに成果を挙げ、知見を蓄積してきた。しかし、多様・多面的である首都圏の言語の全体像を見通すためには、個々の研究がそれぞれに精緻化を図るだけでなく、再びそれらを総合する必要がある。そのためには、それぞれの方法論による研究成果を相互に参照し、取り入れ、首都圏の言語の実態と動向を総合的に捉えることが求められる。

本研究では、言語構造と動態の両面にわたって、首都圏の言語の実像を多角的重層的に把握し、この地域の言語を対象とした、記述的研究、言語地理学的研究、社会言語学的研究、計量的研究の相互乗り入れを図り、首都圏の言語の総合的研究の基盤を築くことを目的とする。

首都圏の言語の多様性がどのように存在し、生まれつつあるか、具体的なケースから明らかにする。そのための一つの観点として、現代首都圏における地域差がどのような言語項目・言語意識に見られるか調査により把握する。

《2012年度の主要な成果》

プロジェクト全体として、論文4件、報告書2件、発表・講演9件を公表した。

1. 研究会活動：公開の共同研究発表会（2回）、共同研究員を中心とした懇話会（2回）、ゲストスピーカーによる勉強会（2回）を開催した。勉強会は、伝統的東京方言話者言語調査・収録を兼ねて実施した。
2. 新規調査研究活動：2011年度に開発した携帯電話を用いた言語調査システムの改良を行った。首都圏の言語の多様性を具体的なケースから明らかにするために、同システムを用いて、首都圏の大学生を対象に、非標準形の使用と意識に関する共同アンケート調査を行った。結果の一部を、学会（3件）等で報告した。また、2012年度に実施した「首都圏における方言の地域資源としての利用に関する調査」「全国若者語調査」の結果を集計・分析し、共同研究発表会で報告するとともに、論文、報告書としてまとめた。
3. これまでの研究資産を見直し再構築する活動：「首都圏の言語に関する研究文献目録」の作成を継続し、試作版を内部公開した。主要研究レビュー1件を公表した。『東京語アクセント資料』と同調査票の電子化を完了した。「東京のことば研究者インタビュー」2件を実施し、文字化資料を整備した。この他、プロジェクトの活動から得られた知見を踏まえて、自治体等による講演会での講演3件を行った。研究成果のWeb公開の準備を行った。

参加機関名	國學院大學、日本大学、文教大学		
共同研究員数	5名		

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
方言談話の地域差と世代差に関する研究	時空間変異 研究系准教授	井上 文子	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは、将来、方言談話の類型と変容に関する大規模な調査・研究を実施することを前提として、そのためのパイロット調査的な役割を果たすものである。重点地域において必要な諸データを得ること、次の点に関わる仮説や枠組みを明確にすることを目的とする。

1. 方言談話の収集・分析を通じて、文法研究および談話分析の観点から、実際の文脈の中における言語事象の使用実態や機能を把握する。
2. 地域間比較をおこない、方言談話の類型を記述する。
3. 世代間比較をおこない、その変容の方向を明らかにする。

本プロジェクトは、時空間変異研究系が目標とする「現在および過去における地理的・社会的変異、歴史的变化の様相を解明する」研究として位置づけられ、「方言の全国調査、琉球など消滅危機方言の調査、現代日本語の動態の解明、日本語変種の形成過程といった共同研究」を補完するデータを提供するものである。収録した方言談話は、研究者に活用されることを想定し、研究情報資料センターにも保存する。

《2012年度の主要な成果》

発話の意図が明確で、話の流れがとらえやすいロールプレイ会話を収集し、談話構造や談話展開の地域差について枠組みや仮説を立てることを目的として、方言談話の地域差・世代差・性差・場面差などを考察するためのパイロット調査を行った。収集した資料については、「方言ロールプレイ会話データベース」として公開するために、方言音声のテキスト化、共通語訳、注記付与など、

共有可能な言語データとしての整備をおこなった。また、「依頼」「勧誘」「申し出」などの場面を設定したロールプレイ会話を対象として、「きりだし」「状況説明」「行動の促し」といったコミュニケーション機能や機能的要素などの観点から整理を進めた。

参加機関名	関西大学、群馬県立女子大学、東京女子大学、広島大学、別府大学
共同研究員数	7名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
近現代日本語における新語・新用法の研究	時空間変異 研究系准教授	新野 直哉	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究は、近現代日本語の新語・新用法について、いつごろ、なぜ、どのように発生・拡大し、現在はどのような状況にあるのかを、文献調査に加え、アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また、言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し、言語の変異そのものの記述的研究に加え、これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は、古代語や中世語の言語変化の事例に対し、そのプロセスの観察や、背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である、というメリットがある。その成果として、日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で、本研究は、現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

《2012年度の主要な成果》

前年度2回にとどまった研究発表会を3回開催することができ、首都圏以外からや日経・NHKといったマスコミからの参加もあった。特に第3回は告知を約二か月前から積極的に行ったことも功を奏し21名（メンバー以外）という多数の参加者を得た。また、やはり前年度は果たせなかつた共同研究員の追加（鳴海伸一・京都府立大講師）、研究成果の査読付学会誌への掲載も果たすことができた。さらに、リーダーの新野が日本近代語研究会春季大会（5月・千葉大）で、共同研究員の梅林が表現学会全国大会（6月・共立女子大）で、共同研究の成果を発表した。また梅林はこの発表を論文化し、『表現研究』96集（10月刊）に掲載した。

参加機関名	京都府立大学、相模女子大学、花園大学、二松学舎大学
共同研究員数	5名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
統計と機械学習による日本語史研究	言語資源研究系 准教授	小木曾智信	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

言語資源研究系で基礎研究を行っている通時コーパスの構築には、さまざまな技術開発や研究手法の発展が必要とされる。技術開発の面では、形態素解析辞書こそ開発が進んでいるものの文節・長単位の解析は全く手つかずとなっている。また、歴史的資料は現代語と異なり、表記や語法の面

で極めて多様であるため、濁点の自動付与や仮名遣いの整備などの形態素解析前のテキスト処理が必要となるほか、形態素解析辞書の分野適応が必要になっている。本プロジェクトの目的の一つは、自然言語処理技術を用いてこのような通時コーパス構築に必要な基盤を整備することである。さらに進んで、Oxford VSARPJ Corpus のアノテーションを活用し機械学習による構文情報の自動付与の可能性を探る。

研究手法の面では、従来の手作業による用例収集をベースとした方法を超えて、タグ付きコーパスから引き出した大量の用例をもとに統計的な処理を行う新しい研究手法が必要とされている。「茶器」などのコーパス利用ツールを歴史的資料に対応させて人文系研究者に利用しやすくとともに、多変量解析等の手法を用いて実際の記述研究の成果としてまとめていくのがもう一つの目的である。

《2012年度の主要な成果》

技術開発の面では、共同で濁点自動付与システムを完成させ論文化したほか、形態素解析辞書「中古和文 UniDic」「近代文語 UniDic」をバージョンアップし前者について国際学会で発表した。また、太陽コーパスの形態素解析のために、新たに近代の旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書を開発した。日本語史研究の面では、日本語歴史コーパスを対象に対数尤度比（Log-Likelihood Ratio）を用いて会話文・地の文・和歌の特徴語抽出を行い中古語の語彙の文体差に関する研究を行ったほか、中古和文における個人文体とジャンル文体について多重因子分析等の多変量解析の手法を用いて共同研究を行った。

参加機関名	成城大学、東洋大学、奈良先端科学技術大学院大学、情報通信研究機構、日本学术振興会、オックスフォード大学
共同研究員数	8名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
テキストの多様性を捉える分類指標の策定	言語資源研究系 准教授	柏野和佳子	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

大規模なコーパスを様々な学術研究や教育に活用するためには、テキストを所望の目的で分類できるように多くの情報が付与されていることが望ましい。欧米では、1億語規模のBNCに対し、Lee (2001) が70種類（書き言葉46種、話し言葉24種）の言語使用域や、対象読者の性別や年齢層別、著者の属性等によって分類したものが知られている。書き言葉の使用域は、アカデミックか否か、人文科学・自然科学・医学・法律・技術・社会科学…か、エッセーかフィクションか手順書…か、手紙か新聞…か、等の観点で分類されている。

BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』）は、構築の段階でメディア（書籍、新聞、雑誌、Web等）、NDCによるジャンル（総記・哲学・歴史・社会科学・自然科学・技術、工学・産業・芸術、美術・言語・文学）により分類され、著者の属性や、書籍については日本図書コード（Cコード）による販売対象、発売形態等の情報が付与されている。よって、それらについては、Leeよりも詳細かつ正確な分類が構築時に実現していると言える。しかしながら、Leeがエッセーかフィクションか手順書…かという観点で分類を試みようとした、テキストの文体を捉えようとする分類情報がBCCWJには不足していた。

そこで、本研究では、テキストの多種多用な文体的な特徴を捉えるための分類指標の設計と検証を行い、コーパス言語学、テキスト研究の発展に資する理論とデータとを提供することとする。

コーパスの構築、および、コーパス言語学は、近年活況を帶びているが、テキストの文体的特徴に基づく分類指標の設計とデータの構築という本研究は、国内はもとより世界的にみても新規性、独創性は高い。

《2012年度の主要な成果》

コーパスの有効活用を図るため、コーパスの書籍サンプルを文体によって特徴づけることを目的に、書籍サンプルの分類指標の設計と付与を行った。対象はBCCWJ図書館サブコーパス収録の全10,551サンプルである。テキスト構造が単純（例：章節構造）なもの（全体の84%）については、内容・表現の文体的特徴により、専門度、客観度、硬度、くだけ度、および語りかけ性度、という5観点による分類指標を定め、主観的評定によって評価値を付与した。また、テキスト構造・紙面形式などの点で上記分類になじまないもの（全体の16%）を見出し、その特徴を表す別の指標を設定した。これらを通じて、図書館サブコーパスに収録される全サンプルの多種多様な形式の類型ごとの分布や、各類型のNDCごとの頻度を明らかにした。また、人手付与の一方で、機械判定を行い、両者の比較分析を行った。さらに、特に難易度については計算機による自動判定を行い、BCCWJ収録の全サンプルに難易度を付与した。

参加機関名	東京工業大学、名古屋大学、はこだて未来大学、早稲田大学		
共同研究員数	10名		

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究	言語資源研究系 准教授	山口 昌也	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

文脈情報は、従来から、シソーラスの自動構築、多義語の曖昧性解消など自然言語処理のタスクにおいて利用してきた。多くの研究では、「類似する文脈に出現する語は意味的にも類似している」という「分布仮説」を前提としており、文脈情報は一種の意味記述として利用されている。本研究プロジェクトでは、単語周辺の文脈情報から、複合的な言語要素（例：複合動詞）の意味記述（文脈情報）を合成的に導出する理論の確立を目指し（1）（個々の）単語周辺の文脈情報と、複合的に用いられたときの文脈情報との関係の解明、（2）文脈情報の表現方法などを含めた分布仮説の検証を行う。さらに、確立した理論の応用として、（a）複合的な言語要素の意味合成処理を実現し、その結果を言語学的観点から検証する、（b）日本語教育における複合動詞学習支援手法を開発する。

《2012年度の主要な成果》

複合的言語要素として、複合動詞に対象を絞り、複合動詞と前項・後項動詞との関係を合成的意味記述という観点から研究した。研究の過程で、次の三つの研究成果を得た。

1. 複合動詞と構成動詞との関係を分析するための基礎資料として、「Webデータに基づく複合動詞用例データベース」を構築した。本データベースには、複合動詞約3000語と構成動詞約1000語を収録する。データベースは、複合動詞の検索、用例・格要素一覧の閲覧機能をつけた上で、Web上に公開した。

2. 複合動詞と構成動詞の用法の類似性を定量的に表す指標として、複合動詞の格要素が構成動詞で用いられる割合「重複度」を提案し、試行実験を行った。
3. 実験結果は、研究者が用例を集め、検索する環境として、全文検索システム『ひまわり』を拡張した。拡張した機能の使用例として、「青空文庫」の作品（10677件）から『ひまわり』用検索データへの変換結果を作成し、一般に公開した。

参加機関名	学習院大学、南山大学、北陸先端科学技術大学院大学、麗澤大学、ワルシャワ大学	
共同研究員数	8名	

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
テキストにおける語彙の分布と文章構造	言語資源研究系 准教授	山崎 誠	2009.10-2012.9

《研究目的及び特色》

本研究は、コーパス開発センターで構築が進められている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されているひとまとまりの完結したテキスト（複数）等を対象にして、語（内容語及び機能語）の出現状況と時間軸に沿って展開される文章の流れとを有機的に関連付けて動的に捉える観点を提案し、計量語彙論に基づく定量的手法と、語の出現状況及び文章構造・文章展開のモデル化を通してより実証的な文章論を開拓するものである。語彙調査に代表される従来の計量語彙論は、断片的なテキストの集合を扱っていたため、文脈から切り離された分析が中心であった。そのため、文章展開や文章構造など、まとまりのある文章が持つ特徴との関係を把握することが出来なかった。本研究では、テキストにおける語彙の量的構造と文章構造及び当該テキストの持つ特性（表現意図、ジャンル、文体等）との相関を調査・分析し、語彙に内包された文章構成機能を明らかにする。

《2012年度の主要な成果》

プロジェクトリーダーとしてのとりまとめを行い、報告書をホームページで公開した。本プロジェクトは、これまで十分でなかった個々のテキスト内で語彙がどのように使用され、どう推移していくかという動的なテキスト研究である。具体的には、次のことを明らかにした。(1) 多義語が同一テキストの中の一定のまとまりの範囲では同じ意味で使われる傾向があることを示した〔担当：山崎誠〕。(2) テキストにおける結束性を段落間の類似度の分布として視覚化して示した〔担当：山崎誠〕。(3) 科学的入門書における「ている」の持つ「話題提供」「結論」の機能を明らかにした〔担当：江田すみれ〕。(4) 学術論文におけるメタ言語表現の分析をとおして論文の記述タイプよりも学術分野間の違いのほうが大きいことを示した〔担当：清水まさ子〕。

参加機関名	お茶の水女子大学、慶應義塾大学、実践女子短期大学、同志社大学、日本女子大学、北海道教育大学、国際交流基金、国立情報学研究所、統計数理研究所
共同研究員数	9名

人間文化研究機構では、人間文化研究の新たな領域を従来の枠組みを超えて創出し、先端的・国際的研究を展開するために、機構に所属する諸機関の間での連携研究など各種の事業を実施し、国立国語研究所もそれらの事業に参画している。

連携研究

人間文化研究機構を構成する個々の機関が培ってきた研究基盤と成果を、機関の枠を超えてつなぎ、補完的、有機的に結合させることで、新たな視座を開拓し、より高次なものに発展させようと企画、実施してきたのが連携研究である。東日本大震災を契機として、新たに「大規模災害と人間文化研究」というテーマの研究を国語研を拠点としてスタートさせている。

アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明

日本を含むアジア地域には、歴史的に形成された多様な文明と文化が存在する。とくに、文化はいわゆる自然とのかかわりのなかから生まれてきた。人間は自然からどのような恩恵を受け、あるいは災害や自然の脅威に対処してきたのか。この問いに、国語研では言語世界から見た自然への認識と思想、言語表現の多様性と普遍性という側面から研究を推進している。

研究課題：言語分析による自然観・自然思想の研究

研究期間：2010～2014

- ・昔がたりにみる自然観・自然思想の解明（木部暢子、時空間変異研究系教授）
- ・河川流域の自然・人間社会と方言の分布（大西拓一郎、時空間変異研究系教授）
- ・鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査（窪薙晴夫、理論・構造研究系教授）
- ・Rendaku across Dialects (Timothy J. Vance, 理論・構造研究系教授)

海外に移出した仮名写本の緊急調査

研究代表者：高田智和（理論・構造研究系准教授）

研究期間：2011～2012

海外に移出した仮名写本（米国議会図書館蔵『源氏物語』）について、同図書館との連携のもと原本調査を行い、翻字本文・書誌情報などの基礎研究成果を、国内外の日本語学研究者・日本文学研究者へ速報的に提供している。

- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文
(<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>)
- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木）
(http://www2.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/)

大規模災害と人間文化研究

国語研が総括班となって、「大規模災害と人間文化研究」と題する連携研究を2012年度に開始した。これは、東日本大震災以降、人間文化研究機構内で各機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき、それぞれのグループの連携・協力を図ることにより、人間文化という大きな視点から地域の復興を支援するとともに、今後、起きると予想される大規模災害に対して人間文化研究の立場か

らどう向き合うかについて検討することを目的とする研究で、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」、「B. 大規模災害とミュージアムの連携、活用の研究」、「C. 大規模災害と資料保存・活用の研究」に分かれる。このうち、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」の下に下記を実施している。

・方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究

研究代表者：木部暢子（時空間変異研究系教授）

研究期間：2012～2014

1. 医療活動や自治体活動に必要な言語情報の整備、2. 多言語社会における地域言語、3. 地域社会の基盤としての方言の保存に関して研究を進めた。

日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散

研究代表者：John Whitman（言語対照研究系教授）

研究期間：2012～2014

「農耕言語拡散仮説」(Farming/Language Dispersal Hypothesis) に焦点をあて、人間文化研究機構諸機関における言語学・植物遺伝子学・考古学・人類学・歴史学の人材と知的資源を結集して、アジアにおける諸言語族の分布と農耕の伝播の相関関係を調べることを目的とする。シンポジウム「ヒト・穀物・言語の拡散—北海道・琉球を中心に」を開催した（2013.2.23-24）。

日本関連在外資料の調査研究

日本関連在外資料の国際共同研究は、欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と、日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしている。本研究はオーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料のデジタル化、ならびにその資料の書き起しを行った上でアノテーションを作成すると同時に、その資料を所蔵する機関との合意のもとに資料を公開することに目的としている。

・近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究

音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」（朝日祥之、時空間変異研究系准教授）

研究資源の共有化

人間文化研究機構を構成する6研究機関のデータベースを横断検索が可能な統合検索システムに次のデータベースを提供している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』地図画像データベース
- ・『方言文法全国地図』地図画像データベース

3 外部資金による研究

○科学研究費補助金

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額 (千円) (直接経費)
基盤研究 (A) 一般	窪薙 晴夫	日本語のアクセントとアクセント類型論	8,500
基盤研究 (A) 一般	大西拓一郎	方言分布変化の詳細解明－変動実態の把握と理論の検証・構築－	9,700
基盤研究 (A) 海外	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築－研究と構築の有機的な繋がりに基づいて－	8,800
基盤研究 (B) 一般	木部 暢子	N型アクセントに関する総合的調査研究	4,700
基盤研究 (B) 一般	高田 智和	漢字字体変容の原理－敦煌文献から現代日本戸籍漢字まで－	3,600
基盤研究 (B) 一般	宇佐美 洋	学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究	1,800
基盤研究 (B) 一般	野田 尚史	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	1,800
基盤研究 (B) 一般	田中 牧郎	和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究	4,600
基盤研究 (C) 一般	上野 善道	南琉球諸方言要地アクセントの緊急調査研究	700
基盤研究 (C) 一般	飛田 良文	明治以降の文学作品に使用された外来語の実態研究	1,000
基盤研究 (C) 一般	竹田 晃子	日本語方言オノマトペの記述モデル構築に関する研究	700
基盤研究 (C) 一般	前川喜久雄	自発音声データの定量的解析による日本語韻律構造理論の再構築	1,100
基盤研究 (C) 一般	藤本 雅子	促音の発声・調音に関わる音声生理学的研究	1,200

基盤研究 (C) 一般	柏野和佳子	コーパス分析に基づく辞書の位相情報の精緻化	1,200
基盤研究 (C) 一般	渡辺美知子	日英語話し言葉コーパスにおける言い淀み分類の精緻化と機能の対照分析	1,700
基盤研究 (C) 一般	山崎 誠	語彙分類の理論的整備に基づくシソーラスの改良に関する研究	1,300
基盤研究 (C) 一般	小木曾智信	近世口語文を対象とした形態素解析辞書の開発	1,400
基盤研究 (C) 一般	丸山 岳彦	自発的な話し言葉に見られる節連鎖構造の研究	1,100
若手研究 (B)	アンナ・ブガエワ	コーパスに基づいたアイヌ語動詞範疇についての類型論的研究	500
若手研究 (B)	今田 水穂	Ruby と MSXML による日本語名詞述語文の実例調査とコーパス分析ツールの構築	500
若手研究 (B)	朝日 祥之	サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究	1,000
若手研究 (B)	儀利古幹雄	日本語アクセントの平板化に関する実証的研究	600
若手研究 (B)	金 愛蘭	基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究	800
若手研究 (B)	近藤明日子	近代語コーパスの高度なタグ付けと形態素解析による待遇表現・人称代名詞の計量的研究	300
若手研究 (B)	中上 亜樹	第二言語習得理論に基づく日本語指導法の実証的研究－インプット重視の処理指導の実践	500
若手研究 (B)	竹村亜紀子	瀬戸内伊吹島および真鍋島方言の音調変化に関する研究	600
特別研究員 奨励費	崔蘭 晴夫 (Hwang, H.)	フォーカスとイントネーションのインターフェースに関する日韓語対照研究	500
特別研究員 奨励費	長屋 尚典	東インドネシア諸語の空間指示・移動表現の類型と歴史	2,900
特別研究員 奨励費	ジョン・ホイットマン (Phan, J. D.)	ベト・ムオン語派の歴史比較研究	1,100

○受託研究

「言語学・言語教育学分野に関する学術研究動向調査研究」(野田 尚史) 日本学術振興会 1,870 千円

4 刊行物

『国語研プロジェクトレビュー』(NINJAL Project Review)

個々の共同研究プロジェクトの研究活動の総体を展望することによって国語研全体の動向を展望する。年3回程度、オンラインで刊行し、まとめたものを冊子体で発行している。オンライン版は国語研Webサイトで公開し、冊子体は全国の大学図書館等で利用できる。

○第3巻第1号（2012年7月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

木部暢子

「時空間変異研究系の共同研究プロジェクト」pp.1-2.

木部暢子

「奄美喜界島方言の母音の特徴について」pp.3-14.

大西拓一郎

「方言分布の変化をとらえる」pp.15-25.

相澤正夫

「方言意識の現在をとらえる—「2010年全国方言意識調査」と統計分析—」pp.26-37.

真田信治、簡月真

「宜蘭クレオール」pp.38-48.

〈著書紹介〉

窪菌晴夫

窪菌晴夫著『数字とことばの不思議な話』岩波書店 pp.49-50.

窪菌晴夫

大津由紀雄編／池上嘉彦、窪菌晴夫、大津由紀雄、西山佑司著『ことばワークショップ—言語を再発見する—』開拓社 pp.51-54.

青木博史

青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版 pp.55-56.

影山太郎

影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店 pp.57-58.

角田太作

角田太作著*A Grammar of Warrongo*, De Gruyter Mouton pp.59-60.

○第3巻第2号（2012年10月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

前川喜久雄

「言語資源研究系の共同研究プロジェクト」pp.61-62.

前川喜久雄

「コーパスアノテーションの基礎研究」および「コーパス日本語学の創成」pp.63-83.

近藤泰弘

「日本語通時コーパスの設計について」pp.84-92.

〈客員教員の研究紹介〉

アレキサンダー・ヴォヴィン (Alexander Vovin)

「萬葉集 5・904 のアザリ「未詳」の意味と語源について」 pp.93-99.

〈著書紹介〉

影山太郎

影山太郎 編『属性叙述の世界』 くろしお出版 pp.100-102.

野田尚史

野田尚史 編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 くろしお出版 pp.103-104.

○第3卷第3号（2013年3月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

迫田久美子

「日本語教育研究・情報センターの共同研究プロジェクト」 pp.105-106.

迫田久美子

「日本語学習者の発話コーパスと動詞の発達」 pp.107-116.

野田尚史

「日本語教育のためのコミュニケーション研究」 pp.117-124.

宇佐美洋

「言語運用評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる」 pp.125-132.

島村直己

「日本語の基本語彙に関する研究」 pp.131-141.

金田智子

「「生活者」としての外国人に対する日本語教育の確立をめざして」 pp.142-151.

〈Research by Invited Scholars〉

Bjarke Frellesvig (ビヤーケ・フレレスビッグ)

“Remarks on the Verb *suru* in Old Japanese — A Corpus Based Study” pp.152-177.

Peter Edwin Hook (ピーター・フック)

“Competition between Vectored Verbs and Factored Verbs” pp.178-189.

〈受賞紹介〉

金 愛蘭 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」 pp.190-192.

〈著書紹介〉

木部暢子

松森晶子, 新田哲夫, 木部暢子, 中井幸比古 編著『日本語アクセント入門』 三省堂 pp.193-194.

朝日祥之

朝日祥之 著／真田信治 監『サハリンに残された日本語樺太方言』 明治書院 pp.195-196.

田中牧郎, 相澤正夫

陣内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫 編『外来語研究の新展開』 おうふう pp.197-199.

『国立国語研究所論集』(NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回(5月と11月)，オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第3号（2012年5月）

神崎享子

「複合動詞データベース構築のための付与情報」 pp.1-18.

松森晶子

「西日本における「昇り核」の方言：鳥取県青谷町とその周辺地域のアクセント体系」 pp.19-37.
宮内佐夜香

「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として—」 pp.39-52.

佐野大樹

「アプレイザル理論を基底とした評価表現の分類と辞書の構築」 pp.53-83.

Shirai Satoko (白井聰子)

“The Polysemic Enclitic =ta in nDrapa” pp.85-101.

竹村亜紀子

「方言習得における親の母方言の影響—鹿児島方言の場合—」 pp.103-116.

田中ゆかり, 前田忠彦

「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」 pp.117-142.

角田三枝

「節連接表現の中のモダリティ」 pp.143-159.

○第4号（2012年11月）

井上史雄, 金順任, 松田謙次郎

「岡崎100年間の「ていただく」増加傾向—受恵表現にみる敬語の民主化—」 pp.1-25.

Mark Irwin (アーウィン・マーク)

“Rendaku Dampening and Prefixes” pp.27-36.

森篤嗣, 内海由美子

「山形県における定住アジア女性の日本語使用：首都圏・全国との比較から特性をみる」
pp.37-48.

Nagaya Naonori (長屋尚典)

“On the Syntactic Transitivity of Tagalog Actor-Focus Constructions” pp.49-76.

竹田晃子, 三井はるみ

「「全国方言文法の対比的研究」調査の概要とそのデータ分析—原因・理由表現—」 pp.77-108.

角田三枝

「節連接マーカーにおける動詞の活用形とモダリティ」 pp.109-137.

NINJAL フォーラムシリーズ

一般の方向けの講演会として「NINJAL フォーラム」を年に数回開催し、その内容を「NINJAL フォーラムシリーズ」として公開している。

○ NINJAL フォーラムシリーズ2『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』(2012年6月29日)

2011年9月11日に開催された国立国語研究所第4回NINJAL フォーラムでの講演を文字化したもの。世界の諸言語の中で、日本語の文字・表記は最も複雑だといわれている。平仮名、片仮名、漢字と3種類を駆使しているのは、日本語だけである。このことは、和語には平仮名、漢語には漢字、外来語には片仮名のように、文字表記表現としての豊かさを示しているとともに、漢字の異体字や、送

り仮名・仮名遣いなどの使い分けの原因ともなっており、学習や実務での不合理さとして言及されている。本フォーラムでは、印刷、放送、心理学、国語教育、日本語教育の専門家を迎えて、日本語文字・表記の難しさと面白さ、将来の展望について考察した。

《目次》

- あいさつ 影山太郎 p.1
基調講演 阿辻哲次（京都大学）「漢字とどうつきあうか」pp.2-9.
講演1 小駒勝美（新潮社校閲部）「「自由度」こそ日本漢字の魅力」pp.10-14.
講演2 柴田 実（NHK 放送文化研究所）「放送と漢字」pp.15-21.
講演3 横山詔一（国立国語研究所）「文字の認知単位」pp.22-26.
講演4 棚橋尚子（奈良教育大学）「学校における表記の非日常性」pp.27-34.
講演5 シュテファン・カイザー（國學院大學）「漢字：その魅力にひそむエンドレス感」pp.35-41.
パネルディスカッション
(司会：高田智和、パネル：阿辻哲次、小駒勝美、柴田 実、横山詔一、棚橋尚子、
シュテファン・カイザー) pp.42-51.

5

2012年度公開中のコーパス・データベース

Web サイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開しているが、2012 年度は下記資料の公開（ないし公開の継続）を行った。

データベース

・ Web データに基づく複合動詞データベース（開発版）

動詞連用形 + 動詞型の複合動詞の使用例を Web から収集し、共起する格関係などが分かるようにしたデータベース。

・ 複合動詞レキシコン（開発版）

日本語研究者および外国人日本語学習者を対象として、約 2700 語の動詞連用形 + 動詞型複合動詞の言語学的な分析に基づいて内部構造、格パターン、意味・用例などの情報を付与したもの。

・ 寺村誤用例集データベース

寺村秀夫『外国人学習者の日本語誤用例集』（1990 年、科研費研究報告、大阪大学）を電子化し、各種の検索ができるようにしたもの。2011 年度からの継続公開。

・ ことばに関する新聞記事見出しデータベース

1949 年から 2009 年 3 月までの新聞記事の切り抜きを電子化し、検索できるようにしたもの。2009 年以前からの継続公開。

・ 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課との研究協力により、同図書館が所蔵する『源氏物語』（全 54 冊）の翻字本文を電子化したもの。2010 年から開始し、2012 年度に完成。

・ 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』のうち、「桐壺」、「須磨」、「柏木」の原本画像を閲覧するためのもので、2013 年 3 月に「桐壺」を公開した。

・ 国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』画像

国立国語研究所の研究図書室が所蔵する『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』の画像を試験

公開した。(2012年7月)

- ・**国立国語研究所 刊行物データベース**

過去に国立国語研究所から発行された各種資料等の書誌情報を電子化したもの。

- ・**日本語研究・日本語教育文献データベース**

2009年以前に刊行された『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の中から研究論文文献の情報を抜き出してデータベース化するとともに、2009年以降の学術雑誌、大学紀要、論文集などに掲載された日本語学・日本語教育に関する論文情報を毎年追加し、年3回程度更新している。

- ・**雑誌『国語学』全文データベース**

国語学会（現在、日本語学会）の機関誌『国語学』全巻（第1輯（1948年）～終刊第219号（2004年））の全文テキストデータベース

- ・**国立国語研究所蔵書目録データベース**

日本で唯一、日本語及び日本語教育に関する研究文献をほぼ網羅的に収集している本研究所の研究図書室に所蔵された全図書が検索できるデータベース。

KOTONOHA 計画によるコーパス

日本語の書き言葉や話し言葉を、その実態を調べることができるように電子化したコーパス（言葉のデータベース）。豊富な情報を付加し、検索ツールとともに提供している。

- ・**現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）**

現代の書き言葉の縮図となるように設計された1億語をおさめる。次の検索方法を提供している。

- ・**少納言（オンライン利用。登録不要）**

文字列検索で、簡単な検索ができる。例文や出典情報は、500件まで表示。

- ・**中納言（オンライン利用。要登録）**

本文を単語に区切り見出し語や品詞などの情報が付与されたコーパスが検索できる。前後の単語や品詞などを指定した高度な検索も可能。

- ・**DVD版（要申し込み。アカデミック利用または一般利用）**

コーパスのすべてのデータを収録。プログラムを組んで分析する専門家向き。

- ・**日本語話し言葉コーパス（CSJ）**

講演やスピーチなどの独話について、音声、転記テキスト、それらへの豊富な付加情報を収める。

- ・**日本語歴史コーパス（平安時代編）**

平安時代を中心とする古典作品に、単語の情報を付けたもの。『中納言』によるオンライン公開。今後も増補の予定。

- ・**近代語のコーパス**

- ・**太陽コーパス**

明治後期から大正期によく読まれた総合雑誌『太陽』を対象としたコーパス。CD-ROMによる市販。『ひまわり』による検索。

- ・**近代女性雑誌コーパス**

太陽コーパスと同じ時代の、女性を読者とする雑誌3誌を対象としたコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。

- ・**明六雑誌コーパス**

明治初期の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』全文に、単語の情報を付与したコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。

・形態素解析辞書 UniDic

コーパスに形態論情報（単語の情報）を付与するための、コンピュータ用の辞書。解析器とともに用いることで、電子テキストに自動的に単語情報を付与することができる。対象とするコーパスの時代別に3種を公開。

UniDic-MeCab（現代語用）、中古和文 UniDic、近代文語 UniDic

・コーパス検索ツール

・全文検索システム『ひまわり』

コーパスを高速に検索し、前後の文脈や出典の情報とともに、閲覧できるシステム。パソコンにインストールして利用。

・『ひまわり』支援ツール

既存の電子テキストや自作のコーパスを、『ひまわり』で検索できるようにするツール。

・『たんぽぽ』、『プリズム』

構造化された電子テキストから情報を抽出し検索するツール。

・作文支援システム TEeachOtherS

学習者と教師が教え合いながら作文するのを支援する、添削システム。

・『分類語彙表増補改訂版』（研究用データ）

語を意味によって分類した『分類語彙表』の電子データ。見出し語や分類番号などを、データベースソフトに取り込む CSV 形式で公開。

方言・言語生活の調査研究

・日本言語地図

1966年～1974年にかけて刊行した『日本言語地図』に掲載された全地図の画像を PDF 形式で公開したもの。

・方言文法全国地図

本研究所が1989年～2006年に刊行した『方言文法全国地図』所載の全地図の画像を PDF で公開したもの。

・方言研究の部屋

・全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」

日本語教育に関する研究・資料等

・日本語学習者発話コーパス『C-JAS』

日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の発話コーパスの試験公開。（要会員登録）

・研究用データ（要会員登録）

- ・日本語学習者会話データベース
- ・日本語学習者会話ストラテジーデータ
- ・言語行動意識調査
- ・名大会話コーパス

・日本語学習者会話データベース 縦断調査編

・日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究

その他

- ・外来語言い換え提案

- ・「病院の言葉」を分かりやすくする提案
- ・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表
- ・「学校の中の敬語」調査（アンケート調査）のデータ公開
- ・国際社会における日本語についての総合的研究（新プロ「日本語」）
- ・X 線映画「日本語の発音」
- ・基礎日本語活用辞典（インドネシア語版）
- ・「簡約日本語」に関する研究

6 研究成果の発信と普及

国語研では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A. 国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

I. NINJAL 国際シンポジウム

○ NINJAL International Symposium on Valency Classes and Alternations in Japanese

国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」

ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所 (MPI-EVA) との研究協力により、日本語動詞の自他交替と項交替に関する国際シンポジウムを国立国語研究所で 2012 年 8 月 4 日～5 日に開催した。下記 17 件の招待講演の他、一般応募のポスター発表 7 件（若手研究者を含む）を実施し、264 名の参加者を得た。

8 月 4 日

開催挨拶：影山太郎（所長）

講演

Andrej Malchukov (University of Mainz, MPI-EVA)

“Markedness effects in valency changing operations”

Søren Wichmann (MPI-EVA)

“A typological study of verbal semantic constraints on syntactic alternations”

Peter Hook (University of Michigan) and Prashant Pardeshi (NINJAL)

“Rigidity versus laxity in valency retention: A contrastive study of complex predicates in Japanese and Indo-Aryan”

Yo Matsumoto (Kobe University)

“Morphological, phonological, and semantic subregularities in causative-inchoative verb pairs in Japanese: A schema-based account”

Kan Sasaki (Sapporo Gakuin University)

“Anticausativization in the northern dialects of Japanese”

Ayumi Matsuo (Kobe College; presenter), Letitia Naigles, Gary C. Wood, and Sotaro Kita (University of Birmingham)

“Japanese children's use of morphosyntax and argument structure to infer meaning of novel transitive and intransitive verbs”

Yasuhiro Shirai (University of Pittsburgh/NINJAL) and Zoe Luk (University of Pittsburgh, The Hong Kong Institute of Education)

“Transitivity alternation in second language acquisition”

Keiko Murasugi (Nanzan University)

“Children's 'erroneous' intransitives, transitives, and causatives and the implications for syntactic theory”

8月5日

柴谷方良（ライス大学、国語研客員教授）

「項交替に関する理論的諸問題」

田中牧郎（国立国語研究所）、山元啓史（東京工業大学）

「平安時代日本語の感情形容詞と感情動詞 —『源氏物語』『今昔物語集』のコーパス分析を通して—」

Bjarke Frellesvig (University of Oxford/NINJAL) and John Whitman (NINJAL)

“The historical source of the bigrade transitivity alternations in Japanese”

ウェスリー・ヤコブセン（Wesley Jacobsen）（ハーバード大学）

「日本語における自他交替の意味論的根拠に関する再考察」

辻村成津子（インディアナ大学）

「自他交替の『ゆれ』について」

岸本秀樹（神戸大学）

「項交替と主格制約」

小林英樹（群馬大学）

「漢語動詞の項のあらわれ方」

由本陽子（大阪大学）

「動詞複合による項の創出と主題役割の変更」

影山太郎（国立国語研究所）

「複合動詞の形態構造と自他交替」

○ International Workshops on Corpus Linguistics and Endangered Dialects

国際会議第22回 Japanese/Korean Linguistics Conference（下記）のサテライト行事としてコーパス言語学と危機方言の2つのワークショップを2012年10月11日に国立国語研究所で開催した。下記の8件の招待講演に加え、一般応募のポスター発表を実施した。参加者：80名

Corpus linguistics

Lynne Flowerdew (Hong Kong University for Science and Technology)

“Corpus Linguistics and English for Specific Purposes”

Kikuo Maekawa (NINJAL)

“The Corpus of Spontaneous Japanese and Its Application to the Study of Japanese Phonetics”

Prashant Pardeshi (NINJAL), and Shiro Akasegawa (Lago Institute of Language)

“NINJAL-LWP for BCCWJ: A Lexical Profiling Based Browsing System”

Mats Rooth (Cornell University)

“Harvesting Speech Datasets for Linguistic Research on the Web”

Endangered dialects

Martin Holda and Akihiro Kaneda (Chiba University)

“The Hachijō Dialect—Comparison with Eastern Old Japanese”

Seung-Chul Jung (Seoul National University)

“On the Jeju Dialect of Korean”

Ross King (University of British Columbia)

“Endangered Korean dialects in the former USSR and the 'Soviet Korean' that could have been: 150 years of Koremar”

Akiko Matsumori (Japan Women's University/NINJAL)

“Synchronic and diachronic issues in Ryukyuan phonology”

○第22回 Japanese/Korean Linguistics Conference (J/K22)

海外に拠点を持つ国際会議として Japanese/Korean Linguistics Conference を国立国語研究所に誘致し、2012年10月12日～14日に開催した。下記の招待講演のほか、一般応募の口頭発表とポスター発表を実施した。この会議では過去最高の206名の参加者を得た。

開会挨拶：影山太郎（所長）

Day 1 (October 12)

Akira Watanabe (University of Tokyo)

“1-Deletion: Measure nouns vs. classifiers”

Seungjae Lee (Seoul National University)

“Some Korean/Japanese linguistic implications of Korean wooden tablet writings”

Day 2 (October 13)

Masayoshi Shibatani (Rice University)

“Genitive modifiers — *ga/no* conversion revisited —”

Agnes Kang (University of Hong Kong)

“Korean discourse and identity: Lessons from heritage language research”

Day 3 (October 14)

Michael Kenstowicz (Massachusetts Institute of Technology)

“The adaptation of contemporary Japanese loanwords into Korean”

Satoshi Kinsui (Osaka University)

“The status quo of ‘role language’ research”

○ NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology 2013 (ICPP2013)

国内外の第一線の研究者を集め、日本語音声学・音韻論の国際シンポジウムを2013年1月25日～27日の3日間にわたりて国立国語研究所で開催した。下記6件の招待講演を含む計23件の口頭発表と、計27件のポスター発表を実施した。参加者：136名

Welcome：影山太郎（所長）

DAY 1: Rendaku and voicing / Geminate consonants

Keren Rice (University of Toronto)

“Sonorant obstruents revisited”

Takanori Hirano (Yamaguchi University)

“A rule-application approach to Rendaku”

Yukari Hirata (Colgate University)

“The interplay among various durational units in Japanese stop quantity distinction”

DAY 2: Geminate consonants / Accent and tone

Anders Lofqvist (Haskins Laboratories)

“Articulatory kinematics in long and short consonants”

Ray Iwata (Kanazawa University)

“On the context dependent/independent tonal neutralization in Chinese dialects”

Larry Hyman (University of California, Berkeley)

“Towards a typology of postlexical tonal neutralizations”

II. 研究系主催の国際会議

○ NINJAL Diachronic Corpus Project – Oxford VSARPJ Project Joint Symposium: Corpus Based Studies of Japanese Language History

オックスフォード大学との研究協力に基づき、言語資源研究系が中心となって〈国立国語研究所・オックスフォード大学合同シンポジウム「通時コーパスと日本語史研究」〉を2012年7月31日に国立国語研究所で開催し、100名の参加者を得た。

開会挨拶：影山太郎（所長）

基調講演：

近藤泰弘（国立国語研究所客員教授、青山学院大学）

「日本語通時コーパスの設計」(Design of a Japanese Diachronic Corpus)

ビヤーケ・フレレスビッグ（国立国語研究所客員教授、オックスフォード大学）

「オックスフォード上代日本語コーパスについて」(The Oxford Corpus of Old Japanese)

研究発表：

須永哲矢（国立国語研究所）、堤智昭（東京農工大学）

「小学館新全集『今昔物語集』での漢字活字—コーパス化のための調査と処理方針の検討—」

Stephen Wright Horn (University of Oxford)

“On accusative case marking in Old Japanese”

岡部嘉幸（千葉大学）、村上謙（埼玉大学）

「デハナイ、デナイ、ジャナイ—近世における否定表現一斑—」

Dan Trott (University of Oxford)

“On tense and aspect in Old Japanese”

小木曾智信（国立国語研究所）

「中古和文における語彙の文体差」

Kerri Russell (University of Oxford)

“Noun incorporation in Old Japanese”

田中牧郎（国立国語研究所）

「近代書き言葉における文語法から口語法への推移—『太陽コーパス』の助動詞の分析を通して—」

Peter Sells (University of York)

“On null pronouns in Old Japanese”

○ New Ways of Analyzing Variation and Change in the Asia-Pacific Region 2

時空間変異研究系が中心となって、言語変化と言語変異に関する国際会議 New Ways of Analyzing Variation and Change in the Asia-Pacific Region 2 を 2012 年 8 月 1 日から 4 日まで 4 日間にわたって国立国語研究所及び統計数理研究所で開催した。下記 2 件の招待講演のほか、一般応募の口頭発表 38 件とポスター発表 12 件を実施した。参加者：120 名

J.K. Chambers

“Professor Shibata's *haha* and other sociolinguistic insights”

Junko Hibiya

“The velar nasal in Japanese revisited”

III. その他の国際会議

○ 「ヒト・穀物・言語の拡散—北海道・琉球語を中心に」シンポジウム

2013 年 2 月 23 日～24 日（総合地球環境学研究所）

2 月 23 日

Opening — Yo-Ichiro Sato and John Whitman

Gina Barnes (SOAS, University of London)

“Farming Tephra: Limitations to the spread of agriculture in Japan”

「テフラ地域の農業：耕作拡大の限界」

Yo-Ichiro Sato (Research Institute for Humanity and Nature)

“The movement of crops in the Old World: The role of nomadic pastoralists”

「旧大陸における穀物の移動—遊牧民の関与はなかったか？—」

Naruya Saitou (National Institute of Genetics)

“In search of Japanese Archipelago people's history based on Ainu-Ryukyu common ancestry hypothesis”

「アイヌ琉球同系説から出発する日本列島人史の探究」

Kazuo Miyamoto (Kyushu University)

“An archaeological explanation for the diffusion theory of the Japonic and Koreanic Languages”

「原日本語・原韓国語伝播説を考古学的に考える」

Peter Bellwood (Australian National University)

“Human migration, reasons for it, and the unlikelihood of continental scale language shift as the main factor to explain language families”

「ヒトの移動とその動機および大陸規模での言語移行の不可能性について」

2 月 24 日

Alexander Vovin (University of Hawaii)

“On the Linguistic prehistory of Hokkaido”

「北海道の言語先史について」

Ryuji Ishikawa (Hirosaki University)

“The origins of fragrant rice and early heading rice in Japan and their dispersal to northern regions, including Hokkaido”

「香り米や早生イネ品種の起源と北海道を含む日本北方地域への拡散」

Takehaya Matsumoto (Tokai University)

“Migration and language shift in ancient northern Tohoku based on archaeological evidence”

and place names”

「考古学資料と地名より見た古代東北北部における移住と言語の取替え」

Thomas Pellard (CNRS, France)

“Language dispersal in the Ryukyu Islands”

「琉球列島における言語の拡散」

Mark Hudson (University of West Kyushu)

“Subsistence, ecology and expansion: The farming/language dispersal hypothesis in the Japanese islands”

「日本列島における農耕／言語拡散仮説：生態史とヒト集団の拡散」

General Discussion 一般討論

B. 研究系の合同発表会

研究系単位の合同発表会を次のように開催した。

理論・構造研究系

○研究成果合同発表会

2013年3月2日（国立国語研究所）

益岡隆志, 前田直子, 橋本修, 丸山岳彦

「複文構文プロジェクトの中間報告」

杉村恵子

「幼児の語用からみる普遍文法」

窪薙晴夫

「アクセントの類型と中和」

ティモシー・J・バンス

「連濁の不規則性とローゼンの法則」

影山太郎

「動詞の自他交替—複合動詞の観点から—」

横山詔一

「文字環境の生態学的モデル」

上野善道

「「フンイキ」～「フインキ」の例から音位転換（メタテシス）について考える」

ポスター発表：

山口昌也

「Webデータに基づく複合動詞用例データベースの評価」

神崎享子

「複合動詞レキシコン Ver.1～語彙情報を付与した2700語の複合動詞レキシコン～」

三井はるみ, 鎌水兼貴

「首都圏における地域言語の分布構造—首都圏大学生RMSアンケート調査の結果から—」

松浦年男

「九州地方における有声阻害促音の音声実現」

平山真奈美, 儀利古幹雄

“Boundary effects in lexical accent variation and vowel devoicing in Japanese”

松井理直

「有声促音知覚における促進的／抑制的手がかりに関する一考察」

菅原真理子

“Identification of English primary stress by Japanese listeners and bias toward word-final stress: Due to F0 patterns or an influence from Japanese”

ピンテール・ガーボル

“English prosody perception by Japanese learners of English”

大滝靖司

「父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造」

Hyun-kyung Hwang

“Asymmetries between production, perception and comprehension of focus types in Japanese and Korean”

三村竜之

「アクセント対立の消失から見た複合語アクセント規則：ノルウェー語 Sandnes 方言を例に」

Donna Erickson, Ian Wilson

“Articulatory and laryngeal contributions to rhythm in English”

小磯花絵

「複合境界音調の発言継続表示機能」

杉崎鉱司

“The ban on adjunct ellipsis in child Japanese”

中村 隆

「共通語使用割合の変化に対する年齢・時代・世代効果（2）—第1次～第4次鶴岡言語調査の結果から—」

野崎浩成

「コーパスを用いた新常用漢字に関する分析—常用漢字表に追加・削除された漢字の使用実態—」

高田智和, 堤 智昭, 田島孝治

「整数座標によるヲコト点の記述」

時空間変異研究系

○合同発表会

Japanese Language Variation and Change (JLVC) Conference 2013

2013年3月20日（国立国語研究所）

招待講演：Dennis R. Preston “Old and new ways in perceptual dialectology”

口頭発表：

木部暢子

「危機方言調査から見えてくるもの」

朝日祥之

「言語変容の類型化に向けて—国内外における調査から—」

井上文子

「方言談話の地域差と世代差—ロールプレイ会話から—」

大西拓一郎

「全国方言にみる分布の経年比較」

熊谷康雄

「『日本言語地図』のデータベース化と計量的分析」

金 愛蘭

「文法・文章機能からみた外来語の基本語化」

青木博史

「言語変化と文法史研究」

ポスター発表：

嶋口有香子

「GISによる言語地理学的研究—瀬戸内海沿岸における方言調査を事例に—」

ウナル・ビラル

「日本在住トルコ人児童の日本語使用状況—コード切り替えを中心に—」

村田真実, 林 琳, 岸江信介

「小豆島方言アクセントの現状」

森 勇太

「近畿方言における命令表現の地域差」

高山林太郎

「系列別語彙を用いたアクセント調査—沖永良部島国頭方言を例に—」

野間純平

「近畿方言のネン・テンの成立過程について—昔話資料を手がかりに—」

酒井雅史

「ロールプレイ会話からみる敬語運用の地域差」

一色舞子

「中古日本語の「—おく」における語構成分析」

佐藤 実

「「そこらへん（指示代名詞+ヘン）」の使用の拡大について」

平塚雄亮

「福岡市方言の接続詞ダケン」

中澤光平

「淡路方言の地域差と成立過程」

○第二回 JLVC (Japanese Language Variation and Change) 講演会

2012年4月11日

Paul Kerswill (英国 ヨーク大学)

“New-dialect formation: Accommodation and the different roles of children, adolescents and adults”

○第三回 JLVC (Japanese Language Variation and Change) 講演会

2012年10月2日

Heinrich Ramisch (ドイツ バンベルク大学)

“Regional verb forms in British English - a synchronic and diachronic perspective”

言語資源研究系

○第2回コーパス日本語学ワークショップ

2012年9月6日～7日（国立国語研究所）参加者：延べ270名

口頭発表：

堀一成，坂尻彰宏

「BCCWJコアデータの頻度情報に基づく日本語論文・レポートライティング指導の試み」

高崎みどり

「テクストの結束性に与る語彙とその機能について」

五十嵐陽介，小磯花絵

「句末境界音調のピッチレンジに与える要因：『日本語話し言葉コーパス』の分析」

張元哉

「近代対訳コーパスにおける日韓の語彙の諸相—文体の異なる対訳コーパスの比較を通して—」

荒牧英治，増川佐知子，森田瑞樹，保田祥

「オンライン・コミュニケーション上での平均使用語彙数に関する研究」

近藤明日子，小木曾智信，須永哲矢，田中牧郎

「『明六雑誌コーパス』の開発—近代語コーパスのモデルとして—」

ポスター発表：

小西光，淺原正幸，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」

河内昭浩

「漢字・語彙指導の根拠としてのコーパスの役割」

保田祥，柏野和佳子，立花幸子，丸山岳彦

「「語りかけ性」を有すると判断される書きことばの表現」

富士池優美

「中古和文における長単位の概要」

小山田由紀，柏野和佳子，前川喜久雄

「助動詞レル・ラレルへの意味アノテーション作業経過報告」

上野真幸，竹内孔一

「動詞語義及び意味役割付与作業システムの構築」

佐藤佑

「『太陽コーパス』にみる、動詞性名詞「報告」の使用実態」

中平詩織

「名詞「甲斐」の文法的性格」

吳雪梅

「中国人日本語学習者の「的」付きナ形容詞の習得に関する研究—BCCWJコーパス調査とアンケート調査の分析を通じて—」

田中牧郎

「「語彙レベル」から見た近代の語彙と現代の語彙—『太陽コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて—」

小木曾智信，中村壯範

「通時コーパス用『中納言』：Webベースの古典語コンコーダンサー」

土屋智行，伝康晴，小磯花絵

「会話コーパスの転記方式の相互変換に向けて —イントネーションに着目して—」

加藤恵梨

「「気持ち」の意味について」

田中リベカ, 川添 愛, 戸次大介

「MCN コーパス：言語学的テストに基づくモダリティ・アノテーションの理論と実証」

大石 亨

「メタファー表現の生産性に対する意味の焦点と表現メディアの影響 —<急激な増加> や <大量の存在>を表す表現の場合—」

柏野和佳子, 立花幸子, 保田 祥, 飯田 龍, 丸山岳彦, 奥村 学, 佐藤理史, 徳永健伸, 大塚裕子, 佐渡島紗織, 椿本弥生, 沼田 寛

「書籍テキストへの文体情報付与の試み —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に—」

服部 匡

「極性反義語の用例分布とその解釈」

佐藤理史

「現代日本語書き言葉均衡コーパスに対する難易度付与」

松木久幸, 佐藤理史, 駒谷和範

「文末機能表現シソーラスと述部正規化システム」

内山清子

「論文の論理構造における分野基礎用語に関する分析」

堤 智昭, 須永哲矢

「コーパス用テキストの文字校正支援ツールの設計と実装」

丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた文末表現のバリエーションの分析 (2)」

山口昌也

「Web データに基づく複合動詞データベースの構築」

小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを用いた複合境界音調の発言継続表示機能の検討」

古橋 翔

「文の長さ分布から見た文生成のメカニズム」

石本祐一, 小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを用いた統語境界におけるイントネーション句変動の分析」

西川賢哉

「Praat 起動用 Excel アドイン "Praat Launcher"」

宮島崇浩, 菊池英明

「多様な話者による演技感情音声の収集と特徴の比較」

田野村忠温

「BCCWJ に含まれるウェブデータの特性について —データ重複の諸相と BCCWJ 使用上の注意点—」

砂岡和子, 羅鳳珠, 王雷, 姜柄圭, 松崎 実

「漢字四字成語の受容とその延命」

クリスティーナ・フメリヤク・寒川

「日本語学習者にとって読みやすい文章について—日本語教科書における書き換えの分析から—」

山崎 誠

「段落間の類似度を利用したテクストの結束性の測定」

馬場康維, 小森 理

「状態空間表現を用いた文章の特徴付け」

岡 照晃

「近代文語論説文を対象とした濁点の自動付与アプリケーション」

○第3回コーパス日本語学ワークショップ

2013年2月28日～3月1日（国立国語研究所）参加者数：延べ343名

口頭発表：

古宮嘉那子, 奥村 学, 小谷善行

「分類器の確信度を用いた合議制による語義曖昧性解消の unsupervised な領域適応」

佐藤理史

「格助詞・副助詞類の連続出現パターン」

高松 亮

「文節係り受け構造のジャンル依存性」

菊池英明, 宮島崇浩, 沈 翩

「多様な音声表現コーパスにおける句末音調のクラスタリング」

今井新悟, 赤瀬川史朗, プラシャント・パルデシ

「筑波ウェブコーパス検索ツール NLT の開発」

淺原正幸, 前川喜久雄

「Web を母集団とした超大規模コーパスの設計」

宇佐美まゆみ, 中俣尚己

「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランскриプト・音声）2011年版』の設計と特性について」

スルダノヴィッチ・イレーナ, スホメル・ヴィット, 小木曾智信, キルガリフ・アダム

「百億語のコーパスを用いた日本語の語彙・文法情報のプロファイリング」

小林雄一郎, 小木曾智信

「中古和文における個人文体とジャンル文体」

市村太郎, 河瀬彰宏, 小木曾智信

「洒落本コーパスの構造化—仕様と事例の検討—」

田中牧郎

「説話のパラレルコーパスの設計—平安・鎌倉時代の文体変異の研究に向けて—」

小木曾智信, 須永哲矢, 富士池優美, 中村壮範, 田中牧郎, 近藤泰弘

「「日本語歴史コーパス 平安時代編」先行公開版について」

ポスター発表：

張 麗

「「X を Y に（して）」構文における形式動詞「して」の脱落について」

木山直穂

「日本語複合動詞「V 直す」, 「V 返す」, 「V 戻す」の特徴」

渡邊ゆかり

「「私的な一名詞」「個人的な一名詞」の使い分け」

柴田翔平, 古宮那子, 小谷善行

「対訳対と協調フィルタリングを用いた商品推薦」

柏野和佳子, 立花幸子, 保田 祥, 飯田 龍, 丸山岳彦, 奥村 学, 佐藤理史, 徳永健伸, 大塚裕子, 佐渡島紗織, 椿本弥生, 沼田 寛

「BCCWJ 図書館サブコーパス全テキストへの文体情報付与結果の分析」

叢 悠悠, 田中リベカ, 中村絢子, 酒向美帆, 佐宗智子, 清水 蘭, 劉 月晴, 川添 愛, 戸次大介

「複合機能表現「という」の分類にみる MCN コーパスの方法論と検証」

淺原正幸

「係り受けアノテーション基準の比較」

東泉裕子, 高橋圭子

「結果、こういうことが言えそうです。」～コーパスにみる名詞の文副詞的用法～」

堀内浩史郎, 古宮嘉那子, 小谷善行

「語義曖昧性解消の領域適応のための訓練データの選択法～複数ドメインからの選択～」

金 愛蘭

「談話構成機能からみた外来語の基本語化—通時的新聞コーパスを資料に—」

宋 東旭, 淺原正幸, 古宮嘉那子, 小谷善行

「機械学習による中国語助詞の用法解析ポスター発表」

小林善久

「TVCMにおける和製英語のパイロット調査—文字テクストと音声テクストの対照を軸に—」

山崎 誠

「共起語集合の頻度分布と語の属性との相関」

小西 光, 小山田由紀, 淺原正幸, 柏野和佳子, 前川喜久雄

「BCCWJ 係り受け関係アノテーション付与のための文境界再認定」

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「書きことばにおける「語りかけ」は何のために用いられるのか」

土屋菜穂子

「日本語学習者のインタビュー応答時における言いよどみ使用」

吉本暁文, 小町 守, 松本裕治

「複数の分野のコーパスを用いた述語項構造解析の比較—『現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて—』

中山健一

「「了解」の意味の変遷—19世紀末から現代にかけて—」

高瀬真記, 古宮嘉那子, 小谷善行

「CRF を用いたアニメ関連用語の固有表現抽出」

久屋愛実

「外来語使用における言語外的要因の分析：書き言葉コーパスの利用可能性」

服部 匡

「国会会議録に見る複合辞の特異な形—丁寧形／普通形の不対応—」

金子周司

「医学用語の選択に見られる特徴」

スルダノヴィッチ・イレーナ, 李 在鎬

「日本語教育用の形容詞の語彙リストと難易度レベル」

富士池優美

「『枕草子』長単位データを用いた相の類の分析」

田頭未希

「接続助詞「けど」の音調と意味用法に関する予備的考察」

八木 豊, ホドシチェク・ボル, 阿辺川武, 仁科喜久子

「学習者が犯す誤用の要因・背景からみる日本語作文支援」

近藤明日子

「近代女性向け雑誌記事における一人称代名詞の分析 —形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』を用いて—」

小林正行, 市村太郎

「『虎明本狂言集』コーパスの構造化—仕様と事例の検討—」

石本祐一, 小磯花絵

「自発発話におけるイントネーション句単位のF0変動の特徴」

近藤真理子, 鍾木 元

「日本語話者の発話にみられる日本語の音節構造と母音の無声化との関係 —Japanese AESOP コーパスの分析から」

小磯花絵, 前川喜久雄, 五十嵐陽介

「『日本語話し言葉コーパス』における韻律単位の認定基準について」

沈 睿, 菊池英明

「音声言語コーパスにおける speaking style の評定と分布 —転記情報に着目して—」

上野真幸, 竹内孔一

「プラウザベースの動詞語義及び意味役割付与作業システム」

山口昌也

「個人用コーパスの作成とアノテーションを支援する環境の実現」

保田 祥, 小西 光, 淩原正幸, 今田水穂, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」

西海枝洋子, 渡辺和希, 小西隆之, 伊藤直子, 金礪 愛, 五十嵐陽介, 宮澤幸希, 西川賢哉, 馬塚れい子

「『理研母子会話コーパス (R-JMICC)』構築の試みと研究成果 —対乳児自発音声における、日本語特有の韻律的・分節的特徴の解明を目指して—」

浅石卓真

「中学・高校における地学教科書の文体比較：学年の進行に伴う文体的特徴の変化」

堀 恵子, 江田すみれ

「web公開予定文法・語彙用例検索システム「日本語文法・語彙項目用例文データベース『はごろも』」のレベル付けと学習者コーパスの比較」

大山浩美, 藤野拓也, 小町 守, 松本裕治

「日本語学習者の作文におけるエラータイプの自動分類へ向けて」

土屋智行, 伝 康晴, 小磯花絵

「会話分析方式への転記変換におけるデータ間・個人間のゆれに関する分析」

松吉 俊, 大槻 謙, 福本文化

「日本語における否定の焦点アノテーション」

吉田悦子

「聞き手行動としての日本語あいづち表現の分析：転記情報とコーディングによる発話連鎖パターンの認定」

言語対照研究系

○合同研究発表会

NINJAL Typology Festa 2013

2013年3月23日～24日（国立国語研究所）

Edith Aldridge (University of Washington)

「オーストロネシア語族における名詞化と能格性の関係をめぐって」

長屋尚典（日本学術振興会特別研究員SPD、国立国語研究所）

「名詞化からヴォイスへ：タガログ語のフォーカス・システム」

北野浩章（愛知教育大学）

「カパンパンガン語（フィリピン）の自動詞・他動詞」

吉岡 乾（国立国語研究所非常勤研究員）

「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」

永井忠孝（青山学院大学）

「イヌピアック語の自他対応」

ナロック・ハイコ（東北大学、国立国語研究所客員准教授）

「日本語自他動詞対研究の課題」

佐々木冠、奥田統己、白石英才（札幌学院大学）

「北海道周辺言語における他動性交替」

金水 敏（大阪大学、国立国語研究所客員教授）

「日本語疑問文研究の課題」

Peter Hook (University of Virginia/Michigan) & Prashant Pardeshi (NINJAL)

“Noun modifying expressions [名詞修飾表現] in Marathi and other South Asian languages”

西山國雄（茨城大学）

「準体助詞「の」の発達：文法化・脱文法化分析の検証と再構築」

坪本篤朗（静岡県立大学）

「「の」による名詞化と主体性 —いわゆる、「主要部内在型関係節」を中心にして—」

天野みどり（和光大学）

「現代日本語の接続助詞的な「ーのが」について」

松本曜（神戸大学）

“A crosslinguistic video study of motion event descriptions: Manner, path and deixis saliency and their interactions”

江口清子（大阪大学）

「ハンガリー語のダイクシス表現—移動事象場面における諸概念との競合において」

守田貴弘（東京大学）

「フランス語におけるダイクシス表現の方略」

松瀬育子（慶應義塾大学）

「ネワール語における空間移動表現：ビデオクリップによる映像実験の中間報告」

C. プロジェクトの発表会

I. 共同研究プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

共同研究プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として多数開催している。

シンポジウム

○ Open Symposium “Back to the Future”

Palau's Japanese Era and its Relevance for the Future

2012年6月18日（パラオ コミュニティ カレッジ（コロール））参加者：75名

Daniel Long “Archiving the Japanese language oral history of the Palau”

Shinji Sanada “A Japanese-lexicon creole in Taiwan”

Yoshiyuki Asahi “The importance of linguistic research on the former Japanese colonies”

Junko Konishi “The Japanese influenced songs in Palau”

Shingo Iitaka “Reviewing visual images of Parau from the Japanese administration era”

Keisuke Imamura “Why is it important for Japanese to know about Palau's past?”

Ryota Yoshida “Why is the archival of Palauan songs important for the future?”

Shan-Hua Chien “The Web Museum of Palauan Music”

Vivian, Chiao-Wen Chiang “Constructing the Austronesian Music Museum”

Howard Charles “The impact of music education and performance in Palau's 2011-12 school year”

Osamu Yamaguchi “Transgender love songs of Belau and Japan favouritely sung by Belau people with emphasis on the 1960s”

○日本語の配慮表現の多様性

2012年9月22日～23日（科学技術館）参加者：85名

野田尚史「配慮表現の多様性をとらえる方法と視点」

小柳智一「奈良時代の配慮表現」

藤原浩史「平安・鎌倉時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」

森野 崇「平安・鎌倉時代の受諾・拒否に見られる配慮表現」

米田達郎「室町・江戸時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」

木村義之「明治・大正時代の配慮表現」

岸江信介「現代語の依頼・禁止に見られる配慮表現」

西尾純二「現代語の感謝・謝罪に見られる配慮表現」

日高水穂「談話の構成から見た現代語の配慮表現」

三宅和子「携帯メールに見られる配慮表現」

前田広幸「現代の文芸作品に見られる配慮表現」

小林 隆「配慮表現の地理的・社会的な変異」

高山善行「配慮表現の歴史的な変化」

○コミュニケーションのための日本語教育研究

2012年11月17日（星陵会館）参加者：312名

清 ルミ「母語話者の日本語コミュニケーション」

宇佐美まゆみ「母語話者の日本語会話」
門倉正美 コメント
奥野由紀子「非母語話者の日本語コミュニケーション」
山内博之「非母語話者の日本語コミュニケーション能力」
春原憲一郎 コメント
品田潤子「日本語のコミュニケーション教育の方法」
徳井厚子「日本語のコミュニケーション教育の実践」
奥田純子 コメント

○九州・琉球方言の分布と歴史

2012年12月1日（福岡女学院大学）参加者：33名
松田美香「九州方言の可能表現」
杉村孝夫「九州方言の連母音の分布と歴史」
坂口至「アクセントから九州方言の語源を探る」
かりまたしげひさ「琉球諸語と九州語のつながりを考える」

○複文構文の意味の研究

2012年12月15日～16日（国立国語研究所）参加者：75名
天野みどり「名詞節か副詞節か—「の節」の名詞性・節性の検討—」
青木博史「接続部における名詞節の脱範疇化について」
田野村忠温「日本語コーパスと複文の研究」
大堀壽夫「従属句の類型を再考する」
複文構文プロジェクトの中間報告
大島資生、前田直子「連用複文構文・連体複文構文」
橋本修「文法史」
丸山岳彦「コーパス言語学」
堀江薰「言語類型論・対照言語学」

II. 各プロジェクトの研究発表会

各共同研究プロジェクトでは、年に2～3回の研究発表会を国立国語研究所だけでなく全国各地で開催した。

理論・構造研究系

○日本語レキシコンの音韻特性
プロジェクトリーダー 窪薙晴夫
2012年6月23日～24日（国立国語研究所）
(消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究（リーダー：木部暢子）との合同研究発表会)
鮮于媚（上智大学、早稲田大学）
「非母語話者による日本語の長短音素の聴知覚特性と学習 一時間情報のバリエーションの差異を用いた訓練と学習効果を中心に—」
福井玲（東京大学）
「『捷解新語』における語頭の濁音表記とアクセントの関係」

坂井美日（大阪大学大学院生）

「宮古島方言における準体助詞準体句の発達—宮古島城辺方言のデータを中心に—」

町 博光（広島大学）

「奄美諸島方言の世代間変容」

2012年9月8日～9日（ホテル木もれび 滋賀県大津市）

松井理直（大阪保健医療大学）

「フォルマント遷移の特性と音韻境界の知覚」

高山知明（金沢大学）

「ジヂズヅ合流過程と鼻音—前鼻子音と撥音—」

米田信子（大阪大学）

「ヘレロ語にみられる中声調とダウンステップ」

2012年11月23日、25日（九州大学箱崎キャンパス）

増田正彦（九州大学）

「漢語吳方言におけるトーンの中和」

岩田 礼（金沢大学）

「声調中和が起きる音声的、音韻的条件について：漢語方言における Tone sandhi の類型と地理的分布」

姜 英淑（松山大学）

「韓国語の麗水方言におけるアクセント中和」

三村竜之（室蘭工業大学）

「北ゲルマン語におけるアクセント対立の消失：デンマーク語とノルウェー語の資料から」

青井隼人（東京外国語大学）

「宮古多良間方言における名詞アクセント型の中和」

五十嵐陽介（東京外国語大学）、田窪行則（京都大学）、ペラール・トマ（CRLAO）

「南琉球宮古語池間方言におけるアクセント型の中和と合流」

窟薙晴夫（国立国語研究所）

「鹿児島方言におけるアクセントの中和」

松浦年男（北星学園大学）

「長崎方言におけるアクセントの中和」

新田哲夫（金沢大学）、中井幸比古（神戸市外国語大学）

「アクセントの式の中和—中央式アクセントと垂井式アクセントの中間アクセント—」

○日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性

プロジェクトリーダー 影山太郎

2012年4月14日（名古屋大学東山キャンパス）

由本陽子（大阪大学）

「語彙的複合動詞の意味解釈再考（2）：補文関係タイプの多様性」

岸本秀樹（神戸大学）

「「ない」の範疇について」

沈 力（同志社大学）

「中国語と日本語におけるV-V複合動詞の考察」

影山太郎（国立国語研究所）

- 「V+V 複合動詞を見つめ直す」
神崎享子（国立国語研究所 PD フェロー）
「複合動詞データベースの進捗報告」
2012年9月24日（東北大学片平さくらホール）
影山太郎（国立国語研究所）
「動詞 + 動詞型複合動詞研究の現状」
陳 敏杞（東北大学大学院生）
「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について — 「～出す」を対象として—」
阿部 裕（名古屋大学大学院生）
「古代日本語における動詞連接トリーの様相」
青木博史（九州大学、国立国語研究所客員准教授）
「複合動詞の歴史的变化」
塚本秀樹（愛媛大学）
「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立状況 —影山（2012）に基づく分析—」
全 敏杞（大阪大学大学院生）
「韓国語の語彙的複合動詞における補助動詞的 V2 について—「V-nata」「V-nayta」「V-tulta」の再考と意味解釈を中心に—」
長谷部郁子（筑波大学非常勤講師）
「語彙的アスペクト動詞としての「～倒す」について」
神崎享子（国立国語研究所 PD フェロー）
「「複合動詞レキシコン」の形態的・統語的・意味的情報」
山口昌也（国立国語研究所）
「データに基づく複合動詞用例データベースの構築と活用」

○文字環境のモデル化と社会言語科学への応用

- プロジェクトリーダー 横山詔一
2012年6月2日（国立国語研究所）
話題提供1：
松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）、西尾純二（大阪府立大学）、辻加代子（神戸学院大学）、
阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員）
「ワークショップ報告：岡崎敬語調査報告 —継続サンプルの分析—」
話題提供2：
前田忠彦（統計数理研究所）、阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員）、米田正人（国立国語研究所名誉所員）
「調査報告：第4回鶴岡市における言語調査の実施報告」
指定討論と全体討論：
話題提供1の指定討論者：
真田信治（奈良大学、国立国語研究所客員教授）、彦坂佳宣（立命館大学）
話題提供2の指定討論者：
杉戸清樹（国立国語研究所名誉所員）
全体のコメントと閉会の挨拶：佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）

○日本語レキシコン－連濁事典の編纂

プロジェクトリーダー テイモシー・J・バンス

2012年6月2日（ホテル喜良久 山口県山口市）

大野和敏（マカオ大学）

「連濁のトリガー」

鈴木 豊（文京学院大学）

「非連濁規則の変遷について」

ティモシー・J・バンス（国立国語研究所）

「ライマンの法則の「超強いバージョン」—Miller（1984）の提案」

宮下瑞生（モンタナ大学）

「山形県河北町調査報告：話者とのネットワーク活動について」

2012年11月10日（国立国語研究所）

田野優希（成城大学）

「万葉仮名から見た連濁形—『古言清濁考』における「天河」の分析を通して」

佐野真一郎（国際基督教大学）

「連濁規則の適用に関わる要因としての語彙頻度、及び連濁規則の生産性」

○言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究

プロジェクトリーダー 村杉恵子（南山大学）

2012年10月31日（南山大学名古屋キャンパス）

Susan Fischer (CUNY Graduate Center)

“Historical change in sign languages”

2012年12月23日（南山大学 名古屋キャンパス）

Thomas Hun-tak Lee and Zhuang Wu (Chinese University of Hong Kong)

“The acquisition of nominal structure, word order and referentiality in Chinese: Corpus and experimental findings”

杉崎鉱司（三重大学）

“On the learnability of Japanese scrambling”

酒井 弘（広島大学）

“Cognitive neuroscience of linguistic diversity -A view from an ERP study on Japanese honorific processing-”

齋藤 衛（南山大学）

“On the role of selection in syntactic word formation”

○複文構文の意味の研究

プロジェクトリーダー 益岡隆志（神戸市外国語大学）

2012年5月13日（学習院大学目白キャンパス）

福嶋健伸（実践女子大学）

「中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系 一名詞節内にモダリティ形式が生起することをどう解釈するか—」

高橋美奈子（四天王寺大学）

「時を表す名詞を主名詞とする名詞修飾表現について」

蓮沼昭子（創価大学）

「事態の既定性と「せっかく」構文」

2012年9月29日（九州大学国際ホール）

岩田美穂（大阪大学特任研究員）

「例示を表す並列形式の成立過程」

益岡隆志（神戸市外国語大学、国立国語研究所客員教授）

「中立形接続とテ形接続の分化」

江口 正（福岡大学）

「主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ」

2012年12月15日～16日（国立国語研究所）

シンポジウム「複文構文の意味の研究」

○訓点資料の構造化記述

プロジェクトリーダー 高田智和

2012年7月27日（富山大学理学部多目的ホール）

趣旨説明：小助川貞次（富山大学）

講演1「漢文訓読を学ぶということ」

講師：渡辺さゆり（札幌大学） コメンテーター：當山日出夫（立命館大学）

講演2「他言語を自言語で読むこと：「訓読」の普遍性について」

講師：ジョン・ホイットマン（国立国語研究所） コメンテーター：小助川貞次（富山大学）

ディスカッション 司会：高田智和（国立国語研究所）

パネラー：渡辺さゆり（札幌大学）、ジョン・ホイットマン（国立国語研究所）、ヴァレリオ・イージ・アルベリッティ（早稲田大学）、朴 鎮浩（ソウル大学校）、唐 煉（北海道大学）

○会話の韻律機能に関する実証的研究

プロジェクトリーダー 小磯花絵

2013年3月29日（国立情報学研究所）

CSJ-RDB 講習会初級編

○首都圏の言語の実態と動向に関する研究

プロジェクトリーダー 三井はるみ

2012年7月22日（日本大学文理学部）

佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）

「東京・首都圏アクセント研究の課題」

林 直樹（日本大学大学院生）、田中ゆかり（日本大学）

「地理的言語データの統合的分析—首都圏形容詞アクセントを事例とした試行—」

坂本 薫（國學院大學大学院生）

「神奈川県小田原市方言のアクセント」

亀田裕見（文教大学）

「埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調—久喜市高年層に見られるゆれ—」

コメント：佐藤亮一

2012年12月2日（国立国語研究所）

亀田裕見（文教大学）

「首都圏における方言の地域資源としての活用—通信調査結果より—」

鎌水兼貴（国立国語研究所非常勤研究員）

「全国若者言葉調査」の結果報告

三井はるみ（国立国語研究所）、鎌水兼貴（国立国語研究所非常勤研究員）

「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」

時空間変異研究系

○消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究

プロジェクトリーダー 木部暢子

2012年6月23日～24日（国立国語研究所）

（日本語レキシコンの音韻特性（プロジェクトリーダー：窪薙晴夫）との合同研究発表会）

鮮子媚（上智大学、早稲田大学）

「非母語話者による日本語の長短音素の聴知覚特性と学習—時間情報のバリエーションの差異を用いた訓練と学習効果を中心に—」

福井玲（東京大学）

「『捷解新語』における語頭の濁音表記とアクセントの関係」

坂井美日（大阪大学大学院生）

「宮古島方言における準体助詞準体句の発達—宮古島城辺方言のデータを中心に—」

町博光（広島大学）

「奄美諸島方言の世代間変容」

○多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明

プロジェクトリーダー 相澤正夫

2012年4月21日（国立国語研究所）

金愛蘭（早稲田大学）

「指示語句の中の外来語—文章機能からみた外来語の基本語化—」

田中牧郎（国立国語研究所）

「専門用語と一般用語の隔たりと交錯—専門用語の分かりやすい運用のために—」

2012年7月14日（国立国語研究所）

小椋秀樹（立命館大学）

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく外来語表記のゆれの調査」

新野直哉（国立国語研究所）

「慣用句「気の（が）置けない」の「誤用」について」

2012年10月13日（国立国語研究所）

尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）

「約一世紀前の日本語敬語表現の使用状況」

金澤裕之（横浜国立大学）

「大正～昭和前期の演説・講演レコードに見る「テおる／テいる」について」

2013年1月26日（国立国語研究所）

田中ゆかり（日本大学）

「2012年全国聞き取りアンケート調査の中間報告—「とびはね音調」関連項目を中心に—」

松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）

「サ変動詞の五段化・上一段化全国調査報告」

○日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

プロジェクトリーダー 井上史雄

2012年6月2日（国立国語研究所）

松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）、西尾純二（大阪府立大学）、辻加代子（神戸学院大学）、阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員）

「ワークショップ報告：岡崎敬語調査報告－継続サンプルの分析－」

前田忠彦（統計数理研究所）、阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員）、米田正人（国立国語研究所名誉所員）

「調査報告：第4回鶴岡市における言語調査の実施報告」

2013年3月19日（国立国語研究所）

原田幸一（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査基本データ—ティタダクグラフ集解説—」

「ティタダク使用に関わる要因とその予測—岡崎敬語調査12場面の分析—」

西尾順二（大阪府立大学）

「岡崎敬語調査新聞代場面とおつり場面の分析」

辻加代子（神戸学院大学）

「岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長」

井上史雄（明海大学、国立国語研究所客員教授）

「鶴岡共通語化調査・岡崎敬語調査と言語変化研究」

○日本語変種とクレオールの形成過程

プロジェクトリーダー 真田信治

2012年6月18日（パラオコミュニティカレッジ）

Daniel Long (Tokyo Metropolitan University)

“Archiving the Japanese language oral history of Palau”

Keisuke Imamura (Tokyo Metropolitan University)

“Why is it important for Japanese to know about Palau's past?”

Yoshiyuki Asahi (NINJAL)

“The importance of linguistic research on the former Japanese colonies”

Shinji Sanada (Nara University/NINJAL)

“A Japanese-lexicon creole in Taiwan”

2012年9月4日（延辺大学、中国）

真田信治（奈良大学、国立国語研究所客員教授）

「新しい『言語イデオロギー』にむけて」

ダニエル・ロング（首都大学東京）

「日本語教育からみた『単一民族国家日本』という神話」

朝日祥之（国立国語研究所）

「移動するサハリンの朝鮮人と日本語」

水野義道（京都工芸繊維大学）

「災害時の外国人のための『やさしい日本語』をめぐって」

鳥谷善史（天理大学）

「言語地図作成方法の現状—GISソフト『MANDARA』を利用して—」

全永男（延辺大学）

「中国朝鮮族における日本語借用語の使用実態」

金正雄（延辺大学）

「日本語のクレオール性と在日文学」

孫雪梅（延辺大学）

「地域方言とクレオール語—延辺地域方言を中心に」

張守祥（佳木斯大学）

「黒龍江省方正県における日本語を中心とする言語景観」

2012年11月27日

ダニエル・ロング（首都大学東京）

「旧南洋群島パラオにおける日本語」

○大規模方言データの多角的分析

プロジェクトリーダー 熊谷康雄

2012年8月25日（東北大学）

沖裕子（信州大学）、小林隆（東北大学）、澤木幹栄（信州大学）、澤村美幸（和歌山大学）、竹田晃子（国立国語研究所非常勤研究員）、日高水穂（関西大学）、鎌水兼貴（国立国語研究所非常勤研究員）、吉田雅子

「報告と討論：大規模方言データの利用と研究」

熊谷康雄（国立国語研究所）

「『日本言語地図』データベースの構築と計量的探索」

佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）：コメンテーター

2012年12月16日（全国町村会館 東京都千代田区）

井上文子（国立国語研究所）

「談話資料における間投助詞の地域差について」

日高水穂（関西大学）

「方言昔話資料にみる語りの地域差—文末形式に着目して」

沖裕子（信州大学）

「大規模自然談話資料にみる受話法」

大西拓一郎（国立国語研究所）

「用言準体法の分布と形式」

竹田晃子（国立国語研究所）

「『日本言語地図』にみる動物の鳴き声のオノマトペ」

澤村美幸（和歌山大学）

「全国方言調査から見た感動詞の地域差」

澤木幹栄（信州大学）

「孤例は特殊な語か」

鎌水兼貴（国立国語研究所非常勤研究員）

「言語地図にみる方言変化・共通語化 LAJDB 編」

熊谷康雄（国立国語研究所）

「LAJDBによる『日本言語地図』の計量的探索」

小林 隆（東北大学）、熊谷康雄（国立国語研究所）

「共通語形の分布と伝播について」

○日本語文法の歴史的研究

プロジェクトリーダー 青木博史

2012年9月4日（国立国語研究所）

仁科 明（早稲田大学）

「（中心と）周縁—「けり」について」

小柳智一（聖心女子大学）

「文法変化の種類」

2013年3月27日（JR博多シティ）

久保薗愛（九州大学大学院生）

「鹿児島方言史における過去否定形式」

福嶋健伸（実践女子大学）

「中世末期日本語の従属節の階層性—南の四分類との関係—」

○接触方言学による「言語変容類型論」の構築

プロジェクトリーダー 朝日祥之

2012年4月7日（国立国語研究所）

Paul Kerswill（University of York）

“Community type, dialect contact and change”

○近現代日本語における新語・新用法の研究

プロジェクトリーダー 新野直哉

2012年6月10日（国立国語研究所）

橋本行洋（花園大学）

「「断然」の受容と展開」

鳴海伸一（京都府立大学）

「程度の意味発生の過程の類型—程度的意味と量的意味・評価的意味との関わり—」

2012年8月28日（二松学舎大学）

新野直哉（国立国語研究所）

「『青い山脈』（1947）の「全然同意ですな」について」

中尾比早子（駿山女学園大学非常勤講師）

「形容詞「すごい」の程度副詞化」

2012年12月27日（国立国語研究所）

島田泰子（二松学舎大学）

「現代日本語におけるニ格表現の衰微と交替—広義の“新用法”研究の一端として—」

佐々木文彦（明海大学）

「誤用から見た言語変化の方向性—“確信犯”“敷居が低い”を例に—」

言語資源研究系

○コーパスアノテーションの基礎研究

プロジェクトリーダー 前川喜久雄

2012年6月12日（NAIST 東京事務所）

淺原正幸（国立国語研究所）

「BCCWJ アノテーション情報の目録作成に向けて」

○コーパス日本語学の創成

プロジェクトリーダー 前川喜久雄

2012年6月30日（国立国語研究所）

丸山直子（東京女子大学）

「助詞の分布—現代日本語書き言葉均衡コーパスにおいて—」

真田治子（立正大学）

「助詞の使用度数に関する計量的分析方法の検討」

2012年10月21日（国立国語研究所）

丸山岳彦（国立国語研究所）

「BCCWJ に対する節境界解析」

杉本 武（筑波大学）

「コーパスに見る複合（格）助詞の節性」

柏野和佳子（国立国語研究所）

「和語や漢語のカタカナ表記—BCCWJ 収録の書籍テキストにおける使用実態—」

○文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアノテーションの可能性—日本語諸方言の同意要求

表現を中心に考える—

プロジェクトリーダー 岡田祥平

2013年3月30日（大阪大学豊中キャンパス）

岡田祥平（新潟大学）

「「とびはね音調」の音声学的特徴：予備的考察結果の報告」

○多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化

プロジェクトリーダー 伝 康晴

2012年7月16日（慶應義塾大学三田キャンパス）

山本真理（北海道大学大学院生）

「物語の聞き手によるセリフ発話」

森 大毅（宇都宮大学）

「パラ言語情報の分析と音声合成を指向した会話コーパスのアノテーション」

2012年12月25日（慶應義塾大学三田キャンパス）

遠藤智子（日本学術振興会特別研究員、京都大学）

「会話コーパスを用いたスタンス表明の研究に向けて」

吉田悦子（三重大学）

「聞き手行動としての日本語あいづち表現の分析：転記情報とコーディングから読み取れること」

2012年2月16日（国立情報学研究所）ことば・認知・インタラクション（内容はp.92に掲載）

2012年2月17日（国立情報学研究所）会話を通じた相互信頼感形成（内容はp.93に掲載）

2013年3月24日（国立国語研究所）

大場美和子（広島女学院大学）

「英語による被爆証言と伝達の会話における情報の比較方法の課題」

森本郁代（関西学院大学）

「日本語学習者の話し合いに対する評価とその評価に影響を及ぼす会話行動」

○テキストにおける語彙の分布と文章構造

プロジェクトリーダー 山崎 誠

2012年7月1日（お茶の水女子大学）

内山清子（国立情報学研究所特任研究員）

「学術論文における専門用語の文や基礎性に関する一考察」

馬場康維（統計数理研究所）、小森 理（統計数理研究所）

「状態空間表現を用いた文章の特徴付けの試み」

2012年10月28日（国立情報学研究所）

馬場俊臣（北海道教育大学）

「状態空間表現を用いた文章の特徴付けの試み」

清水まさ子（国際交流基金日本語国際センター）

「学術論文の分野・タイプによって構成要素の出現はどう変わらるのか — 一編の論文が持つ異なる属性に注目して —」

山崎 誠（国立国語研究所）

「明示的な構成を持つテキストの語彙的特徴」

○テキストの多様性を捉える分類指標の策定

プロジェクトリーダー 柏野和佳子

2012年6月25日（はこだて未来大学）

椿本弥生（はこだて未来大学）

「眼球運動測定による文章推論の認知過程の探求」

飯田 龍（東京工業大学）

「テキスト分類指標アノテーション支援のための文章のランキング」

佐渡島紗織（早稲田大学）

「早稲田大学ライティング・プログラムの実践と成果」

佐藤理史（名古屋大学）

「現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づく obi2/B9 スケールの再構築」

○統計と機械学習による日本語史研究

プロジェクトリーダー 小木曾智信

2013年2月7日（国立国語研究所）

人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査（第2期）」リーダー：高田智和（理論構造研究系）との合同研究発表会

小木曾智信（国立国語研究所）

「平安仮名文学作品テキストの形態素解析」

岡 照晃（奈良先端科学技術大学院大学大学院生）

「統計的機械学習を用いた歴史的資料の表記整理支援」

高田智和（国立国語研究所）

「米国議会図書館蔵『源氏物語』の全巻翻字本文公表と原本画像の一部公開」

斎藤達哉（専修大学）

「文字表記資料としての米国議会図書館本源氏物語」

○文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究

プロジェクトリーダー 山口昌也

2012年8月28日（国立国語研究所）

白井清昭（北陸先端科学技術大学院大学）

「辞書の例文とパラレルコーパスから自動獲得した例文に基づく語義曖昧性解消」

千葉庄寿（麗澤大学）

「多言語句構造データベースの設計と構築」

神崎享子（国立国語研究所 PD フェロー）

「『複合動詞レキシコン』データベースの構築」

山口昌也（国立国語研究所）

「複合動詞データベースの構築と活用」

言語対照研究系

○述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

プロジェクトリーダー プラシャント・パルデシ

2012年6月30日（京都大学文学研究科）

吳人 恵（富山大学）

「コリヤーク語における自他対応」

江畠冬生（日本学術振興会特別研究員）

「サハ語の態：使役と受身を中心に」

吉村大樹（京都府立大学共同研究員）

「ウズベク語における他動性」

大崎紀子（京都大学研究機関研究員）

「キルギス語の自動詞・他動詞と使役・受動・再帰動詞」

栗林 裕（岡山大学）

「チュルク諸語の関係節化と地域類型論」

井土慎二（愛知県立芸術大学）

「タジク語の自動詞と他動詞」

2012年11月18日（国立国語研究所）

ナロック・ハイコ（東北大大学）

「日本語自他動詞対の類型論的位置づけと歴史」

峰岸真琴（東京外国語大学）

「孤立語の動詞の意味特性：タイ語、クメール語を例として」

北野浩章（愛知教育大学）

- 「カパンパンガン語の自他動詞の交替」
長屋尚典（日本学術振興会特別研究員）
- 「ラマホロット語の自他交替」
千田俊太郎（熊本大学）
- 「ドム語の語彙的述語と自他」
2013年2月16日（東京外国語大学府中キャンパス）
- 風間伸次郎（東京外国語大学）
- 「ツングース諸語における自他対応」
野島本泰（神戸夙川学院大学非常勤講師）
- 「ブヌン語の自動詞と他動詞」
ナロック・ハイコ（東北大学、国立国語研究所客員准教授）、プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
- 「有対動詞間の派生関係の動機づけ：大規模なコーパスに基づく検証」
- 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究
プロジェクトリーダー ジョン・ホイットマン
- 2012年8月6日（国立国語研究所）〈形態統語論班〉
- 青木博史（九州大学）
- 「日本語史における名詞節」
伊藤英人（東京外国語大学）
- 「朝鮮語史における名詞化・名詞節」
風間伸次郎（東京外国語大学）
- 「北方アジアの言語における名詞化」
2012年8月7日（国立国語研究所）〈音韻再建班〉
- アレキサンダー・ボビン（米国ハワイ大学、国立国語研究所客員教授）
- 「琉球祖語の語中の有声子音の再建について」
トマ・ペラール（フランス 国立科学研究中心）
- 「北琉球諸方言に見られる長母音と音調の対応関係について 一沖縄語中南部方言における C 系列語彙の語頭長母音を中心に—」
早田輝洋（九州大学名誉教授）
- 「満洲語最古の文献概説と音韻の考察の一部 一清朝時代の満洲語は現代シベ語のように語末 短母音を発音しなかったか？」
ジョン・ホイットマン（国立国語研究所）
- 「ツングース祖語母音体系の再検討 一RTRの母音調和を想定して」
2012年12月8日（国立国語研究所）〈音韻再建班〉
- 平子達也（京都大学大学院、日本学術振興会特別研究員）
- 「出雲市大社方言のアクセントとその日本語アクセント史（研究）上の位置づけ」
風間伸次郎（東京外国語大学）
- 「ツングース諸語の歴史と音対応について」
白石英才（札幌学院大学）
- 「ニヴフ語の2音節語根における母音の分布」
福井玲（東京大学）

「中世韓国語音韻論における残された課題」

2012年12月9日（国立国語研究所）〈形態統語論班〉

岸本秀樹（神戸大学）

「名詞化研究の視点」

遠藤史（和歌山大学）

「ユカギール語における名詞化・名詞節」

ブガエワ・アンナ（早稲田大学）

「アイヌ語におけるさまざまな名詞化節」

黒木邦彦（甲南女子大学）

「日本語の節形成に見る形態と機能との対応関係」

○空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究

プロジェクトリーダー 松本曜

2012年9月22日（名古屋国際センター）

松本曜（神戸大学）

「様態、経路、ダイクシスの使用頻度と相互作用」

Anna Bordilovskaya（神戸大学大学院生）

「ロシア語の移動表現」

高橋亮介（上智大学）

「ドイツ語における移動表現」

2013年3月21日（名古屋国際センター）

田村幸誠（滋賀大学）

「ユピック語の移動表現」（Skype発表）

モニカ・カフンブル（Catholic University of Eastern Africa）

「スワヒリ語の移動表現」

日本語教育研究・情報センター

○多文化共生社会における日本語教育研究

プロジェクトリーダー 迫田久美子

2012年6月3日（国立国語研究所）

社会における相互行為としての「評価」研究（「多文化共生社会における日本語教育研究」サブプロジェクト）

サブプロジェクトリーダー：宇佐美洋

宇佐美洋（国立国語研究所）

「『評価プロセスモデル』の作成と、評価研究の今後の発展について」

崔文姫（首都大学東京）

「評価の因果関係モデル—日本語学習者に対する印象—」

森本郁代（関西学院大学）

「話し合いを評価する—評価指標の策定と評価の方法—」

2013年1月5日～6日（国立国語研究所）

1月5日 テーマ：「日本語学習者のコーパス構築に向けて」

基調講演：

投野由紀夫（東京外国語大学）

「英語教育における学習者コーパス研究」

砂川有里子（筑波大学）

「日本語教育における母語話者コーパス研究」

白井恭弘（ピツバーグ大学）

「日本語教育における学習者コーパス研究」

1月6日 テーマ：「多文化共生社会における日本語教育研究」

基調講演：

西口光一（大阪大学）

「基礎日本語教育の再デザインの理路」

金田智子（学習院大学）

「「生活のための日本語」研究—その軌跡と今後の発展—」

宇佐美洋（国立国語研究所）

「「コミュニケーション」における評価—「言語形式の連鎖」としてのコミュニケーション観を問い合わせ直す」

迫田久美子（国立国語研究所）

「日本語学習者の縦断的発話コーパスと動詞の発達—C-JAS (Corpus of Japanese as a second language) の開発と利用—」

福永由佳（国立国語研究所）

「日本における移民の複言語能力と言語生活」

野山広（国立国語研究所）

「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究—OPIの枠組みを活用した形成的フィールドワークの結果を踏まえながら—」

ポスター発表：

奥野由紀子（横浜国立大学）、山森理恵（東海大学）、金庭久美子（横浜国立大学）

「日本語母語話者と非母語話者による三種の話し言葉データからみた『じゃないか』」

木下藍子（国立国語研究所非常勤研究員）、小西円（国立国語研究所非常勤研究員）、李在鎬（筑波大学）、迫田久美子（国立国語研究所）

「日本語学習者のタグ付き発話コーパス「C-JAS」—C-JAS (Corpus of Japanese as a second language) の開発と利用—」

八木豊（株式会社ピコラボ）、ボル・ホドシチエク（東京工業大学）、仁科喜久子（東京工業大学名誉教授）

「学習者コーパス「なたね」から作文添削システム「ナツメグ」へ」

李奎台（国立国語研究所非常勤職員）

「日本語雑談場面で学習者は母語話者をどのように評価するか—韓国人中上級日本語学習者を対象に」

工藤育子（国立国語研究所非常勤研究員）

「「評価」をめぐるさまざまな記憶—日本語学校の学生たちの語りから—」

崔文姫（首都大学東京）

「日本語学習者の発話を母語話者はどう評価するか—印象の因果関係を探る—」

須賀和香子（国立国語研究所非常勤研究員）、中上亜樹（国立国語研究所非常勤研究員）、金田智子（学習院大学）、黒瀬桂子

「「生活のための日本語」に関する研究の成果公表について —データを現場に生かすために—」

島村直己（国立国語研究所）

「壮丁のリテラシー」

今村圭介（国立国語研究所非常勤職員）、野山 広（国立国語研究所）

「日本語学習者の発話スタイルの特徴と不適切性 —自然習得に近い地域生活者と教室習得者の比較から—」

プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）、今村泰也（国立国語研究所非常勤研究員）

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成 —現状と今後の課題—」

コメンテーター：林さと子（津田塾大学）

2013年2月23日（富山県総合福祉会館サンシップとやま）

テーマ：「越境する家族の子どもの現状と支援 —富山に住む外国人の子どもたち—」（第3回移民コミュニティの言語生活研究会）

司会・企画運営：福永由佳（国立国語研究所）

山下里香（東京大学）

「家の文化と学校の文化との間で —在日パキスタン人の子どもたちとモスク教室—」

海老名みさ子（NPO認定法人「外国人の子どものための勉強会」）

「松戸市の外国人の子どもたちへの支援 —「外国人の子どもの勉強会」の試み」

Welfare Social Society Toyama Japan

「射水市在住パキスタン人住民の子どもたちの実態と課題」

米田哲雄（子供の日本語グループ）

「外国籍住民の子どもたちへの支援」

田上栄子（トヤマ・ヤポニカ）

「年少者支援において保護者を支援することの意義と重要性 —事例報告から—」

○学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築

プロジェクトリーダー 山内博之（実践女子大学）

2012年5月12日（国立国語研究所）

高 恩淑（一橋大学）

「日本語学習者の意見文に見られる文末表現の特徴 —日本語母語者話者との比較を通して—」

宮永愛子（金沢大学非常勤講師）

「フィラー表現と談話構成 —雑談での「物語」における出現位置に注目して—」

永井涼子（山口大学）

「看護師による患者描写の諸特徴 —引き継ぎ報告「申し送り」談話を対象に—」

末繁美和（北見工業大学）

「複文における視点の統一が文理解に及ぼす影響について」

石黒 圭（一橋大学）

「独話における接続詞『で』の出現をめぐって」

2013年2月23日（国立国語研究所）

澤田浩子（筑波大学）

「名詞文の文法と用法 —体言締め文の生起環境に着目して—」

丸山岳彦（国立国語研究所）

「自発音声に現れる非流暢性の分析」

建石 始（神戸女学院大学）

「現実的なコミュニケーションにおける「～ないでください」とは」

2013年3月2日（京都教育大学）

庵 功雄（一橋大学）

「「使役」を教えずに「使役を含む表現」を教えるには—1つの「教授法」—」

中俣尚己（京都教育大学）

「文法項目の生産性の可視化の試み」

○日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究

プロジェクトリーダー 柳町智治（北星学園大学）

2012年10月6日（北星学園大学）

初鹿野 阿れ（名古屋大学）、岩田夏穂（大月短期大学）

「接触場面におけるからかいの組織化」

森本郁代（関西学院大学）

「模擬裁判員裁判の評議に見られる「制度」」

池田佳子（関西大学）

「ICT 環境の教室インタラクション：マルチモーダル分析の観点からの考察」

柳町智治（北星学園大学）、山本真理（北海道大学大学院生）

「インタビュー場面における日本語L2話者の聞き手反応」

2013年3月2日（お茶の水女子大学）

岡田みさを（北星学園大学）

「文脈に即した相互行為能力：ボクシング練習の事例から」

池田佳子（関西大学）

「タイ・中国の日本語教室の分析」

水川喜文（北星学園大学）

「医療的ケアを受ける在宅ALS者の「口文字」によるコミュニケーション」

岡本能里子（東京国際大学）

「LINEのマルチモーダルコミュニケーション」

平田未季（北海道大学大学院生）、船橋瑞貴（早稲田大学大学院生）

「日本語学習者と母語話者の注釈挿入におけるリソース使用」

柳町智治（北星学園大学）

「相互行為としての時間の計算：科学実験場面の事例から」

D. NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月1回、国立国語研究所で開催している。2012年度は下記12件を開催した。

○第22回 2012年4月17日

Johan van der Auwera（ベルギー アントワープ大学）

“On the typology of human impersonal pronouns”

○第 23 回 2012 年 5 月 29 日

Bjarke Frellesvig (英国 オックスフォード大学)

「上代日本語の「スル」について —コーパスによる研究」

○第 24 回 2012 年 6 月 5 日

宮川 繁 (米国 マサチューセッツ工科大学)

「である／ます：主文においての Agreement 現象」

○第 25 回 2012 年 6 月 8 日

鄭 秋豫 (Chiu-yu Tseng) (台湾 中央研究院語言學研究所所長)

“Discourse association and information weighting in continuous speech data”

○第 26 回 2012 年 7 月 17 日

陳 力衛 (Liwei Chen) (成城大学)

「近代語資料と漢語研究」

○第 27 回 2012 年 9 月 26 日

Mary E. Beckman (米国 オハイオ州立大学)

“Phonological development in the midst of phonological change”

「通時的音韻変化の渦中での音韻発達」

○第 28 回 2012 年 12 月 11 日

西原鈴子 (国際交流基金日本語国際センター所長)

「日本語教育の潮流」

○第 29 回 2013 年 1 月 24 日

Larry M. Hyman (米国 カリフォルニア大学バークレー校)

“Why there is no canonical pitch-accent system”

○第 30 回 2013 年 2 月 19 日

岩崎勝一 (米国 カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

「多重文法：話し言葉と書き言葉の文法を超えて」

○第 31 回 2013 年 2 月 26 日

斎藤 衛 (南山大学)

「文構造を決定するメカニズム：形態論から語用論まで」

○第 32 回 2013 年 3 月 19 日

Edith Aldridge (米国 ワシントン大学)

「変体漢文の語順の一貫性：『古事記』、『日本靈異記』、『將門記』における一定の原則について」

○第 33 回 2013 年 3 月 26 日

Abigail Cohn (米国 コーネル大学)

“Phonological primitives and the role of segments and distinctive features”

「音韻論的元素をめぐって —音韻素性及び文節音の役割」

E. NINJAL サロン

国語研の研究者（共同研究員を含む）を中心として、各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。2012年度は第69回から第86回までを開催した。

○第69回 2012年4月10日

ヴォロビヨワ・ガリーナ（外来研究員、キルギス民族大学）

「効率的な漢字学習の支援を目指した漢字の分析」

○第70回 2012年4月24日

浅原正幸（コーパス開発センター）

「超大規模 web コーパスの設計」

○第71回 2012年5月15日

野田尚史（日本語教育研究・情報センター）

「コミュニケーションのための日本語学習用辞書の構想」

○第72回 2012年5月22日

迫田久美子（日本語教育研究・情報センター）

「日本語学習者のコミュニケーション—誤用の原因と運用のストラテジー—」

○第73回 2012年6月19日

中野真樹（研究情報資料センター非常勤研究員）、渡辺由貴（研究情報資料センター非常勤研究員）

「国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」の有用性」

○第74回 2012年6月26日

福永由佳（日本語教育研究・情報センター）

「滞日パキスタン人移民の言語使用」

○第75回 2012年7月10日

アレキサンダー・ヴォヴィン（言語対照研究系客員教授）

「雄鶲に何が起ったか—『伊勢物語』十四段の難解な歌の新解釈—」

○第76回 2012年7月24日

山口昌也（言語資源研究系）

「複合動詞データベースの構築と活用」

○第77回 2012年9月11日

宇佐美洋（日本語教育研究・情報センター）

「「習得」から「参加」へ—コミュニケーション能力観の変革と評価研究の位置づけ—」

○第78回 2012年9月18日

窪薙晴夫（理論・構造研究系）

「鹿児島方言の呼びかけイントネーション」

○第79回 2012年9月25日

沖 裕子（外来研究員、信州大学）

「談話論からみた句末の音調と意味」

○第80回 2012年10月30日

山崎 誠（言語資源研究系）

「テキストにおける多義語の意味の分布」

○第81回 2012年11月20日

国語研の蓄積資料を活かした研究：二つの研究事例

阿部貴人（統計数理研究所客員准教授）

「定年経年調査（岡崎・鶴岡）の事例」

田中牧郎（言語資源研究系）

「近代語コーパス設計における「国語辞典編集準備資料」の活用」

○第82回 2012年11月27日

イレーナ・スルダノヴィッチ（外来研究員、スロベニア・リュブリャナ大学、博報財団招聘研究者）

「複数のデータを活用したイ形容詞と名詞のコロケーションの記述－日本語教育のための資料作成を目指して－」

○第83回 2012年12月4日

前川喜久雄（言語資源研究系）

「自発音声中のフィラーの韻律的特徴に関する予備的考察」

○第84回 2013年1月15日

松森晶子（日本女子大学、時空間変異研究系客員教授）

「複合語アクセントが日本語史研究に提起するもの」

○第85回 2013年1月22日

鎧水兼貴（理論・構造研究系非常勤研究員）

「首都圏若年層における言語使用の地理的構造に関する一考察」

○第86回 2013年2月12日

吉岡 乾（言語対照研究系非常勤研究員）

「パキスタン北部の言語と南アジア的特徴」

F. その他

人間文化研究機構連携研究の催し物、関係学会等と共催している催し物。

○シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」（関西言語学会共催）

2012年6月2日（甲南女子大学）

窪薙晴夫（国立国語研究所）

「レキシコンと音声研究：アクセント研究を中心に」

影山太郎（国立国語研究所）

「レキシコンと文法・意味：複合動詞研究のこれから」

青木博史（九州大学、国立国語研究所客員准教授）

「レキシコンと言語変化：歴史的観点から見た複合動詞」

白井恭弘（ピツツバーグ大学、国立国語研究所客員教授）

「第一・第二言語における lexical aspect の習得」

○ことば・認知・インタラクション

2013年2月16日（国立情報学研究所）

主催：科研費基盤研究（B）「発話単位アノテーションに基づく対話の認知・伝達融合モデルの構築」

国立国語研究所共同研究「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」

国立情報学研究所共同研究「実場面インタラクション理解のための非談話行動アノテーション手法の開発と談話・非談話行動の連鎖分析」

共催：科研費基盤研究（B）「会話を通じた相互信頼感形成のマルチモーダル分析と共関心モデルの研究」

岩崎勝一（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）

招待講演：「「みかんよ みかん」構文：定型構文分析により会話メカニズムを考察する」

伝 康晴（千葉大学）

「会話における時間：認知と相互行為の調整」

鈴木佳奈（広島国際大学）

「「遡及的連鎖（レトロ・シークエンス）」の可能性」

榎本美香（東京工科大学）

「話者交替規則の周辺：統語・韻律・視線」

○会話を通じた相互信頼感形成

2013年2月17日（国立情報学研究所）

主催：科研費基盤研究（B）「会話を通じた相互信頼感形成のマルチモーダル分析と共関心モデルの研究」

共催：科研費基盤研究（B）「発話単位アノテーションに基づく対話の認知・伝達融合モデルの構築」

国立国語研究所共同研究「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」

国立情報学研究所共同研究「実場面インタラクション理解のための非談話行動アノテーション手法の開発と談話・非談話行動の連鎖分析」

原田悦子（筑波大学）

招待講演：「医療現場における信頼構築」

片桐恭弘（公立はこだて未来大学）

「相互信頼感と共関心構築」

高梨克也（科学技術振興機構さきがけ、京都大学学術情報メディアセンター）

「展示制作のための多職種ミーティングにおける「関心」と「配慮」の分析」

○研究報告会「文化としての方言・絆としての方言—東日本大震災、被災地からの発信—」

2013年3月9日（仙台会場：仙台国際センター）

2013年3月19日（東京会場：一橋大学一橋講堂）

○第31回社会言語学会研究大会シンポジウム「「ことば」と「考え方」の変化研究：社会言語学の源流を追って」

2013年3月16日（統計数理研究所）

話題提供：

横山詔一（国立国語研究所）

「言語と社会とココロの連鎖モデル」

米田正人（国立国語研究所名譽所員）

「山形県鶴岡市における共通語化調査とは」

阿部貴人（統計数理研究所客員准教授）

「鶴岡調査は共通語運用能力のどの側面をとらえてきたのか」

前田忠彦（統計数理研究所）

「継続調査で「考え方」の変化をどうとらえるか—日本人の国民性調査と岡崎敬語調査から—」

指定討論：

佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員）

「方言研究の観点から」

井上史雄（明海大学）

「鶴岡共通語化調査と言語変化研究」

佐藤和之（弘前大学）

「社会言語学が Welfare Linguistics であることの理由—鶴岡調査の根拠と貢献—」

○シンポジウム「大規模災害と人間文化研究」

2013年3月21日（フクラシア東京ステーション）

山浦玄嗣（医療法人隆玄山浦医院）

「津波を超えて闇から光へ」

今村かほる（弘前学院大学）

「災害と方言—医療・看護・福祉現場におけるコミュニケーションを中心に—」

日高真吾（国立民族学博物館）

「東日本大震災での文化財レスキュー」

西村慎太郎（国文学研究資料館）

「文書保存活動の課題—被災歴史資料から考える—」

討論 パネリスト：山浦玄嗣、今村かほる、日高真吾、西村慎太郎

コメンテーター：窪田順平（総合地球環境学研究所）、竹田晃子（国立国語研究所）

司会：木部暢子（国立国語研究所）

○シンポジウム「大規模災害と人間文化研究」

2013年3月24日（国立民族学博物館）

窪田順平（総合地球環境学研究所）

「文化・環境に配慮した復興—災害の記憶とまちづくり—」

竹田晃子（国立国語研究所）

「災害時の方言手引き—医療現場におけるコミュニケーションのために—」

日高真吾（国立民族学博物館）

「文化財レスキュー事業で救出した文化財の現状と課題」

小池淳一（国立民族学博物館）

「博物館連携の可能性—東日本大震災を経験して—」

西村慎太郎（国文学研究資料館）

「文書の保存活動の現状と課題」

青木 瞳（国文学研究資料館）

「被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究支援活動」

7 センター・研究図書室の活動

研究資料情報センター

研究者の共同利用に供するため、日本語学・言語学・日本語教育学に関する国内外の各種研究情報・研究資料を調査・収集している。

- これまで行われてきた日本語研究及び日本語教育研究に関する各種研究調査成果・資料等の収集と整理を行い、共同利用に供するために電子化及び情報発信を行った。
- 刊行物の検索、PDF の閲覧、研究図書室蔵書検索を行うことができる、「国立国語研究所刊行物データベース」を新規に公開。
- これまで Web サイト上で公開してきた日本語研究・日本語教育文献データベースに新たに論文集データベースを追加。
- 国民の言語生活に貢献するため引き続きことば（日本語・国語・言語）の質問に対応するとともに、Web サイトに『よくある「ことば」の質問』を掲載。
- 特任助教の公募・選考をおこない、Web サイトで公開する各種データベースの設計・構築・運用業務などについて、より一層の強化を実現する準備を進めた。
- 学術専門情報誌として「国語研プロジェクトレビュー」(NINJAL Project Review)、研究活動の活性化と成果の公表及び所内若手研究者育成を目的とした「国立国語研究所論集」(NINJAL Research Papers) を引き続き刊行し、共同研究プロジェクトや個人研究の成果の発信を行った。

コーパス開発センター

コーパス開発センターでは、日本語言語資源の整備計画である KOTONOHA 計画に従って、国内外の研究者の共同利用に供するため、各種言語資源の開発を進めている。開発に際しては言語資源研究系との間に密接な協力関係を維持している。

- 『中納言』による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索は今年度の新規契約（2012 年末まで）が 583 件あり、通算で 1000 件を超えた。
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 版は新規契約が 72 件で通算 190 件。
- 『日本語話し言葉コーパス』DVD 版の新規契約は 32 件。
- 2012 年 12 月から日本語歴史コーパスの一部（平安和文編、短単位解析済）のオンライン試験公開を開始した。インターフェースは『中納言』を利用。
- 『中納言』の機能強化を実施した。検索条件指定の利便性向上が主要な内容。
- 超大規模コーパスのデータ収集のためのインフラ整備を終え、収集を実施した。3 ヶ月で 1 億 URL のクローリングが可能であることを確認。
- 収集したデータへの形態論情報付与、レジスター情報付与、および 100 億語水準の形態素解析済データの検索手法について検討を開始。
- 超大規模コーパスプロジェクト関連で PD フェローを 2 名雇用。
- 従来コーパスごとにバラバラであった HP を統一するために再設計し公開。
- 『日本語話し言葉コーパス』コアデータの RDB 版の公開を開始。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

2012年度は共同利用機関として国内外の大学等研究機関の研究者が利用しやすい専門図書室とするため、蔵書の分類を国語研の独自分類から多くの大学等で使用されている日本十進分類法（NDC）に変更し、再配架を行った。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9時30分～17時
(土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室)
- ・主なコレクションには、東条操文庫（方言）、大田栄太郎文庫（方言）、保科孝一文庫（言語問題）、見坊豪紀文庫（辞書）、カナモジカイ文庫（文字・表記）、藤村靖文庫（音声科学）、林大文庫（国語学）、輿水実文庫（国語教育）、中村通夫文庫（国語学）などがある。
- ・「国立国語研究所 蔵書目録データベース」をWeb検索できる。
- ・図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写を申し込み、郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数（2013年2月28日現在）

	図書	雑誌
日本語	119,439冊	5,231種
外国語	29,430冊	528種
計	148,869冊	5,759種

※視聴覚資料など7,521点を含む

III

国際的研究協力と社会貢献

1 国際的研究協力

国語研全体の研究テーマである「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」をグローバルな観点から推進し、その優れた研究成果を、社会へと発信・還元している。

オックスフォード大学との提携

日本語のコーパス（言語の実態を把握するための電子化された大規模言語資料）の整備・構築を進めている国語研では、現代語だけではなく、歴史的な日本語のコーパスの構築も進めている。現在、イギリス・オックスフォード大学の日本語・日本語学研究センターでも古代語コーパス構築のプロジェクトが進行中であり、両研究所は互いに知見を提供し合い、この困難な事業をより効率的に進めるために学術的な協力関係を結んでいる。これにより、汎用性の高いコーパスを世界レベルで提供できることが期待されている。

マックスプランク研究所との提携

ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所（言語学部門）が展開している世界諸言語における動詞の項交替プロジェクトに、国語研は日本語の調査・分析について協力している。2011年にマックスプランク研究所で開かれた世界諸言語の項交替に関する国際会議に参加したのに続き、2012年には国際シンポジウムを国語研主催で開催し、互いの研究者の交流のもとに研究を進めている。

アメリカ議会図書館との研究連携

アメリカ議会図書館アジア部日本課の協力により、同館が所蔵する『源氏物語』の翻字を進め、全54巻の本文データをウェブ上で公開している。また、「桐壺」「須磨」「柏木」の3巻については、同館から提供を受けた画像データの公開も国語研で行っている。

国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、NINJAL国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している。

英文日本語研究ハンドブック刊行計画

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社 ベルリン／ボストン）からの申し出により、国語研の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定による第一弾として、2013年からは、日本語および日本語言語学の研究に関する包括的な英文日本語研究ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（全11巻予定）を順次刊行する。このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学 / 国立国語研究所客員教授）Masayoshi Shibatani (Rice University)

影山太郎（国立国語研究所 所長）Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成

全巻英文、各巻 600 ~ 700 ページ

1. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig (University of Oxford / NINJAL), Satoshi Kinsui (Osaka University / NINJAL) and John Whitman (NINJAL).

2. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*

Edited by Haruo Kubozono (NINJAL).

3. *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*

Edited by Taro Kageyama (NINJAL) and Hideki Kishimoto (Kobe University).

4. *Handbook of Japanese Syntax*

Edited by Masayoshi Shibatani (Rice University / NINJAL), Shigeru Miyagawa (MIT / NINJAL) and Hisashi Noda (NINJAL).

5. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen (Harvard University) and Yukinori Takubo (Kyoto University / NINJAL).

6. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*

Edited by Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL).

7. *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe (NINJAL) and Tetsuo Nitta (Kanazawa University)

8. *Handbook of the Ryukyuan Languages*

Edited by Patrick Heinrich (Dokkyo University), Shinsho Miyara (formerly, University of the Ryukyus) and Michinori Shimoji (Kyushu University / NINJAL)

9. *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue (Meikai University / NINJAL), Mayumi Usami (Tokyo University of Foreign Studies) and Yoshiyuki Asahi (NINJAL)

10. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*

Edited by Mineharu Nakayama (Ohio State University / NINJAL)

11. *Handbook of Japanese Applied Linguistics*

Edited by Masahiko Minami (San Francisco State University / NINJAL)

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員（2012 年度新規 8 名）として招へいすると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う、外来研究員（2012 年度新規 6 名）や特別共同利用研究員として受け入れている。

各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化

日本語を第二言語として習得した人々のことばを収集し、日本語変種の本格的な記述作業を行うこ

とにより第二言語の状況と変容の事象を取り上げて研究対象とするため、ハワイ大学マノア校オーラルヒストリーセンター、ハワイ日本文化センター、UCLA Charles E. Young Research Library、ブラジルサンパウロ人文学研究所、米国サクラメント市歴史センター、カナダバンクーバー日系プレイス等が所蔵するオーラルヒストリー資料の書き起こし及びデータのデジタル化に関して覚書締結の準備に着手した。

2 社会貢献

消滅危機方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国語研では日本語コーパスの整備を進めており、英語等の主要なコーパスと肩を並べる1億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を2011年に全面的に公開した。これにより、用法や表記の揺れの実態が端的に把握できる等の利便性を、研究者のみならず、日本語（国語）教師、日本語学習者、マスコミなど多方面に提供している。さらに、100億語規模の超大規模現代日本語コーパスの設計・構築も進行中である。

多文化共生社会における日本語教育研究

近年、在日外国人や留学生の増加とともに日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している。様々な言語的・文化的背景を持つ人びとが生活する現代社会においては、それにふさわしい日本語教育や学習の在り方に関する探究がますます大切になっている。国語研は、第二言語（外国語）としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究によって、国内外における日本語教育・学習の内容と方法の改善や、異文化摩擦などの社会的問題の解決に資する成果を提供している。

地方自治体との連携

- ・地方自治体の協力を得て、研究成果を分かり易く説明するNINJALセミナーを各地で開催している。（内容はp.102に掲載）
- ・立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書を取り交わした。（2013.3）
2013年度より共同企画事業を実施する。

訪問者の受入

NINJAL職業発見プログラム

- 2012.4.14 愛知教育大学附属岡崎中学校
2012.8.8 兵庫県立兵庫高等学校

- 2012.9.20 群馬県立高崎東高等学校
- 2012.9.25 群馬県立高崎東高等学校
- 2012.11.2 開智高等学校
- 2012.12.27 東京都立日比谷高等学校

見学・研修

- 2012.6.1 文部科学省関係機関職員研修生実地研修
- 2012.7.24 立川市立中学校教育研究会国語部会
- 2012.8.9 情報・システム研究機構新人研修
- 2013.1.7 立川市副校長会研修

学会等の共催・後援

共催

- ・関西言語学会第37回大会 2012.6.2-3
主催者：関西言語学会，開催地：甲南女子大学
- ・第5回「日本語教育とコンピュータ」国際会議 2012.8.20-22
主催者：日本語教育支援システム（CASTEL/J）研究会，開催地：名古屋国際センターホール，名古屋外国語大学
- ・社会言語科学会第31回研究大会 2013.3.16-17
主催者：社会言語科学会，開催地：統計数理研究所

後援

- ・第3回立川文学賞 2012.6-2013.5
主催者：立川文学賞実行委員会
- ・2012年日本語教育国際研究大会 2012.8.17-20
主催者：日本語教育学会，開催地：名古屋大学，ウイングあいち
- ・全養協第1回セミナー 2012.11.18
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会，開催地：千駄ヶ谷日本語教育研究所
- ・日本語ボランティアシンポジウム 2012「二つの言語の間で育つ子どもたち 一日本で子育てる親に伝えたいことー」 2012.12.1
主催者：公益財団法人名古屋国際センター，開催地：名古屋国際センター
- ・平成24年度日本語教育能力検定試験 2012.10.28
主催者：公益財団法人日本語教育支援協会
- ・第4回産業日本語研究会・シンポジウム 2013.3.1
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構（Japio），開催地：東京大学情報学環・福武ホール

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

- 第6回「グローバル社会における日本語のコミュニケーション—日本語を学ぶことはなぜ必要か—」
2013年3月10日（一橋大学一橋講堂）

講演

1. 「共通語としての英語、そして日本語」

鳥飼久美子（立教大学、NHK『ニュースで英会話』監修及びテレビ講師）

2. 「日本語を教えることの楽しさと難しさ」

迫田久美子（国立国語研究所）

3. 「道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道」

莫邦富（作家、ジャーナリスト）

4. 「2050年の日本語はどうなる？」

西原鈴子（国際交流基金日本語国際センター 所長）

5. 「オラの愛する元気な日本・大好きな日本語」

ダニエル・カール（山形弁研究家、タレント）

パネルディスカッション

ダニエル・カール、莫邦富、迫田久美子、鳥飼久美子、西原鈴子

司会：野田尚史（国立国語研究所）

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて、その研究内容を様々な形で一般の方々に発表し、地域社会と触れ合う場として NINJAL セミナーを次のように実施した。

○漢文訓読再発見

2012年7月27日（富山大学）

○八丈・島ことば調査のつどい

2012年9月9日（東京都八丈島：八丈町保健福祉センター）

○Workshop on Suspended Affixation

2012年10月26日～2012年10月27日（米国コーネル大学）

○与論・島ことば調査のつどい

2012年12月2日（鹿児島県大島郡与論町 与論町中央公民館）

○沖永良部・島ことば調査のつどい

2012年12月5日（鹿児島県大島郡和泊町 えらぶ長浜館）

○ことばの文化講演会

2013年3月10日（山形県鶴岡市 鶴岡市中央公民館）

人間文化研究機構関係 公開講演会・シンポジウム

○大規模災害と人間文化研究（関東会場）

2013年3月21日（フクシマ東京ステーション）

○大規模災害と人間文化研究（関西会場）

2013年3月24日（国立民族学博物館）

国語研の一般公開

研究活動の紹介をするため研究所の公開を行っている。

2012年10月20日（国立国語研究所）

プログラム：

・ことばの講演会

「コンピュータを使った日本語研究」前川喜久雄（言語資源研究系長）

・ことばのワークショップ

「コーパスを作つてみよう —全文検索システム『ひまわり』—」山口昌也（言語資源研究系）

「日本語のかかりうけゲーム」淺原正幸（コーパス開発センター）

・その他

国語研ツアー：研究所内をガイド、貴重本の公開

研究活動の紹介：研究所の紹介映像のほか、共同研究の紹介パネルなどを展示

書籍展示コーナー：所員の本をはじめとする言葉に関する本の展示・販売

児童・生徒向けイベント

職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問の楽しさやすばらしさを知つてもらうためのプログラム。（受入校は、p.100に掲載）

ジュニアプログラム（小学生向け）

小学生が「ことばっておもしろい」と感じてくれるようなプログラムを実施する。

○めざせ、ことば博士！辞書をつくつてみよう！

2012年7月31日（立川市錦学習館）

対象：小学3～6年生

講師：プラシャント・パルデシ（言語対照研究系）

柏野和佳子（言語資源研究系）

今村泰也（言語対照研究系非常勤研究員）

ニホンゴ探検 2012 —1日研究員になろう！—

2012年7月21日（国立国語研究所）

対象：小学校高学年から中学生程度の児童、生徒

内容：

・ことばのミニ講義

「ことばのパズル」野田尚史（日本語教育研究・情報センター）

「国語辞典をひくのが面白くなる話」柏野和佳子（言語資源研究系）

・にほんごスタンプラリークイズ

・辞書引きコーナー

・ことばシアター

3 大学院教育と若手研究者育成

（1）連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。その中で、国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。

(2) 特別共同利用研究員制度

国語研では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備、文献等の利用や、国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。(2012年度新規2名受入)

(3) NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、全国各地で実施している。2012年度は第7回から第12回を実施した。

受講対象：原則として、大学院生レベル

- ・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等

○第7回 2012年6月24日（北海道大学）

「日本語教育に生かす第二言語習得研究—学習者にとって何が難しいのか—」

講師：日本語教育研究・情報センター教授 迫田久美子

○第8回 2012年7月26日（キャンパス・イノベーションセンター東京）

「連濁の言語学」

講師：理論・構造研究系教授 ティモシー・J・バンス

○第9回 2012年8月9日（駅前のごみビル：仙台市）

「連濁の言語学」

講師：理論・構造研究系教授 ティモシー・J・バンス

○第10回 2012年10月28日（南山大学）

「日本語教育に生かす第二言語習得研究—学習者にとって何が難しいのか—」

講師：日本語教育研究・情報センター教授 迫田久美子

○第11回 2013年3月8～9日（九州大学）

「方言のフィールド調査法」

講師：言語対照研究系客員准教授 下地理則

○第12回 2013年3月21日（国立国語研究所）

「方言地図の基礎とGISの技法」

講師：時空間変異研究系教授 大西拓一郎

講習会

言語資源研究系・コーパス開発センターでは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の形態論情報検索手法について講習会を開催している。講習内容は初心者を対象としたもので、Webインターフェース『中納言』の実習が中心となる。

○『中納言』講習会 2013年3月6日（国立国語研究所）

○『日本語話し言葉コーパス』コアRDB講習会 2013年3月29日（国立情報学研究所）

(4) 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスとなる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）を設け、公募により積極的に採用している。
(2012 年度在籍者 7 名、内新規採用 3 名)

IV

教員の研究活動と成果

影山 太郎（かげやま たろう）国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】Ph.D（言語学）（南カリフォルニア大学, 1977）

【学歴】大阪外国語大学英語学科卒業（1971），大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了（1973），南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了（1977）

【職歴】神戸学院大学（1973-1974），大阪大学（1978-1987），関西学院大学（1987-2009；2009年より名誉教授），パリ第7大学（招聘教授，2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長（2009.4），国立国語研究所 所長（2009.10）

【専門領域】言語学，形態論，語彙意味論，統語論

【所属学会】日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本英語学会，関西言語学会，アメリカ言語学会（complimentary life member）

【学会等の役員・委員】日本言語学会 顧問（前会長）・評議員，日本語学会 評議員，日本英語学会 評議員，関西言語学会 運営委員，特定非営利活動法人言語資源協会（GSK）理事，日本国際教育支援協会 理事，文化審議会国語分科会 委員

【受賞歴】

1994 第22回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，著書『文法と語形成』）

1980 市河賞（財団法人語学教育研究所，著書『日英比較 語彙の構造』）

1973 東京言語研究所言語学懸賞論文賞（東京言語研究所，論文「場所理論的見地から」『言語の科学5』）

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」：リーダー

日本語の語形成とレキシコンの諸特性の中で際立って特徴的な4つの性質（属性叙述，動詞の自他交替，複合動詞，語形成と統語・意味との係わり）について研究チームごとに1～3の活動を行った（属性叙述チームは2011年に論文集を出版した）。

1. 「動詞の自他交替」チーム

①マックスプランク進化人類学研究所との研究協力に基づき国際シンポジウム「日本語の自他と項交替（Valency Classes and Alternations in Japanese）」を開催し，招待講演（17件）と公募による若手研究者ポスター発表（7件）を実施した（2012.8.4-5，参加者延べ264名）。

②招待講演に基づく論文集 *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (ed. Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen) の出版に向けて De Gruyter Mouton 社と契約を結んだ。

2. 「複合動詞」チーム

①公募した若手研究者の発表を含む公開発表会を名古屋大学（2012.4）と東北大学（2012.9）で開催し，国内出版の準備を進めた。

②関西言語学会第37回大会シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」（2012.6.2）で講演を2件行った。

③啓蒙活動として，大阪大学言語社会学会（2012.6.28）での公開講演と，日本言語学会夏期講座

(2012.8.20 – 25) での講義を行った（リーダー）。

④「複合動詞文献一覧」(PDF) を Web 公開した。

⑤2700語超のデータベース「複合動詞レキシコン（開発版）」をオンライン公開した。

3. 「語形成と意味・統語」チーム

①『レキシコンフォーラム No.6』(ひつじ書房, 2013.1) で特集「日本語レキシコン入門」(メンバーによる解説 8 篇) を出版した。

② Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* の出版契約を Walter de Gruyter 社と結び、執筆に入った。

【研究業績】

《著書・編書》

影山太郎, 沈 力 (編)

『日中理論言語学の新展望 2：意味と構文』, くろしお出版, 2012.4.

影山太郎, 沈 力 (編)

『日中理論言語学の新展望 3：語彙と品詞』, くろしお出版, 2012.7.

影山太郎 (編)

『レキシコンフォーラム No.6』, ひつじ書房, 2013.1.

《論文・ブックチャプター》

影山太郎, 沈 力

「付加詞主語構文の属性叙述機能」影山太郎・沈 力 (編), 『日中理論言語学の新展望 2: 意味と構文』 pp.27-65. 2012.4.

Taro Kageyama

“Diversity and uniformity of grammar: When ungrammatical expressions become grammatical”, *Journal of Japanese Linguistics* 28, pp.5-29. 2012.12.

影山太郎

「語彙的な複合動詞と補助動詞」, 『レキシコンフォーラム No.6』 pp.285-301. ひつじ書房, 2013.1.

影山太郎

「レキシコンの基礎知識」, 『レキシコンフォーラム No.6』 pp.1-18. ひつじ書房, 2013.1.

影山太郎, 斎藤倫明

「語種と語形成」, 『レキシコンフォーラム No.6』 pp.19-41. ひつじ書房, 2013.1.

《データベース類》

影山太郎, 神崎享子

「複合動詞レキシコン（開発版）」<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/> 2013.3.

《その他の出版物・記事》

Taro Kageyama, 編集協力 Pavol Štekauer, Salvador Valera, and Livia Kortvelyessy (eds.)

Word-Formation in the World's Languages: A Typological Survey, Cambridge, Cambridge University Press, 2012.4.

影山太郎

「動詞意味論を超えて」(『言語』2002年11月号の再録), 『「言語」セレクション第1号』 pp.218-224. 大修館書店, 2012.4.

影山太郎

「<著書紹介>影山太郎編著『名詞の意味と構文』(大修館書店)」,『国語研プロジェクトレビュー』3 (1), pp.57-58. 2012.7.

影山太郎

「<著書紹介>影山太郎編『属性叙述の世界』(くろしお出版)」,『国語研プロジェクトレビュー』3 (2), pp.100-102. 2012.10.

影山太郎

「日本語学のグローバル化」,『日本語学』31 (14), p.136. 2012.11.

影山太郎

「複合動詞の研究は何に役立つか」, *EX ORIENTE* 20, pp.139-155. (大阪大学言語社会学会) 2013.3.

【講演・口頭発表】

影山太郎

「レキシコンと文法・意味:複合動詞研究のこれから」, 関西言語学会第37回大会, シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」(甲南女子大学) 2012.6.2.

影山太郎

「複合動詞の研究は何に役立つか」, 大阪大学言語社会学会特別公開講演(大阪大学箕面キャンパス) 2012.6.28.

影山太郎

“Morphological structure and transitivity alternations in compound verbs”(複合動詞の形態構造と自他交替), NINJAL国際シンポジウム “Valency Classes and Alternations in Japanese”(日本語の自他と項交替) 2012.8.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・NINJAL国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」(NINJAL International Symposium “Valency Classes and Alternations in Japanese”) (企画・運営) 2012.8.4-5.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・日本言語学会2012年度夏期講座 講師(東京大学) 2012.8.20-25.

窟園 晴夫（くぼぞのはるお）理論・構造研究系 教授、研究系長

1957生

【学位】Ph.D.（言語学）（エジンバラ大学、1988）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部卒業（1979），名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了（1981），名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退（1982），英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了（1986）

【職歴】南山大学外国語学部 助手（1982），同 講師（1984），同 助教授（1990），大阪外国語大学外国語学部 助教授（1992），カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員（フルブライト若手研究員）（1994-1995），マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員（1995），神戸大学文学部 助教授（1996），同 教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授，研究系長（2010）

【専門領域】言語学，日本語学，音声学，音韻論，危機方言

【所属学会】日本音声学会，日本音韻論学会，日本言語学会，関西言語学会，日本音響学会，日本語学会，Association for Laboratory Phonology

【学会等の役員・委員】日本言語学会 常任委員・評議員，日本音声学会 評議員，日本学術会議 連携会員，理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員，台湾東吳大学 客員教授，日米教育委員会フルブライト奨学金審査委員，市河三喜賞 審査委員，Member of the Executive Committee, The Association for Laboratory Phonology, Member of the Editorial Board, *Natural Language and Linguistic Theory*.

【受賞歴】

2010 国立国語研究所第1回所長賞

1997 金田一京助博士記念賞（金田一賞）

1995 市河三喜賞

1988 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985 イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」：リーダー

研究目的：

本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し，世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。

研究成果：

促音とアクセントについて共同研究を推進し，次の成果を得た。

1. アクセントと促音に関する国際会議をNINJAL国際シンポジウム（ICPP 2013）として実施し，国内の研究成果（合計28件の発表，うちプロジェクトから11件）を発信した。
2. これまでの国際会議（ISAT 2010, GemCon 2011）の成果を編集して海外の専門誌に投稿した結果，ISAT 2010の論文8本が*Lingua* 122巻13号（特集号，Special issue on 'Varieties of pitch accent systems'）に刊行された。またGemCon 2011の論文3本が*Journal of East Asian Linguistics* 特集号に採択された（2013.11月号に掲載内定）。
3. 年5回の研究成果発表会と国際シンポジウム（ICPP 2013）（計12日）を東京（3回），関西（2回），九州（1回）で開催した。すべてを公開とした結果，第1～3回発表会だけで合計83名（う

ち共同研究員以外 39 名、47%）の参加を得た。また発表を公募とした結果、合計 90 件（全 5 回 + 国際シンポジウム）の研究発表のうち 55 件（61%）が共同研究員以外（主に若手研究者）の発表であった。

4. 合計 5 回（計 9 日）の研究発表会と 3 日間の国際シンポジウムにおいて、合計 31 名の若手研究者（大学院生および非常勤）に発表の機会を提供し、うち 15 名に対し旅費の支援を行った。また国際シンポジウムでは全国の大学院生を多数アルバイトとして雇用し、旅費を支援した。

【研究業績】

《著書・編書》

窟蘭晴夫

編著 “Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems”, *Lingua* 122 (13), pp.1325-1522. 2012.

《論文・ブックチャプター》

窟蘭晴夫

「鹿児島県甑島方言のアクセント」, 『音声研究』 16 (1), pp.93-104. 日本音声学会, 2012.

Kubozono, Haruo

“Introduction : Special issue on varieties of pitch accent systems”, *Lingua* 122, pp.1325-1334. 2012.

Kubozono, Haruo

“Varieties of pitch accent systems in Japanese”, *Lingua* 122, pp.1395-1414. 2012.

《その他の出版物・記事》

窟蘭晴夫

「研究の歩み」, 『日本語学』 31 (14), p38. 明治書院, 2012.11.

窟蘭晴夫

「新著紹介「数字とことばの不思議な話」」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (1), pp.49-50. 2012.7.

窟蘭晴夫

「新刊紹介「ことばワークショップ－言語を再発見する」」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (1), pp.51-54. 2012.7.

【講演・口頭発表】

窟蘭晴夫

「レキシコンと音声研究—アクセント研究を中心に」, 関西言語学会 37 回大会シンポジウム「レキシコン研究の最前線」(甲南女子大) [発表・司会] 2012.6.2.

窟蘭晴夫

Comments on “A field method course of Saudi Arabian sign language”, International Symposium on Signed and Spoken Linguistics. (大阪, 国立民族学博物館) 2012.7.29.

窟蘭晴夫

“Word-level versus sentence-level prosody in Japanese”, FAJL 6 (6th Conference on Formal Approaches to Japanese Linguistics) (ベルリン, フンボルト大学) [招待講演] 2012.9.27.

窟蘭晴夫

「日英対照音韻論」, ことばの科学会 (関西学院大学梅田キャンパス) [招待講演] 2012.10.7.

窟蘭晴夫

「鹿児島方言におけるアクセントの中和」, 日本言語学会 145 回大会ワークショップ「アクセント・

トーンの中和」（九州大学）〔発表・司会〕 2012.11.25.

窪薙晴夫

“Diversity of pitch accent systems in Japanese”, Institute of Linguistics Academia Sinica (台湾)

〔招待講演〕 2012.12.4.

窪薙晴夫

「日英語のプロソディー」, 津田塾大学言語文化研究所講演会（津田塾大学）〔招待講演〕

2012.12.22.

窪薙晴夫

“Tonal neutralization in Kagoshima Japanese”, International Conference on Phonetics and

Phonology 2013 (国語研) 2013.1.27.

【研究調査】

- ・ 2012.6 鹿児島市, 鹿児島県薩摩川内市 鹿児島方言のアクセント調査
- ・ 2011.11 鹿児島県薩摩川内市 鹿児島方言のアクセント（中和）調査
- ・ 2011.11 福井県越前町 福井県の3型アクセント調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 関西言語学会第37回大会シンポジウム「レキシコン研究の最前線」（企画・運営）2012.6.2.
- ・ International Workshop on Endangered Dialects in Korean and Japanese（企画・運営）2012.10.11.
- ・ 第22回 Japanese Korean Linguistics Conference（企画・運営）2012.10.12-14.
- ・ 日本言語学会145回大会ワークショップ「アクセント・トーンの中和」（企画・運営）2012.11.25.
- ・ NINJAL国際シンポジウム International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2013)（企画・運営）2013.1.25-27.
- ・ 8th Phonology Festa（企画・運営）2013.2.17-18.
- ・ 理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会（企画・運営）2013.3.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
南山大学, 兵庫教育大学, 台湾 東吳大学
- ・ 講師：東京言語研究所理論言語学講座

Timothy J.Vance (ティモシー・J・バンス) 理論・構造研究系 教授

1951 生

【学位】Ph.D. (言語学) (シカゴ大学, 1979)

【学歴】ワシントン大学(セントルイス)卒業(1973), シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了(1976), シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了(1979)

【職歴】ハワイ大学マノア本校 准教授(1988), コネチカット・カレッジ 准教授(1993), 同 教授(1994), アリゾナ大学 教授(2000), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授(2010)

【専門領域】言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 言語科学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 編集委員, 日本音韻論学会 理事

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン一連濁事典の編纂」: リーダー

1. 共同研究組織に適切なメンバーを4名加え, プロジェクトの最終目的である“連濁事典”的各章の担当者を決定した。ドイツのMouton社との交渉が進み, 英語版(仮称: *Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds*)の出版が内定した。
2. 12月にマーク・アーウィン共同研究員と宮下瑞生共同研究員が「連濁データベース」の試用版を公開した。
3. プロジェクト共同研究員による査読付き論文4件が専門雑誌に掲載された。
4. “連濁事典”で取り上げる課題の1つが「連濁の方言差」であるので, 総合地球環境学研究所から援助を受け, 5月29日~30日に山形県河北町で方言調査を実施した。
5. 2回(計4日)のプロジェクト研究成果発表会を山口市(6月2日~3日)と東京都(11月17日~18日)で開催し, 合計11件の研究発表を行なった。2月17~18日に第8回音韻論フェスティバル(プロジェクト名:「日本語レキシコンの音韻特性」)と共催した。
6. 1月25~27日に国際シンポジウム(ICPP2013)を窓園班と共に催した(参加者数: 約130名, 発表数: 口頭発表24件+ポスター発表26件)。連濁や有声性に関するセッションを設け, 合計5件の発表により連濁プロジェクトの活動について国内外に普及するように努めた。発表者は全員プロジェクト共同研究員以外からの応募であった。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Timothy J. Vance

“English announcements on JR commuter trains in Tokyo: Is she a native speaker?”,
Phonological Studies 15, pp.117-124. 2012.

ティモシー・J・バンス

「御雇外国人 Benjamin Smith Lyman の言語研究(Benjamin Smith Lyman on language: Research by a Meiji era foreign advisor)」,『異文化研究』(*Journal of Cross-Cultural Studies*) 6, pp.89-107. 2012.

Timothy J. Vance

“Benjamin Smith Lyman as a phonetician” *Journal of Japanese Linguistics* 28, pp.31-41. 2012.

《その他の出版物・記事》

Timothy J. Vance

書評：Review of *The Phonology of Japanese* (Laurence Labrune, Oxford University Press).
Lingua 123, pp.168-174. 2013.

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance and Mark Irwin

“The first statement of Lyman’s Law?”, Paris Meeting on East Asian Linguistics (École des Hautes Études en Sciences Sociales, Paris) 2012.6.

Timothy J. Vance

“A look back at Rosen's rule”, 第8回音韻論フェスタ（滋賀県大津市 ホテル木もれび）2013.2.

【研究調査】

- 2012.5 山形県河北町, 連濁方言差調査
- 2012.6 愛媛県大洲市, 連濁方言差調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- 日本音韻論学会「2012年度春期研究発表会」（企画・運営）2012.6.
- 国際シンポジウム「22nd Japanese/Korean Linguistics Conference」（企画・運営）2012.10.
- 国際シンポジウム「International Conference on Phonetics and Phonology」（企画・運営）2013.1.
- 滋賀県大津市「第8回音韻論フェスタ」（企画・運営）2013.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

- NINJAL チュートリアル講師
第8回「連濁の言語学」（東京都）2012.7.26.
第9回「連濁の言語学」（仙台）2012.8.9.

横山 詔一 (よこやま しょういち) 理論・構造研究系 教授, 研究情報資料センター長

1959 生

【学位】博士（心理学）（筑波大学, 1991）

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業（1981）, 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得（1983）, 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学（1985）

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手（1985）, 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員（1991）, 同 情報資料研究部 主任研究官（1995）, 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長（2001）, 同 研究開発部門 グループ長（2006）, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 理論・構造研究系 教授, 研究情報資料センター センター長（2010）

【専門領域】認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 運営委員, 社会言語科学会 理事, 計量国語学会 理事, 社会言語科学会研究大会発表賞選考委員会 委員長, 日本心理学会教科書作成委員会 副委員長, 日本心理学会認定心理士認定基準作成 委員, 筑波大学留学生センター 日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員

【受賞歴】

2010 社会言語科学会 第9回徳川宗賢賞（優秀賞）

2010 国立国語研究所第1回所長賞

1997 日本教育工学会 第11回日本教育工学会論文賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：リーダー

研究目的：

日本語の文字表記について、文字環境（文字レキシコンを含む）のモデルを作成する。そのモデルは、日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか、日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。また、本プロジェクトが提唱する文字環境モデルは、音声コミュニケーションに関する研究にも利用できる。具体的には、山形県鶴岡市で1950年から約20年間隔で3回行われた共通語化の縦断調査や、愛知県岡崎市で1951年から実施してきた敬語の経年調査などの大規模データベースを活用しながら、時空間変異研究系と連携して言語変化の新たな理論を導出する。とりわけ、山形県鶴岡市の共通語化研究については、統計数理研究所のプロジェクトと連動しながらデータ整理を進め、言語変化理論の検証に必要な統計解析を可能にするための基盤を整備する。このような学術的挑戦は、単に文字論だけではなく、社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をもたらし、既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

研究成果：

1. 文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に関する理論研究をおこなった。その成果の一部を、日本語学習者用漢字教材開発に応用し、中央アジアに位置するキルギス国の研究者と共同で国際学会において発表した。
2. 文字環境の実態把握に向けて、海外の文字研究者を含めて調査デザインや研究法の検討を進め、実務にも利用できる図書を公刊した。
3. 国語研が実施してきた言語行動の大規模経年調査をコウホート研究の視座からとらえ直し、その

方法論（分析手法を含む）や結果を統計数理研究所と共同で日本心理学会や日本行動計量学会などで紹介した。

4. 第4回鶴岡共通語化調査で得られた大量データの整理の一部を継続して進めた。

【研究業績】

《著書・編書》

福谷孝二, 高田智和, 長村 玄, 横山詔一（編著）

『新しい外国人住民制度の窓口業務用解説—外国人の漢字氏名の表記に関する実務』, 日本加除出版, 2012.

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「異体字選好の地域差に関する計量的研究」, 『言語・情報・テクスト』(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻, pp.13-25. 2012.

《その他の出版物・記事》

横山詔一, 「新刊寸感」, 『日本語学』, 明治書院, 2012.6.

横山詔一, 「新刊寸感」, 『日本語学』, 明治書院, 2012.12.

【講演・口頭発表】

横山詔一, ガリーナ・ヴォロビヨワ

「形と意味の連想記憶を利用した初級漢字教授法」, 日本語教育国際研究大会（名古屋大学）2012.8.

Takashi Nakamura, Takahito Abe, Tadahiko Maeda, Masato Yoneda & Shoichi Yokoyama

“Analysis of language standardization in Tsuruoka, Japan, using Nakamura's Bayesian Age-Period-Cohort Model”, *URBAN LANGUAGE SEMINAR 10 MANAGING LINGUISTIC DIVERSITIES*, (Utrecht, Holland) 2012.8.

Takahito Abe, Tadahiko Maeda, Masato Yoneda, Takashi Nakamura & Shoichi Yokoyama

“Design and administration of the fourth survey of language standardization in Tsuruoka, Japan”, *URBAN LANGUAGE SEMINAR 10 MANAGING LINGUISTIC DIVERSITIES*, (Utrecht, Holland) 2012.8.

中村 隆, 阿部貴人, 米田正人, 前田忠彦, 横山詔一

「『鶴岡市における共通語化の調査』データのコウホート分析（2）—ベイズ型コウホートモデル（XXIII）—」, 日本行動計量学会第40回大会（新潟県立大学）2012.9.

横山詔一, 阿部貴人, 前田忠彦, 米田正人, 中村 隆

「音韻とアクセントに関する共通語運用能力の生涯変化」, 行動計量学会（新潟県立大学）2012.9.

横山詔一

「コウホート研究への招待—調査デザインと分析法—話題提供その3：コウホート系列法による共通語運用能力の生涯発達研究」, 日本心理学会第76回大会ワークショップ（専修大学）2012.9.

横山詔一

「「ことば」と「考え方」の変化研究：社会言語学の源流を追って—言語と社会とココロの連鎖モデル」, 社会言語科学会第31回大会シンポジウム（統計数理研究所, 国立国語研究所）2013.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・日本心理学会第76回大会ワークショップ「コウホート研究への招待—調査デザインと分析—」(企画・運営) 2012.9.
- ・社会言語科学会第31回大会シンポジウム「「ことば」と「考え方」の変化研究：社会言語学の源流を追って」(企画・運営) 2013.3.
- ・NINJAL セミナー(鶴岡市)「ことばの文化講演会」(企画・運営, 司会) 2013.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」の企画運営(広報委員長) 2012.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 理論・構造研究系 准教授

【学位】博士（理学）（奈良先端科学技術大学院大学, 1998）

【学歴】千葉大学大学院行動科学研究科修士課程修了（文学）（1996），奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了（理学）（1998）

【歴歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員（1996），国立国語研究所言語行動研究部 研究員（1998），同 主任研究員（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授（2009）

【専門領域】コーパス言語学，談話分析，認知科学

【所属学会】日本認知科学会，社会言語科学会，言語処理学会，人工知能学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 事業委員

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「会話の韻律機能に関する実証的研究」：リーダー
研究目的：

音声コーパスに基づく定量的分析を通して日本語会話における韻律情報の持つ機能を検討することである。特に会話と独話を対象に韻律の傾向を分析・比較し、両者の類似点・相違点を明らかにした上で、日本語会話における韻律情報の機能を実証的に検証する。また分析に利用する『日本語話し言葉コーパス』のうち対話関連情報を中心に一部拡張・修正した上で、各種情報を統合したRDB形式のデータを構築して一般に公開することも目指す。

研究成果：

『日本語話し言葉コーパス』を対象に、主に、①上昇調・上昇下降調などの複合句末境界音調の発言継続表示機能の検討、②複合句末音調のピッチレンジ制御に関わる要因の分析、③発話中のF0に関わる主に統語的要因の分析、の三つの研究を実施した。また分析の対象とする『日本語話し言葉コーパス』を対象に、各種追加アノテーションや修正作業をした上で、リレーションナルデータベース(RDB)を構築し、CSJ-RDB version 1.0として3月に一般公開した。また CSJ-RDB の利用に関する講習会も開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「テキストの多様性をとらえる分類指標 一体系化の試みー」，『コーパスとテキストマイニング』
pp.70-82, 共立出版, 2012.

《国際会議録》

Yuichi Ishimoto & Hanae Koiso

“Prosodic features of utterances in the Corpus of Spontaneous Japanese: Intonation phrase-based approach”, *Proceedings of the 15th Oriental COCOSDA* (Macau) pp.296-299. 2012.12.

Igarashi Yosuke & Hanae Koiso

“Pitch range control of Japanese boundary pitch movements”, *Proceedings of Interspeech* (Portland) pp.1949-1952. 2012.9.

Yasuhiro Den, Hanae Koiso, Katsuya Takanashi, and Nao Yoshida

“Annotation of response tokens and their triggering expressions in Japanese multi-party conversations”, *Proceedings of the 8th Language Resources and Evaluation Conference* (Istanbul)

pp.1332-1337. 2012.5.

《データベース類》

- ・『日本語話し言葉コーパス』RDB 版 (version 1.0)
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/data/

【講演・口頭発表】

小磯花絵

「独話と対話における句末音調の比較 —『日本語話し言葉コーパス』を用いて—」, 『社会言語学会第 30 回研究大会発表論文集』 pp.144-147. (東北大学) 2012.9.

小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを用いた複合境界音調の発言継続表示機能の検討」, 『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.221-230. (国立国語研究所) 2012.9.

五十嵐陽介, 小磯花絵

「句末境界音調のピッチレンジに与える要因:『日本語話し言葉コーパス』の分析」, 『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.15-24. (国立国語研究所) 2012.9.

石本祐一, 小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを用いた統語境界におけるイントネーション句変動の分析」, 『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.239-246. (国立国語研究所) 2012.9.

土屋智行, 伝 康晴, 小磯花絵

「会話コーパスの転記方式の相互変換に向けて —イントネーションに着目して—」, 『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.117-126. (国立国語研究所) 2012.9.

小磯花絵, 前川喜久雄, 五十嵐陽介

「『日本語話し言葉コーパス』における韻律単位の認定基準について」, 『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.351-359. (国立国語研究所) 2013.3.

石本祐一, 小磯花絵

「自発発話におけるイントネーション句単位の F0 変動の特徴」, 『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.333-342. (国立国語研究所) 2013.3.

土屋智行, 伝 康晴, 小磯花絵

「会話分析方式への転記変換におけるデータ間・個人間のゆれに関する分析」, 『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.417-424. (国立国語研究所) 2013.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・CSJ-RDB 講習会初級編 (国立情報学研究所) (企画・講師) 2013.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・社会言語科学会 ELAN 講習会 (鷹泉閣岩松旅館) (運営) 2013.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師: 青山学院大学

高田 智和 (たかだともかず) 理論・構造研究系 准教授

1975生

【学位】博士（文学）（北海道大学、2004）

【学歴】北海道大学文学部卒業（1999）、北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了（2001）、北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2005）、同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006）、同研究開発部門言語生活グループ 研究員（2007）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学、国語学、文献学、文字・表記、漢字情報処理

【所属学会】日本語学会、訓点語学会、計量国語学会、情報処理学会、日本言語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会電子情報委員会 委員長、計量国語学会 理事、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 幹事、情報処理学会情報規格調査会SC2専門委員会 委員、国際符号化文字集合（UCS）JIS改正原案作成委員会 委員、文字情報基盤構築推進委員会 委員

【受賞歴】

2013 北海道大学文学部同窓会榆文賞

2010 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 日本規格協会標準化貢献賞

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「訓点資料の構造化記述」：リーダー

研究目的：

漢文訓点資料は、文字、音韻、語彙、語法などの面で、日本語史研究の資料として活用されてきた。訓点資料は歴史的・文化財的・教学的価値の高いものが多く、原本調査の難しいものが多い。そのため、重要典籍については、研究者による釈文や、影印、複製が公刊されているものもあるが、釈文は純然たる一次資料ではなく、影印、複製それ自体が稀観品であったり、白黒印刷であったりと、研究利用にあたって少なからず問題もある。また、訓点資料研究においては、釈文の電子テキスト化や、原本の画像化など、総じてデジタル技術の導入が、他の分野に比べて立ち遅れている現状である。本研究では、国立国語研究所図書館蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經卷第一』（平安初期書写、院政期加点）を例に、(1) 原本調査に基づいて、解読結果である釈文の構造化記述の方法を検討し、(2) 釈文と原本デジタル画像とを対照表示できるシステム開発の基礎研究を行う。また、韓国の口訣資料を扱う研究者との共同研究によって、研究方法や資料共有について知見を交換するとともに、漢文訓読の日韓対照研究の可能性を探ることも視野に入れる。

研究成果：

(1) 国立国語研究所蔵金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經閲覧システムの公開

<http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/>

(2) 国立国語研究所共同研究報告12-8『訓点資料の構造化記述成果報告書』

人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」：代表者

研究目的：

海外に移出した仮名写本（米国議会図書館蔵『源氏物語』）について、所蔵機関との連携のもと原本調査を行い、翻字本文・書誌情報などの基礎研究成果を、国内外の日本語学研究者・日本文学研究

者へ速報的に提供する（Web 公表及び報告書刊行）。また、作成した翻字本文を用いて、校訂を経る以前の、一次翻字テキストによる形態素解析処理の実験を行う。

研究成果：

- (1) 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文の試験公開
<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>
- (2) 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木）の試験公開
http://www2.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/
- (3) 『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文 一匂宮～夢浮橋一』

人間文化研究機構資源共有化推進事業「雑誌「国語学」全文データベース整備」：代表者

研究目的：

雑誌「国語学」全文データベースは学界を代表する研究誌のフルテキストデータベースであり、日本語研究にとって極めて価値の高いものである。国立国語研究所の学界連携の一環として2011年3月から公開運用を行っているが、本文画像データや各号目次ページの整備が不十分である。本課題では、本文画像データや各号目次ページの整備を行い、より利用価値の高いデータベースとして展開させ、人間文化研究機構の統合検索システムへの参加を目指す。

研究成果：

雑誌「国語学」全文データベース <http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/>

【研究業績】

《著書・編書》

高田智和、福谷孝二、長村 玄、横山詔一（編著）

『新しい外国人住民制度の窓口業務用解説—外国人の漢字氏名の表記に関する実務一』、日本加除出版、2012.7.

《論文・ブックチャプター》

高田智和

「文字・表記（現代・理論）」、『日本語の研究』8 (3), pp.75-81. 2012.7.

石塚晴通、豊島正之、池田証寿、白井 純、高田智和、山口慶太

「漢字字体規範データベースの構想と発足」、『漢字字体史研究』pp.79-93. 勉誠出版、2012.11.

高田智和

「行政用漢字の文字同定—汎用電子情報交換環境整備プログラムの場合一」、『漢字字体史研究』pp.173-190. 勉誠出版、2012.11.

高田智和

「国語研本金剛頂經の漢字字体」、『漢字字体史研究』pp.173-190. 勉誠出版、2012.11.

高田智和

「日下部重太郎の漢字研究—三種の「日下部表」と『國民字典』—」、『新时代的世界日语教育研究』pp.231-239. 高等教育出版社、2012.11.

高田智和

「近代日本語文献を電子化するための文字集合—「太陽コーパス」を JIS X 0213 集合で表現する—」、『日本言語文化』第23輯、pp.162-184. 韩国日本言語文化学会、2012.12.

《データベース類》

- ・ 国立国語研究所蔵『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』画像
(卷第二、卷第三を追加公開) (<http://www2.ninjal.ac.jp/kongochokyo/>) 2012.7.

- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文（匂宮、紅梅、竹河を追加公開）
(<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>) 2012.8.
- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文（橋姫、椎本、総角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋を追加公開）(<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>) 2012.12.
- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺を公開）(http://www2.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/) 2013.3.
- ・雑誌「国語学」全文データベース（データ追加と更新）(<http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/>)
《その他の出版物・記事》

高田智和

「文字コード標準化」,『人文情報学月報』第9号, <http://www.dhii.jp/DHM/dhm09>, 2012.4.

高田智和

「計量国語学会第56回大会シンポジウム「計量国語学に望むもの」」,『人文情報学月報』第16号,
<http://www.dhii.jp/DHM/dhm16>, 2012.11.

【講演・口頭発表】

高田智和

「近代日本語文献を電子化するための文字集合 — 「太陽コーパス」を JIS X 0213 集合で表現する一」, 韓國日本言語文化學會 2012 年度春季國際學術大會（韓國外國語大學）2012.5.

中野真樹, 渡辺由貴, 早田美智子, 高田智和

「国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」の機能拡張および連携活用」, 日本語学会 2012 年度春季大会（千葉大学）2012.5.

須永哲矢, 堤智昭, 高田智和

「明治前期の漢字活字と JIS 漢字包摶規準 — 『明六雑誌』活字字形への、包摶規準適用実験—」, 第 95 回人文科学とコンピュータ研究会（京都大学地域研究統合情報センター）2012.8.

渡辺由貴, 中野真樹, 早田美智子, 高田智和

「日本語教育における論文検索 — 国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」」, 2012 International Conference on Japanese Language Education (名古屋大学) 2012.8.

ヴォロビヨワ＝ガリーナ, 山田ボヒネック頬子, 春遍雀來, 加納千恵子, 德弘康代, 高田智和

「漢字と ICT の活用」, The 5th International Conference on Computer Assisted Systems For Teaching & Learning Japanese (名古屋外國語大学) 2012.8.

田中牧郎, 高田智和, 小木曾智信, 近藤明日子, 岡島昭浩, 小野正弘

「近代語コーパスの構築と活用にむけて」, 日本語学会 2012 年度秋季大会（富山大学）2012.11.

堤智昭, 須永哲矢, 高田智和

「コーパス用テキストを対象とした文字処理支援ツール「■箱」—文字校正・処理情報付与作業の効率化」,『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「つながるデジタルアーカイブ—分野・組織・地域を超えて」』pp.171-178. (北海道大学) 2012.11.

田島孝治, 堤智昭, 高田智和

「ヲコト点電子化のためのデータ構造と入力支援システムの試作」,『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「つながるデジタルアーカイブ—分野・組織・地域を超えて」』pp.211-216. (北海道大学) 2012.11.

高田智和

「ISO/IEC10646 への住基文字収録」, 第 7 回ワークショップ : 「文字—ISO/IEC10646 と Unicode

の今—」, (京都大学東京オフィス) 2012.12.

高田智和

「漢字字体と典籍の性格との関係 —「漢字字体規範データベース」が主張するものー」, 第 97 回

人文科学とコンピュータ研究会（東京大学史料編纂所）2013.1.

高田智和

「ヲコト点の座標表現」, 正倉院文書の高度情報化研究シンポジウム（東大寺総合文化センター金

鐘会館）2013.1.

【研究調査】

- ・ 2012.7.7 東大寺図書館 漢文加点資料調査
- ・ 2012.8.7 京都国立図書館 漢文加点資料調査
- ・ 2012.8.27-29 米国議会図書館 源氏物語写本調査
- ・ 2012.11.26-30 大英図書館 敦煌文献調査
- ・ 2013.2.19-22 漢喃研究所・ハノイ極東学院・ホーチミン市人文社会科学大学
ベトナム語漢文加点資料調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2012」(実行委員会委員)

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ NINJAL セミナー「漢文訓読再発見」(富山大学) (司会) 2012.7.27.

三井 はるみ (みつい はるみ) 理論・構造研究系 助教

【学位】修士（文学）（東北大学、1986）

【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程単位修得満期退学（1989）

【職歴】昭和女子大学講師（1989），国立国語研究所主任研究官（1997），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教（2009）

【専門領域】日本語学，社会言語学，方言文法

【所属学会】日本語学会，日本方言研究会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語教育学会，日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 広報委員，日本音声学会 評議員，日本語教育学会 査読協力者

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」：リーダー

研究目的：

首都圏の言語の実像を多角的重層的に把握する総合的研究の基盤を築くことを目的とする。

研究成果：

論文4件，報告書2件，発表・講演9件を公表した。

1. 研究会活動：公開の共同研究発表会（2回），共同研究員を中心とした懇話会（2回），ゲストスピーカーによる勉強会（2回）を開催した。勉強会は，伝統的東京方言話者言語調査・収録を兼ねて実施した。
2. 新規調査研究活動：2011年度に開発した携帯電話を用いた言語調査システムの改良を行った。首都圏の言語の多様性を具体的なケースから明らかにするために，同システムを用いて，首都圏の大学生を対象に，非標準形の使用と意識に関する共同アンケート調査を行った。結果の一部を，学会（3件）等で報告した。また，2012年度に実施した「首都圏における方言の地域資源としての利用に関する調査」「全国若者語調査」の結果を集計・分析し，共同研究発表会で報告するとともに，論文，報告書としてまとめた。
3. これまでの研究資産を見直し再構築する活動：「首都圏の言語に関する研究文献目録」の作成を継続し，試作版を内部公開した。主要研究レビュー1件を公表した。『東京語アクセント資料』と同調査票の電子化を完了した。「東京のことば研究者インタビュー」2件を実施し，文字化資料を整備した。この他，プロジェクトの活動から得られた知見を踏まえて，自治体等による講演会での講演3件を行った。研究成果のWeb公開の準備を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

4地点において臨地調査を行った。

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」：共同研究員

首都圏出身者2組のロールプレイ談話の収録を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

竹田晃子，三井はるみ

「「全国方言文法の対比的研究」調査の概要とそのデータ分析—原因・理由表現—」，『国立国語研究所論集』4, pp.77-108. 2012.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「〔展望〕地域言語・方言」, 『日本語の研究』8-3, 2012.

三井はるみ

「〔書評〕田中ゆかり著『首都圏における言語動態の研究』」, 『日本語の研究』9-1, 2013.

【講演・口頭発表】

鎌水兼貴, 三井はるみ

「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」社会言語科学会第31回研究大会（国立国語研究所, 統計数理研究所）2013.3.16-17.

Kanetaka Yarimizu and Harumi Mitsui

“Linguistic survey in the Tokyo Metropolitan area using mobile phone”, New Ways of Analyzing Variation in Asia-Pacific Region 2 (国文学研究資料館) 予稿集 pp.8. 2012.8.2.

【研究調査】

- ・2012.4.5, 24 東京都西多摩郡檜原村 「方言分布」調査
- ・2012.5.6 東京都立川市 談話収録, 音声等調査
- ・2012.7.16 千葉県南房総市 「方言分布」調査
- ・2012.7.25, 11.14 千葉県野田市 「方言分布」調査
- ・2012.12.7 東京都新宿区 談話収録, 音声等調査
- ・2013.1.21 埼玉県秩父市 ロールプレイ談話収録
- ・2013.3.4 千葉県市原市 「方言分布」調査
- ・2013.3.30 東京都練馬区 ロールプレイ談話収録

【その他の学術的・社会的活動】

三井はるみ

「方言教室」, 第13回金田一春彦ことばの学校 (高根ふれあいホール山梨県北杜市) 2012.9.1.

三井はるみ

「東京のことば・多摩のことば」, 東京都言語能力向上推進事業プログラム (武蔵村山市立第三中学校) 2012.6.20.

木部暢子（きべ のぶこ）時空間変異研究系 教授、研究系長、副所長

1955 生

【学位】博士（文学）（九州大学、2000）

【学歴】九州大学文学部文学科卒業（1978）、九州大学大学院文学研究科修士課程修了（1980）

【職歴】純真女子短期大学 助手（1980）、純真女子短期大学 講師（1982）、福岡女学院短期大学 講師（1985）、鹿児島大学法文学部 助教授（1988）、同 教授（1999）、同 副学部長（2004）、同 学部長（2006）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授、研究系長、副所長（2010）

【専門領域】日本語学、方言学、音声学、音韻論

【所属学会】日本語学会、日本言語学会、日本音声学会、西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議連携会員、日本語学会理事、日本音声学会評議員、日本方言研究会世話人、奄美島唄保存伝承事業実行委員会委員長、第63回南日本文化賞選考委員

【受賞歴】

1990 新村出財団 研究助成

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：リーダー

研究目的：

グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年2月のユネスコ発表によると、日本語方言の中では、沖縄県のほぼ全域の方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は、他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。また、これらの方言では、小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く、バリエーションがどのように形成されたか、という点でも注目される。本プロジェクトでは、フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して、これら危機方言の調査を行い、その特徴を明らかにすると同時に、言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行う。

研究成果：

1. 東京都八丈島、鹿児島県与論島、鹿児島県沖永良部島の3カ所において、消滅危機方言の合同調査を行った。報告書は平成25年度に刊行予定。
2. 2012年8月に、昨年度実施した沖縄県宮古島の調査の報告書『南琉球宮古方言調査報告書』を刊行した。また、プロジェクトのHPで報告書（PDF）を公開した。
3. 八丈町、与論町、沖永良部和泊町において、教育委員会と共に一般市民向けの国立国語研究所セミナーを開催した。

人間文化研究機構連携研究

1. 機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」総括班（リーダー）
2. 機構連携研究「方言と災害」班（リーダー）
3. 機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1. 言語分析による自然観・自然思想の研究（リーダー）

【研究業績】

《著書・編書》

松森晶子, 新田哲夫, 木部暢子, 中井幸比古

『日本語アクセント入門』, 223 頁, 東京: 三省堂, 2012.9.

《論文・ブックチャプター》

Nobuko Kibe

“Intonation system of the Kagoshima dialect in Japan”, *FONETIK 2012*, Department of Philosophy, Linguistics and Theory of Science, University of Gothenburg, 2012.

木部暢子

「西南部九州 2 型アクセントの特徴の比較—助詞・助動詞のアクセントを中心として—」, 『音声研究』 16 (1), pp.80-92. 2012.4.

《その他の出版物・記事》

木部暢子

「『日本語学』の 30 年」, 『日本語学』 31 (14), 明治書院, p.92, 2012.11.

木部暢子

「地域の文化が支える地域の暮らし—「大規模災害と人間文化」プロジェクトー」, 『HUMAN』 3, 平凡社, pp.69-73. 2012.11.

木部暢子編

『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』, 国立国語研究所共同研究報告 12-02, 285 頁, 東京: 国立国語研究所, 2012.8.

木部暢子

「喜界島方言の母音の特徴について」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (1), pp.3-14. 2012.6.

【講演・口頭発表】

Nobuko Kibe

“Intonation system of the Kagoshima Dialect in Japan”, *FONETIK 2012*, Department of Philosophy, Linguistics and Theory of Science (University of Gothenburg) 2012.5.30.

木部暢子

「危機方言から見えてくること—奄美語の場合—」, 東京外国語大学国際日本研究センター講演会 [招待講演] 2012.10.25.

Nobuko Kibe

“A study on the phonetic variation in Japanese dialects using the‘Acoustic Linguistic Atlas of West Japan’”, The First International Conference on Asian Geolinguistics (Aoyama Gakuin University) 2012.12.14.

木部暢子

「危機方言から見えてくること—奄美喜界島方言の p, φ, h—」, JLVC2013 (国立国語研究所) 2013.3.20.

【研究調査】

- ・ 2012.8.23 – 8.24 鹿児島市方言調査, 『鹿児島方言辞典』作成のための調査
- ・ 2012.9.5 – 9.10 東京都八丈町, 「危機方言」プロジェクト合同調査
- ・ 2012.10.2 – 10.4 熊本県八代方言調査, 準体句のための調査
- ・ 2012.10.6 – 10.8 鹿児島県甑島方言調査, 上甑瀬上方言アクセントの調査

- ・2012.12.1 – 12.3 鹿児島県与論町、「危機方言」プロジェクト合同調査
- ・2012.12.4 – 12.5 鹿児島県沖永良部町、「危機方言」プロジェクト合同調査
- ・2013.3.26 – 3.28 鹿児島県喜界島方言、「危機方言」基礎語彙音声収録

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・NINJAL セミナー・第6回八丈方言講座「八丈・島ことば調査のつどい」(八丈保健福祉センター) (企画・運営) 2012.9.9.
- ・NINJAL セミナー「与論・島ことば調査のつどい」(与論中央公民館) (企画・運営) 2012.12.2.
- ・NINJAL セミナー「沖永良部・島ことば調査のつどい」(えらぶ長浜館) (企画・運営) 2012.12.5.
- ・連携研究シンポジウム「大規模災害と人間文化研究」(フクラシア東京) (企画・運営) 2013.3.23.
- ・連携研究シンポジウム「大規模災害と人間文化研究」(国立民族学博物館) (企画・運営) 2013.3.24.

【その他の学術的・社会的活動】

木部暢子、竹田晃子

「文化庁委託事業共同研究報告会 文化としての方言・絆としての方言 一東日本大震災、被災地からの発信ー」(仙台国際センター) 主催:弘前学院大学、岩手大学、東北大学、福島大学、茨城大学、国立国語研究所で国語研の取り組みを報告、2013.3.9.

木部暢子、竹田晃子

「文化庁委託事業共同研究報告会 文化としての方言・絆としての方言 一東日本大震災、被災地からの発信ー」(一橋大学一橋講堂会議室) 主催:弘前学院大学、岩手大学、東北大学、福島大学、茨城大学、国立国語研究所で国語研の取り組みを報告、2013.3.19.

木部暢子

「八丈方言の特徴」、八丈方言学習カリキュラム化研究発表会(東京都八丈町三原小学校)
2013.2.27.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・特別共同利用研究員の受入・指導
大槻知世(東京大学大学院人文社会系研究科修士課程) 2012.10.1 ~ 2013.9.30.
坂井美日(大阪大学大学院文学研究科博士課程) 2012.10.1 ~ 2013.9.30.

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 時空間変異研究系 教授, 副所長

1953 生

【学位】修士（言語学）（東京大学, 1980）

【学歴】東京大学文学部第3類（語学文学）言語学専修課程卒業（1977），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了（1980），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第1種博士課程単位取得退学（1984）

【職歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員（1984），同 主任研究官（1990），同 室長（1991），同言語体系研究部 部長（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授，副所長（2009）

【専門領域】社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，社会言語科学会，日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員，日本音声学会 評議員，『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：リーダー

研究目的：

20世紀前半から21世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明する。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究を開拓する。

研究成果：

1. プロジェクトの一環として開催した12回の公開共同研究発表会の成果物として，出版社おうふうから論文集を刊行する企画をスタートさせた。共同研究メンバー12名が，①言語変化の先端現象の把握・分析，②戦後60年余の通時的变化の把握・分析，③多元的分析手法の開発，④新規資料の発掘・分析，⑤言語問題の解決に資する応用研究，といった5つの観点に関連するテーマ設定で論文を執筆し，平成25年度中に論文集『現代日本語の動態研究（仮題）』（相澤正夫編）を刊行する準備を整えた。
2. 「言語変化の先端現象の把握」という観点に関連して，「とびはね音調」についての「全国聞き取りアンケート調査」を企画し，2012年10月に実施した。
3. 昭和戦前期の「SP盤貴重音源資料」の文字化資料を，冊子体と電子媒体（CD-R）で整備し，プロジェクト内で利用できるようにした。

【研究業績】

《著書・編書》

陣内正敬，田中牧郎，相澤正夫（編）

『外来語研究の新展開』，おうふう，2012.10.

《論文・ブックチャプター》

相澤正夫

「「外來語」言い換え提案」とは何であったか」，陣内，田中，相澤（編）『外来語研究の新展開』pp.133-147. おうふう，2012.10.

相澤正夫

「専門家と非専門家の橋渡し—『言葉の補助輪、のすすめー』」, 『日本語学』31 (13), pp.36-45.

2012.11.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』31 (6), pp.88-89. 2012.5.

相澤正夫

「方言意識の現在をとらえる —「2010年全国方言意識調査」と統計分析—」, 『国語研プロジェクトレビュー』3 (1), pp.26-37. 2012.7.

相澤正夫

「言語問題への対応と日本語研究 —「外来語」言い換え提案の場合—」(日本語学会2012年度春季大会シンポジウム報告), 『日本語の研究』8 (4), pp.77-78. 2012.10.

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』31 (13), pp.92-93. 2012.11.

田中牧郎, 相澤正夫

「〈著書紹介〉『外来語研究の新展開』」, 『国語研プロジェクトレビュー』3 (3), pp.197-199.

2013.3.

【講演・口頭発表】

相澤正夫

「言語問題への対応と日本語研究 —「外来語」言い換え提案の場合—」, 『日本語学会2012年度春季大会予稿集』, pp.9-14. (千葉大学) [招待講演] 2012.5.

【研究調査】

- ・2012.10 「音声聴取による「とびはね音調」の全国アンケート調査」の企画・実施（共同企画, 実査は社団法人新情報センターに委託）

大西 拓一郎（おおにしたくいちらう）時空間変異研究系 教授

1963生

【学位】修士（文学）（東北大学、1987）

【学歴】東北大学文学部卒業（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学（1989）

【職歴】東北大学文学部 助手（1989），国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員（1990），同主任研究官（1996），同 室長（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，日本方言研究会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人，日本語学会 評議員

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：リーダー

研究目的：

方言分布の経年比較を通して、日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的とする研究である。日本の方言研究においては、過去30～50年にさかのぼることが可能な方言分布に関するデータが詳細な言語地図の形で蓄積してきた。現在における日本全国の方言分布を把握するなら、このような過去に明らかにされてきた方言分布と比較することで、リアルタイムな時間軸上で方言分布の変動が把握できる。本プロジェクトでは、このことを実現させるために、全国の方言研究者が分担・協力しながら臨地調査によりデータを収集し、かつそのデータを共有する形で、全国方言の分布調査を進めているところである。

研究成果：

リーダーとして、プロジェクト全体を統括し、また、共同研究員・調査協力者から送られてくるデータを精査して、データベース化を進めた。同時に、方言分布がどのようにしてできるのかに関する基本モデルを考察・構築し、国内外の学会・研究集会で発表を行った。全国調査は現在、進行中であるが、途中段階で得られたデータであっても、それをもとに現在の方言分布を言語地図の形で発表するとともに、過去の分布との比較を通じた基本モデルの妥当性の具体的検証を進め、必要に応じたフィードバックを行うことで、モデルの強化につとめた。

独創・発展型共同研究プロジェクト「大規模方言データの多角的分析」：共同研究員

研究目的：

大規模な方言データを多角的に分析することを目的とする。

研究成果：

これまでに大量に作成してきた方言の談話資料をもとに、述語の名詞化（「おれが言うダ」のような「のだ文」や、「そんなことを言うは、誰だ」のような準体用法の構成など）の用法と分布に関する分析を行い、国際学会を含む研究集会で発表を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Akiko Matsumori, Takuichiro Onishi

“Japanese Dialects: Focusing on Tsuruoka and Ei” In David N. Tranter (ed.) *The Language of*

Japan and Korea, Routledge, pp.313-348. 2012.

《その他の出版物・記事》

大西拓一郎

「書評：澤村美幸著『日本語方言形成論の視点』」, 『日本語の研究』8 (3), pp.124-129. 2012.7.

大西拓一郎

「方言分布の変化をとらえる」, 『国語研プロジェクトレビュー』3 (1), pp.15-25. 2012.7.

大西拓一郎

「方言と星」, 『人と自然』3, p.6. 2012.11.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「方言形成の要因・過程と分布の変化」, 日本語学会 2012 年度秋季大会（富山大学）[招待講演]

2012.11.3.

大西拓一郎

「方言形成の基本モデル」, 第 2 回国際中国言語地理学会（第二届中国地理语言学国际学术研讨会）

[招待講演] 2012.10.19.

大西拓一郎

「方言地理学における地理情報システムの利用」, 日本行動計量学会第 40 回大会（新潟県立大学）

2012.9.16

Onishi Takuichiro

“Relationship between area and human lives in the dialect formation”, VIIth Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), Austrian Academy of Science, (Vienna, Austria) [招待講演] 2012.7.24.

Onishi Takuichiro

“Gerund in Japanese dialects: Forms and geographical distributions”, The 1st International Conference on Asian Geolinguistics (青山学院大学) 2012.12.15.

【研究調査】

言語地理学調査

- 2012.4 紀伊半島南部（奈良県十津川村, 和歌山県新宮市, 三重県尾鷲市）
- 2012.5 富山県南砺市
- 2012.9 長野県辰野町
- 2012.10 長野県塩尻市
- 2012.11 長野県中川村

【大学院教育・若手研究者育成】

· NINJAL チュートリアル講師

第 12 回「方言地図の基礎と GIS の技法」(国立国語研究所) 2013.3.21.

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 時空間変異研究系 准教授

1973生

【学位】博士（文学）（大阪大学、2004）

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業（1997），エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了（1998），大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員（2004），同研究開発部門言語生活グループ研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】社会言語学，言語学，日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, Methods, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会，日本言語政策学会，日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会

【受賞歴】

2010 第9回徳川宗賢優秀賞（社会言語科学会）

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」：リーダー
研究目的：

本プロジェクトは、様々な特性を持つ地域社会で生じている言語変容の類型化を、文献調査、実時間調査の手法を用いて行うことを目的とする。2011年に刊行されたPeter Trudgillの*Sociolinguistic typology* (Edinburgh University Press) をその類型化の手がかりとし、日本国内外で形成された地域社会（地方都市、ニュータウン、移民社会）をフィールドとした調査研究を実施する。類型化を行う上でPeter Trudgillをはじめとする関連領域の研究者にもプロジェクトに参画してもらい、検討を行う。本研究領域は、国内外の研究動向を踏まえてもまさに前衛的な研究であり、社会言語学、接触言語学、言語類型論などの領域への貢献が期待でき、方言研究の新たなアプローチの確立を目指すものである。

研究成果：

国内外にある様々な特性をもった地域社会を対象に、既存調査の調査票を用いた経年調査（札幌市、釧路市、岡崎市）、新規調査（北海道全域～日本海域、鹿児島市・福岡市・札幌市・東京都）、既存の音声資料を活用した研究（ハワイ）、先行研究を活用した研究（奈良田、秋山郷、西神ニュータウン）を実施し、それぞれの地域社会で形成・変容する地域方言の類型化を試み、調査結果は著編著、論文、国内外の学会・国際会議で成果報告を行った。2012年度においては、共同研究員であるPaul Kerswill氏を日本に招き、JLVC Talkでの講演をはじめとして、関連テーマについて議論した。研究成果の国際的な発信の場として、NWAVAL (New Ways of Analyzing Linguistic Variation in Asia Pacific) を国立国語研究所で主催した。そこで研究プロジェクトの成果を発信した。

【研究業績】

《著書・編書》

朝日祥之

『サハリンに残された日本語樺太方言』、明治書院、2012.10.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「IT 質問調査概説」, 『講座 IT と日本語研究』8, 質問調査法と統計処理 (荻野綱男・田野村忠温編) pp.7-36. 2012.6.

朝日祥之

「「樺太ことば集」にみる樺太方言と北海道方言の関係」, 『北海道方言研究会会報』89, pp.5-14. 2012.12.

朝日祥之

「19世紀おわりの北海道方言に見られる言語的特徴 —「古者の声」を用いて—」, 『北海道方言研究会会報』89, pp.92-100. 2012.12.

尾崎喜光, 朝日祥之

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 一札幌市・釧路市における多人数調査の結果から一」, 北海道方言研究会会報 89, pp.92-100. 2012.12.

白岩広行, 平本美恵, 朝日祥之

「ハワイ日系社会における方言接触と人称詞使用の様相 一残されたオーラルヒストリーデータをもとに一」, 阪大日本語研究 25, pp.31-52. 2013.2.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』32 (1), pp.74-75. 2013.1.

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』31 (8), pp.94-95. 2012.7.

朝日祥之

「〈著書紹介〉 サハリンに残された日本語樺太方言」, 国語研プロジェクトレビュー 3 (3), pp.195-196. 2013.3.

【講演・口頭発表】

朝日祥之

「19世紀のおわりの北海道方言に見られる言語的特徴 —「古者の声」を使って—」, 第198回北海道方言研究会例会 (札幌北区民センター) 2012.6.

Yoshiyuki Asahi

“20 years' real-time change in Hokkaido Japanese: A comparison between two regional koines”, SIDG 7 (Austrian Academy of Science) 2012.7.

朝日祥之

「オーラルヒストリーデータの学際的利用と拠点形成について」,
XXII ENCONTRO NACIONAL DE PROFESSORES UNIVERSITÁRIOS DE LÍNGUA,
LITERATURA E CULTURA JAPONESA (Universidade Federal do Paraná) 2012.8.

Yoshiyuki Asahi

“A comparison of real-time language changes in two Japanese koines”, Sociolinguistics Symposium 19 (Berlin Free University) 2012.8.

Mie Hiramoto and Yoshiyuki Asahi

“Use of foreign-origin personal pronouns: Observations in overseas varieties of Japanese”, Sociolinguistics Symposium 19 (Berlin Free University) 2012.8.

Mie Hirayamot and Yoshiyuki Asahi

“Use of foreign-origin personal pronouns: Observations in overseas varieties of Japanese”, NNAV-AP2 (NINJAL) 2012.8.

Ichiro Ota, Shoji Takano, Hitoshi Nikaido, Akira Utsugi, Yoshiyuki Asahi

“Sociolinguistic Variation in the Pitch Movement of Japanese Dialects”, NNAV-AP2 (NINJAL) 2012.8.

朝日祥之

“Real-time change in intra-speaker variation: evidence from Hokkaido Japanese”, NNAV-AP2 (NINJAL) 2012.8.

朝日祥之

“Japanese Sociolinguistics: its past, present, and the future”, NNAV-AP2 (NINJAL) 2012.8.

Yoshiyuki Asahi

“Effect of the community design in the development of new language varieties: two cases from Japanese and British New Town”, Regional Varieties, Language Shift and Linguistic Identities (Aston University) 2012.9.

朝日祥之

「移動するサハリンの朝鮮人と日本語」, 延辺大学国際共同研究発表会, 2012.9.

Yoshiyuki Asahi, Toyotomi Morimoto, and Shigeru Kojima

“Interdisciplinary approaches to re-utilize the buried oral history data in Japanese”, 111th American Anthropology Association (Hilton San Francisco) 2012.11.18.

尾崎喜光, 朝日祥之

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 一札幌市・釧路市における多人数調査の結果から一」, 第 200 回北海道方言研究会記念大会 (北海道大学) 2012.11.18.

Yoshiyuki Asahi

“Migration and Japanese language in Hokkaido, Sakhalin, and the Kuril Islands: Their socio-cultural histories and linguistic outcomes”, Japanese Anthropology Workshop 2013 (University of Pittsburgh) 2013.3.9.

朝日祥之

「言語変容の類型化に向けて 一国内外における調査から一」, JLVC2013 (国立国語研究所) 2013.3.20.

南部智史, 朝日祥之

「認知方言学的研究手法の展開 (翻訳)」, JLVC 2013 予稿集, pp.23-33. (国立国語研究所) 2013.3.20.

【研究調査】

- ・ 2012.5.10, 11, 2013.3 ロサンゼルス (UCLA, 全米日系人博物館)
- ・ 2012.8 サンパウロ (サンパウロ人文科学研究所)
- ・ 2012.11 バンクーバー (Nikkei Place)
- ・ 2012.4 北海道北見市
- ・ 2012.12 北海道広尾郡広尾町
- ・ 2012.6 北海道稚内市
- ・ 2013.3 北海道札幌市

・2013.3 ユジノサハリンスク市

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NWAVALP2 (New Ways of Analyzing Linguistic Variation in Asia-Pacific) (企画・運営, 大会実行委員長)

【その他の学術的・社会的活動】

・公開国際シンポジウムの開催

パラオ, 2012.6.

中国延吉市, 2012.9.

井上 文子（いのうえ ふみこ）時空間変異研究系 准教授

【学位】修士（文学）（大阪大学、1992）

【学歴】高知女子大学文学部国文学科卒業（1984），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了（1992），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退（1994）

【職歴】大阪大学文学部 助手（1994），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1995），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門資料整備グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，方言学，社会言語学

【所属学会】日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語文法学会，日本言語学会，日本語教育学会

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」：リーダー

研究目的：

異なる出身地の人と話をしていると、語彙やアクセントではなく、話の進め方そのものに違和感を覚えることがある。もちろん個人差はあるにしても、それぞれの地域に特有の話の進め方がありそうだということを漠然と感じている人は少なくないであろう。しかし、会話のどのような部分に地域差が見られるのか、方言によって談話展開の方法に一定の類型があるのか、などについては、いくつかの先行研究があるものの、まだわかっていないことが多い。このようなことを客観的に明らかにするためには、語や句や文を超えた単位である談話全体をひとまとめりとしてとらえ、コミュニケーションとしての談話を分析することが求められる。本プロジェクトでは、方言談話の地域差・世代差・性差・場面差などを考察するためのパイロット調査として、発話の意図が明確で、話の流れがとらえやすいロールプレイ会話を収集し、談話構造や談話展開の地域差について枠組みや仮説を立てることを目的としている。

研究成果：

収集した資料については、「方言ロールプレイ会話データベース」として公開するために、方言音声のテキスト化、共通語訳、注記付与など、共有可能な言語データとしての整備をおこなった。また、「依頼」「勧誘」「申し出」などの場面を設定したロールプレイ会話を対象として、「きりだし」「状況説明」「行動の促し」といったコミュニケーション機能や機能的要素などの観点から整理を進めた。

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

井上文子

「談話資料における間投助詞の地域差について」、熊谷康雄（編）『国立国語研究所共同研究報告
12-05 大規模方言データの多角的分析成果報告書 一言語地図と方言談話資料一』 pp.1-12. 2013.

熊谷 康雄（くまがい やすお）時空間変異研究系 准教授

1955 生

【学位】修士（文学）（埼玉大学、1984）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業（1976），埼玉大学大学院文化科学研究所修了課程言語文化論専攻修了（1984）

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1988），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1989），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1993），国立国語研究所 室長（1998），国立国語研究所情報資料部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，計量国語学会，社会言語科学会，日本行動計量学会，言語処理学会，情報処理学会，電子通信学会，American Dialect Society，International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2012年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究「大規模方言データの多角的分析」：リーダー

研究目的：

本研究は電子化・データベース化を進めてきた『日本言語地図』（LAJ），「各地方言収集緊急調査」や公開されている『方言文法全国地図』のデータなどの利用も視野に入れ，専門を異にする研究者が全国レベルの大規模な方言資料・データを共同利用し，多角的な研究を通してデータの持つ可能性を引き出し，ことばの地域差の実態やその形成の解明に寄与する新たな知見の獲得，研究方法の開発，資料・データの整備と共有を進めることを目的とする。

研究成果：

『日本言語地図』データベース（LAJDB）の構築を進め，今年度新たに18項目を整備し，共同研究員間で共有化した。これにより研究期間中に合計119項目（地図化されている項目，240項目のほぼ半数）まで整備した。データの一部（55項目）を用いた分析を行った。これまでLAJの全国的な視野での計量的分析は多くは個々に手作業で作成した県単位の集計データによるものであったが，LAJDBのデータではLAJ全地点について地点単位の集計が可能になる。探索的な分析により（1）語の併用現象の起こり方に有意味な地理的な分布が観察されること，（2）標準語形数の全国分布を地点単位で観察することにより，詳細なパターンを見ることができ，交通網等，言語外事象との関係も明瞭な観察ができること，（3）全体像が見えていなかったLAJの併用処理（標準語形と一致し，共通語的，上品，新しい，稀などの注記のある回答を掲載しない）の地理的分布に有意味な分布があり，標準語形の分布，併用処理数の地点別集計と併用現象などとの連続的な関係などが観察できることなど，方言分布の形成，方言の伝播に関わる有効な分析の見通しを得た。なお，2012年度は最終年度であり，12月に「大規模方言データの多角的分析」ワークショップ：言語地図と方言談話資料を開催，2013年3月に共同研究報告『大規模方言データの多角的分析：言語地図と方言談話資料』を取りまとめ，印刷刊行した。

【研究業績】

《国際会議録》

熊谷康雄

“Development of a Way to Visualize and Observe Linguistic Similarities on a Linguistic

Atlas” *Working Papers from NNAV Asia-Pacific 2* (the 2nd annual meeting of New Ways of Analyzing Variation and Change in the Asia-Pacific Region), pp.1-8. 2013.3. 電子版.

《その他の出版物・記事》

熊谷康雄

「『日本言語地図』のデータベース化と計量的分析 併用現象、標準語形の分布と交通網、方言類似度の観察一」, 熊谷康雄（編）『国立国語研究所共同研究報告 12-05 大規模方言データの多角的分析 成果報告書 一言語地図と方言談話資料一』 pp.111-128. 2013.3.

熊谷康雄（共筆）

「共通語形の分布と伝播について」, 熊谷康雄（編）『国立国語研究所共同研究報 12-05 大規模方言データの多角的分析 成果報告書 一言語地図と方言談話資料一』 pp.129-142. 2013.3.

熊谷康雄

「『日本言語地図』データベースの概要」, 熊谷康雄（編）『国立国語研究所共同研究報告 12-05 大規模方言データの多角的分析 成果報告書 一言語地図と方言談話資料一』 pp.159-164. 2013.3.

【講演・口頭発表】

熊谷康雄

“Development of a way to visualize and observe linguistic similarities on a linguistic atlas”, NNAV Asia-Pacific 2 (the 2nd annual meeting of New Ways of Analyzing Variation and Change in the Asia-Pacific Region), (国立国語研究所) 2012.8.

熊谷康雄

「言語地図の計量的分析：『日本言語地図』データベースによる併用現象の地理的分布の探索」, 日本行動計量学会第 40 回大会（特別セッション 方言分布と計量）, (新潟県立大学) 2012.9.

熊谷康雄

「方法から方言形成論を再考する（シンポジウム 方言形成論の展開）」, 日本語学会 2012 年度秋季大会（富山大学）[パネリスト, 招待] 2012.11.3.

新野 直哉 (にいの なおや) 時空間変異研究系 准教授

1961 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2010）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1984），東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1986），東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1988）

【職歴】宮崎大学教育学部 助手（1988），同 講師（1989），同 助教授（1992），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1996），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門文献情報グループ 主任研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本近代語研究会，表現学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 編集委員，日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第2回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」：リーダー
研究目的：

本研究は、近現代日本語の新語・新用法について、いつごろ、なぜ、どのように発生・拡大し、現在はどのような状況にあるのかを、文献調査に加え、アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また、言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し、言語の変異そのものの記述的研究に加え、これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

研究成果：

前年度2回にとどまった研究発表会を3回開催することができ、首都圏以外からや日経・NHKといったマスコミからの参加もあった。特に第3回は告知を約二か月前から積極的に行ったことも功を奏し21名（メンバー以外）という多数の参加者を得た。また、やはり前年度は果たせなかつた共同研究員の追加（鳴海伸一・京都府立大講師）、研究成果の査読付学会誌への掲載も果たすことができた。さらに、リーダーの新野が日本近代語研究会春季大会（5月・千葉大）で、共同研究員の梅林が表現学会全国大会（6月・共立女子大）で、共同研究の成果を発表した。また梅林はこの発表を論文化し、『表現研究』96集（10月刊）に掲載した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「言語規範意識記述を日本語史研究資料としてどう考えるか—3人の研究者の“全然”をめぐる記述を例に—」，『国語学研究』52, pp.1-14. 2013.3.

新野直哉

「新聞記事を資料とした言語意識調査—新語“なにげに”を例に—」，『言語文化研究』12, pp.21-36. 2013.3.

《他の出版物・記事》

新野直哉

「学界時評 国語」, 『アナホリッシュ国文学』2, pp.186-187. 2013.3.

【講演・口頭発表】

新野直哉

「昭和10年代の，“全然”に関する国語学者・浅野信の言語規範意識」日本近代語研究会第293回研究発表会（千葉大学）2012.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・JLVC2013 (Japanese Language Variation and Change Conference 2013) (企画・運営) 2013.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

目白大学大学院言語文化研究科

竹田 晃子 (たけだ こうこ) 時空間変異研究系 特任助教

1968 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2012）

【学歴】群馬県立女子大学文学部国文学科卒業（1992），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程前期2年の課程修了（1996），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程後期3年の課程単位取得退学（2001）

【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2001-2004），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ非常勤研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系非常勤研究員（2009），同 特任助教（2012）

【専門領域】日本語学，方言学，社会方言学

【所属学会】日本語学会，日本文芸研究会，日本語文法学会，社会言語科学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 庶務委員（編集委員長補佐），社会言語科学会事務局 委員

【受賞歴】

2012 国立国語研究所第4回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

人間文化研究機構連携研究「方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究」：共同研究員

文化庁委託事業・国立国語研究所合同研究報告会（2013年3月9日，19日）発表

人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」：共同研究員

シンポジウム（2013年3月21日，24日）発表

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

言語地図データベースの作成と公開，方言調査の実施

人間文化研究機構連携研究「言語分析による自然観・自然思想の研究「昔がたりに内在する自然観・自然思想の解明」」：共同研究員

岩手県における昔話の収集と分析

人間文化研究機構連携研究

「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散」：共同研究員

日本列島およびアジア・太平洋地域における農耕と言語の伝播の相関関係を検討する。「「農耕言語同時伝搬仮説」をめぐる準備研究」（2012.8.1）において「『日本言語地図』における農業語彙」発表

【研究業績】

《博士学位論文》

竹田晃子

「東北方言における述部形式の研究」，東北大学大学院文学研究科，2012.

《論文・ブックチャプター》

竹田晃子，三井はるみ

「『全国方言文法の対比的研究』調査の概要とそのデータ分析—原因・理由表現—」，『国立国語研究所論集』4, pp.77-108. 2012.11.

【講演・口頭発表】

竹田晃子

「円滑な医療コミュニケーションのための方言集—『東北方言オノマトペ用例集』の取り組み—」、

第94回日本方言研究会 研究発表会（ポスター発表）（千葉大学）2012.5.18.

小林 隆, 田中宣廣, 櫛引祐希子, 竹田晃子

「つなぐ言葉としての方言—被災者・支援者・そして研究者—」、社会言語科学会第30回大会（東北大学）（ワークショップ発表）2012.9.1.

竹田晃子

「災害時のコミュニケーション—東北方言オノマトペ用例集—」、第23回群馬県「群馬学」連続シンポジウム：天明三年浅間焼け—復興と語り継ぎが育む減災文化—（シンポジウム・パネリスト発表）（群馬県立女子大学）2012.12.16.

【研究調査】

- ・2012.9 釜石市・大槌町, 方言意識・方言談話調査
- ・2012.10 盛岡市, 方言文法調査
- ・2012.10 釜石市, 方言文法調査
- ・2012.11 釜石市, 方言意識・方言談話調査
- ・2012.11 大船渡市, 方言意識・方言談話調査
- ・2012.12 盛岡市, 方言資料調査
- ・2012.1 盛岡市, 方言語彙調査・方言文法調査
- ・2013.3 米沢市, 方言語彙調査・方言文法調査
- ・2012.3 盛岡市, 方言語彙調査・方言文法調査
- ・2013.3 盛岡市, 方言文法調査

前川 喜久雄 (まえかわ きくお) 言語資源研究系 教授, 研究系長, コーパス開発センター長

1956 年生

【学位】博士（学術）（東京工業大学, 2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【職歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長（2009），一橋大学連携教授（2005～）

【専門領域】音声学，言語資源学

【所属学会】ISCA, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 企画委員長, Phonetica Editorial board

【受賞歴】

2012 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形状と言語的機能」, 『音声研究』15巻1号

2012 国立国語研究所第4回所長賞

2011 日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』14巻2号

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目標は、コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行うことにある。

研究成果：

本年度も共同研究員ごとに、文節係り受け構造、節境界、時間表現、助動詞レル・ラレルの意味分類、動詞項構造など各種アノテーション作業を継続実施した。一部の共同研究員には委託研究を実施した。さらに各種アノテーションの自動重ねあわせを実現するために必要な情報収集を行った。今年度の成果としては、言語処理学会第19回年次大会においてテーマセッション「コーパスアノテーションの可能性と共有化」（2013年3月12日）を実施し、合計15件の発表があった。今後はこのセッションの内容を発展させた学会誌特集号を刊行したいと考えている。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目標は、日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることにある。そのために一般からも応募可能な「コーパス日本語学ワークショップ」を年に2回開催している。

研究成果：

本年度開催の第2回では40件、第3回では54件の研究発表があり、約半数が一般からの応募であった。これとは別に、語彙・文法・表記の研究を中心とする専門家グループ、音声・対話に関する研究グループによる共同研究も実施しており、一部の共同研究員には委託研究を依頼した。本年度の成果物としては、英國 Routledge 社より *Frequency Dictionary of Japanese* (Y.Tono, M.Yamazaki, K.Maekawa, 2013年2月) が刊行された。これは『日本語話し言葉コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

のデータをブレンドして作成した現代日本語の頻度辞書である。さらに朝倉書店より刊行予定の『講座日本語コーパス』第1巻の刊行準備を進め、ほぼ完了させた。学会賞の受賞が4件あった。

【研究業績】

《著書・編書》

Yukio Tono, Makoto Yamazaki, and Kikuo Maekawa

A Frequency Dictionary of Japanese; Core Vocabulary for Learners, Routledge, 2013.2.

《論文・ブックチャプター》

Masako Fujimoto and Kikuo Maekawa

“Paralinguistic information affects phonation types: A case study using high-speed video images”, *Acoustical Science and Technology* 34(2), pp.89-93. 2013.2.

Nozomi Naoi, Shigeru Watanabe, Kikuo Maekawa, Junko Hibiya

“Prosody discrimination by Songbirds (*Padda oryzivora*)”, *PLoS ONE* 7(10) e47446 2012.10.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa

“Prediction of non-linguistic information of spontaneous speech from the prosodic annotation: Evaluation of the X-JToBI system”, LREC 2012 (Istanbul) 2012.5.

《その他の出版物・記事》

前川喜久雄

「日本語の海へ16」, 朝日新聞 2012年6月14日夕刊

前川喜久雄

「「コーパスアノテーションの基礎研究」および「コーパス日本語学の創成」」, 『国語研プロジェクトレビュー』3(2), pp.63-83. 2012.10.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「自発音声中のフィラーの特性に関する予備的分析:位置と高さの分析」, 『第26回日本音声学会全国大会予稿集』 pp.115-120. (大東文化大学) 2012.9.29.

小西光, 淺原正幸, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現アノテーション」, 『言語処理学会第19回年次大会発表論文集』 pp.62-65. (名古屋大学) 2013.3.

小西光, 小山田由紀, 淺原正幸, 柏野和佳子, 前川喜久雄

「BCCWJ 係り受け関係アノテーション付与のための文境界再認定」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.135-142. (名古屋大学) 2013.3.

浅原正幸, 前川喜久雄

「Webを母集団とした超大規模コーパスの設計」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.207-216. (国立国語研究所) 2013.3.

小磯花絵, 前川喜久雄, 五十嵐陽介

「『日本語話し言葉コーパス』における韻律単位の認定基準について」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.351-358. (国立国語研究所) 2013.3.

保田祥, 小西光, 淺原正幸, 今田水穂, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.373-382. (国立国語研究所)

2013.3.

前川喜久雄

『国立国語研究所における言語資源開発の近況』, 台湾東吳大學外國語文學院 2013 年「語料庫外語教學研究」國際檢討会, 2013.3.17.

Kikuo Maekawa

“Advances in the phonetics of spontaneous speech: Corpus-based analysis of Japanese”, The linguistic institute of Academia Sinica (Taiwan) 2013.3.19.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・言語処理学会第 19 回年次大会, テーマセッション「コーパスアノテーションの可能性と共有化」(淺原正幸と共同提案) (名古屋大学) 2013.3.12.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・大学院非常勤講師
神戸大学, 広島大学 (集中講義)

小木曾 智信（おぎそ としのぶ）言語資源研究系 准教授

1971生

【学位】修士（文学）（東京大学、1997）

【学歴】東京大学文学部第3類（語学文学）卒業（1995）、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了（1997）、同博士課程単位取得退学（2001）

【職歴】明海大学外国語学部 講師（2001）、独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員（2006）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学、自然言語処理

【所属学会】日本語学会、言語処理学会、情報処理学会、社会言語科学会、計量国語学会、日本語文法学会、東京大学国語国文学会、近代語学会

【受賞歴】

2011 情報処理学会山下記念研究賞

2011 国立国語研究所第2回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「統計と機械学習による日本語史研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目的は、機械学習の手法をもついて日本語通時コーパスの整備に必要となる各種の技術を開発すること、そして整備したコーパスを用いて統計的手法に基づく新しい方法による日本語史研究に取り組むことである。

研究成果：

技術開発の面では、共同で濁点自動付与システムを完成させ論文化したほか、形態素解析辞書「中古和文 UniDic」「近代文語 UniDic」をバージョンアップし前者について国際学会で発表した。また、太陽コーパスの形態素解析のために、新たに近代の旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書を開発した。日本語史研究の面では、日本語歴史コーパスを対象に対数尤度比（Log-Likelihood Ratio）を用いて会話文・地の文・和歌の特徴語抽出を行い中古語の語彙の文体差に関する研究を行ったほか、中古和文における個人文体とジャンル文体について多重因子分析等の多変量解析の手法を用いて共同研究を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」：共同研究員

コーパス検索ツール「中納言」に「日本語歴史コーパス 平安時代編」の短単位データを格納し、先行公開版として一般公開を行った。また、上記「統計日本語史」プロジェクトの成果を活かして、近世口語文の形態素解析、中古和文の長単位解析等に取り組んだほか、洒落本・狂言などの資料の構造化に関する研究を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「近代語コーパス設計のための文献言語研究」：共同研究員

明六雑誌コーパスの構築・一般公開に協力したほか、研究利用のために太陽コーパスの形態素解析を行った。

人間文化研究機構連携研究「海外に移出した仮名写本の緊急調査」：共同研究員

共同研究員として「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」の整備に携わった。

人間文化研究機構資源共有化推進事業「雑誌『国語学』全文データベース整備」：共同研究員

共同研究員として国語学全文データベースのPDF画像及び検索サイトの整備を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

岡 照晃, 小町 守, 小木曾智信, 松本裕治

「統計的機械学習を用いた歴史的資料への濁点付与の自動化」, 『情報処理学会論文誌』 54 (4), pp.1641-1654. 2013.4.

小木曾智信

「近代語テキストの形態素解析」, 『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』 pp.83-92. (国立国語研究所) 2012.12.

小木曾智信

「研究資料（現代）（特集 2010 年・2011 年における日本語学界の展望）」, 『日本語の研究』 8 (3), pp.14-17. 2012.7.

《国際会議録》

Toshinobu Ogiso, Mamoru Komachi, Yasuharu Den and Yuji Matsumoto

“UniDic for Early Middle Japanese: A dictionary for morphological analysis of classical Japanese”, Proceedings of the 8th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2012) pp.911-915. (Istanbul, Turkey) 2012.5.

《データベース類》

・明六雑誌コーパス

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroku/

・日本語歴史コーパス 平安時代編（先行公開版）

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

・近代文語 UniDic Ver.1.3

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic%2F%B6%E1%C2%E5%CA%B8%B8%ECUniDic>

・中古和文 UniDic Ver.1.3

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic%2F%C3%E6%B8%C5%CF%C2%CA%B8UniDic>

・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>

・雑誌「国語学」全文データベース

<http://www.ninjal.ac.jp/database/SJL/>

【講演・口頭発表】

小木曾智信, 中村壮範

「通時コーパス用 Web アプリケーション「中納言」のデモンストレーション」, NINJAL「通時コーパス」プロジェクト・Oxford VSARPJ プロジェクト合同シンポジウム（国立国語研究所） 2012.7.31.

小木曾智信

「中古和文における語彙の文体差」, NINJAL「通時コーパス」プロジェクト・Oxford VSARPJ プロジェクト合同シンポジウム（国立国語研究所） 2012.7.31.

小木曾智信

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』とその利用ツール」, 第 5 回「日本語教育とコンピュータ」国際会議 (CASTEL/J) (名古屋外国語大学) 2012.8.21.

小木曾智信, 中村壮範

「通時コーパス用『中納言』：Webベースの古典語コンコーダンサー」，第2回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.9.6.

近藤明日子，小木曾智信，須永哲矢，田中牧郎

「『明六雑誌コーパス』の開発—近代語コーパスのモデルとして—」，第2回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.9.7.

市村太郎，河瀬彰宏，小木曾智信

「近世口語テキストの構造化とその課題」，『第96回人文科学とコンピュータ研究会報告』2012-CH-96(1)pp.1-8.（国文学研究資料館）2012.10.12.

田中牧郎，高田智和，小木曾智信，近藤明日子，岡島昭浩，小野正弘

「近代語コーパスの構築と活用に向けて」，（ワークショップ）日本語学会2012年度秋季大会（大阪大学）2012.11.3.

岡 照晃，小町 守，小木曾智信，松本裕治

「未整備の歴史的文献への濁点の自動付与アプリケーション」，『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「つながるデジタルアーカイブ一分野・組織・地域を超えて』』 pp.191-198.（北海道大学）2012.11.17.

小木曾智信

「旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書」，『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「つながるデジタルアーカイブ一分野・組織・地域を超えて』』 pp.25-32.（北海道大学）2012.11.17.

スルダノヴィッチ・イレーナ，スホメル・ヴィット，小木曾智信，キルガリフ・アダム，

「百億語のコーパスを用いた日本語の語彙・文法情報のプロファイリング」，第3回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.2.28.

小木曾智信，須永哲矢，富士池優美，中村壮範，田中牧郎，近藤泰弘

「『日本語歴史コーパス 平安時代編』先行公開版について」，第3回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.3.1.

市村太郎，河瀬彰宏，小木曾智信

「洒落本コーパスの構造化—仕様と事例の検討—」，第3回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.3.1.

近藤明日子，小木曾智信，須永哲矢，田中牧郎

「形態論情報付き近代語コーパスのアノテーション—『明六雑誌コーパス』を例として—」，言語処理学会第19回年次大会（名古屋大学）2013.3.13.

小木曾智信，伝 康晴

「UniDic2: 拡張性と応用可能性にとんだ電子化辞書」，言語処理学会第19回年次大会（名古屋大学）2013.3.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・イベントレポート「第3回コーパス日本語学ワークショップ」，『人文情報学月報』20, 2013.3.31.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・国立国語研究所コーパス開発センター「中納言」講習会 講師
- ・大学院非常勤講師
一橋大学大学院言語社会研究科，東京外国語大学大学院総合国際学研究科

柏野 和佳子（かしの わかこ）言語資源研究系 准教授

【学位】文学学士

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業（1991）

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア（1991-1998），情報処理振興事業協会（IPA）技術センター研究員（1991-1997），国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会，言語処理学会，情報処理学会，人工知能学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】言語処理学会 理事，情報処理学会情報規格調査会学会試行標準WG3小委員会 主査，情報規格調査会学会試行標準専門委員会 委員

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「テキストの多様性を捉える分類指標の策定」：リーダー

研究目的：

コーパスの有効活用を図るため，コーパスの書籍サンプルを文体によって特徴づけることを目的とする。

研究成果：

書籍サンプルの分類指標の設計と付与を行った。対象はBCCWJ図書館サブコーパス収録の全10,551サンプルである。テキスト構造が単純（例：章節構造）なもの（全体の84%）については、内容・表現の文体的特徴により、専門度、客観度、硬度、くだけ度、および語りかけ性度、という5観点による分類指標を定め、主観的評定によって評価値を付与した。また、テキスト構造・紙面形式などの点で上記分類になじまないもの（全体の16%）を見出し、その特徴を表す別の指標を設定した。これらを通じて、図書館サブコーパスに収録される全サンプルの多種多様な形式の類型ごとの分布や、各類型のNDCごとの頻度を明らかにした。また、人手付与の一方で、機械判定を行い、両者の比較分析を行った。さらに、特に難易度については計算機による自動判定を行い、BCCWJ収録の全サンプルに難易度を付与した。そのほか、「基幹型：コーパスアノテーションの基礎研究」、「基幹型：コーパス日本語学の創成」、「独創・発展型：日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」に共同研究員として参加した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子，奥村 学

「和語や漢語のカタカナ表記：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍における使用実態」，『計量国語学』28（4），pp.153-161. 2012.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子，立花幸子，保田 祥

「書籍テキストをその形式、内容、表現に関わる特徴によって分類する」，『ことば工学研究会』41, pp.21-29. (神奈川大学) 2012.9.

柏野和佳子，立花幸子，保田 祥，飯田 龍，丸山岳彦，奥村 学，佐藤理史，徳永健伸，大塚裕子，佐渡島紗織，椿本弥生，沼田 寛

「書籍テキストへの文体情報付与の試み」，『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』

pp.155-164. (国立国語研究所) 2012.9.

柏野和佳子, 立花幸子, 保田 祥, 丸山岳彦, 奥村 学, 佐藤理史, 徳永健伸, 大塚裕子, 佐渡島紗織
「テキストの硬さと軟らかさの考察 —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に
—」, 『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.131-138. (国立国語研究所) 2012.3.

柏野和佳子, 奥村 学

「書籍テキストへの分類指標人手付与の試み —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍
を対象に—」, 『言語処理学会第18回年次大会論文集』 pp.1260-1263. (広島市立大学) 2012.3.

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子

「総体として印象を与える表現 : 「語りかけ性」を有すると判断する根拠」, 『ことば工学研究会』
41, pp.3-10. (神奈川大学) 2012.9.

小山田由紀, 柏野和佳子, 前川喜久雄

「助動詞レル, ラレルへの意味アノテーション作業経過報告」, 『第2回コーパス日本語学ワーク
ショップ予稿集』 pp.59-68. (国立国語研究所) 2012.9.

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「「語りかけ性」を有すると判断される書きことばの表現」, 『第2回コーパス日本語学ワークショップ
予稿集』 pp.43-50. (国立国語研究所) 2012.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」, 「国語辞典をひくのが面白くなる話」講演 2012.7.
- ・国語研「ニホンゴ探検」, 辞書引きコーナー 講師 2012.7.
- ・国語研 NINJAL ジュニアプログラム, 出前授業 講師「めざせ, ことば博士! 辞書をつくってみよう!」(立川市錦学習館) 2012.7.

田中 牧郎 (たなか まきろう) 言語資源研究系 准教授

1962生

【学位】修士（文学）（東北大学、1987）

【学歴】東北大学文学部文学科（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程国文学国語学日本思想史学専攻（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1989）

【職歴】国立国語研究所国語辞典編集室（1996），同主任研究官（1999），同室長（2000），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門主任研究員（2001），同グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，社会言語学会，言語処理学会，訓点語学会，日本言語学会，日本言語政策学会，万葉学会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本語学会評議員，日本語学会『日本語学大辞典』編集委員主任，社会言語科学会編集委員，言語処理学会編集委員，日本医学会用語管理委員会委員，朝日新聞社・ベネッセコーポレーション「語彙・読解力検定」語彙選定委員

【2012年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「近代語コーパス設計のための文献言語研究」：リーダー
研究目的：

古代から近世までを対象とするプロジェクト「通時コーパスの設計」（基幹型）を補い、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」との間をつなぐものとして、「近代語コーパス」を設計する。国語研究所がこれまでに作成した「太陽コーパス」や近代語文献の電子化テキストなどをもとに、「近代語コーパス」の原型を作り、これを使ってコーパス近代語研究の開拓方法を研究する。また、重要な文献資料をリスト化し、コーパスの対象にする文献の選び方を検討し、コーパス化する文献言語の構造化や形態素解析の方法について研究する。

研究成果：

研究目的に応じる研究成果を集成した報告書を「国立国語研究所共同研究報告」としてまとめ、今後構築するコーパスのモデルとして『明六雑誌コーパス』を完成させ公開した。研究報告書は「コーパスの設計」「コーパスの活用」の二部構成としたが、この構成にしたがって成果の要点を挙げるところの通りである。まず、コーパスの設計に関しては、資料選定、文字処理、形態素解析、モデルコーパスの構築の四分野にわたって、近代語コーパスの構築作業に進む際に重要な論点となることを精選して議論した。また、コーパスの活用に関しては、語彙研究、文法研究、日中韓対照研究の各分野において、コーパスを使うことで従来の研究を大きく進めた研究が可能になることを、具体的な研究事例によって示した。ほかに、「通時コーパスの設計」「コーパス日本語学の創成」「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」において、共同研究員を務めた。

【研究業績】

《著書・編書》

陣内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫（編）

『外来語研究の新展開』, おうふう, 2012.10.

《論文・ブックチャプター》

田中牧郎

「日本語研究のためのコーパス —国立国語研究所のコーパスを中心に—」, 『日本語文学』 60, pp.109-136. 日本語文学会（韓国）2013.2.

田中牧郎

「国語教育における外来語 —コーパスにおける類型化を通して—」, 隈内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫（編）『外来語研究の新展開』 pp.224-242. おうふう, 2012.10.

田中牧郎

「新漢語定着の語彙的基盤 —『太陽コーパス』の「実現」「表現」「出現」と「あらわす」「あらわれる」など—」, 『日本語の学習と研究』 160, pp.39-47. 「日本語の学習と研究」編集委員会（中国）2012.6.

《国際会議録》

Makiro Tanaka and Hiroyuki Yamamoto

“A corpus study of emotive adjectives and verbs of the Heian Japanese”, Proceedings 13th ACIS International Conference on Software Engineering pp.377-380. IEEE Computer Society, 2012.8.

《データベース類》

・『日本語歴史コーパス 平安時代編（先行公開版）』公開 2012.12.

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

・『明六雑誌コーパス』公開 2012.10.

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroku/

《その他の出版物・記事》

田中牧郎

「新刊・寸感 今野真二著『ボール表紙本と明治の日本語』／薬師院仁志著『日本語の宿命 なぜ日本人は社会科学を理解できないのか』」, 『日本語学』 32 (3), pp.94-95. 明治書院, 2013.3.

田中牧郎, 相澤正夫

「著書紹介：隠内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫『外来語研究の新展開』, 『国立国語研究所プロジェクトレビュー』 3 (3), pp.197-199. 国立国語研究所, 2013.3.

野村雅昭, 西原鈴子, 萩野綱男, 田中牧郎, 甲斐睦郎

「座談会：『日本語学』の生命とその役割」, 『日本語学』 32 (3), pp.7-28. 明治書院, 2012.11.

田中牧郎

「近代書き言葉における文語助動詞から口語助動詞への推移 —『太陽コーパス』の形態素解析データによる—」, 『「近代語コーパス設計のための文献言語研究」成果報告書』 pp.191-200. 国立国語研究所, 2012.10.

田中牧郎

「明治後期から大正期の語彙のレベルと語種 —『太陽コーパス』の形態素解析データによる—」, 『「近代語コーパス設計のための文献言語研究」成果報告書』 pp.153-168. 国立国語研究所, 2012.10.

田中牧郎

「近代語コーパスにおける資料選定の考え方」, 『「近代語コーパス設計のための文献言語研究」成果報告書』 pp.13-26. 国立国語研究所, 2012.10.

近藤明日子, 田中牧郎

「『明六雑誌』コーパスの仕様」, 『「近代語コーパス設計のための文献言語研究」成果報告書』 pp.118-143. 国立国語研究所, 2012.10.

田中牧郎

「新刊・寸感 石川慎一郎著『ベーシックコーパス言語学』／橋内 武，堀田秀吾編著『法と言語法言語学へのいざない』」，『日本語学』31 (11), pp.74-75. 明治書院, 2012.9.

【講演・口頭発表】

田中牧郎, 宮寄由美

「法律用語と日常語の語義の違いと連続性」，社会言語科学会第31回大会（統計数理研究所）
2013.3.

近藤明日子, 田中牧郎ほか2名

「形態論情報付き近代語コーパスのアノテーション —『明六雑誌コーパス』を例として—」，言語処理学会第19回年次大会（名古屋大学）2013.3.

田中牧郎

「説話のパラレルコーパスの設計 —平安・鎌倉時代の文体変異の研究に向けて—」，第3回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.3.

田中牧郎, 高田智和ほか4名

「近代語コーパスの構築と活用に向けて」，日本語学会2012年度秋季大会（富山大学）

Makiro Tanaka and Hifumi Yamamoto

“Emotive adjectives and verbs of the Heian Japanese”, Japanese associations for Digital Humanities 2012 (Tokyo University) 2012.9.

田中牧郎

「語彙レベルから見た近代の語彙と現代の語彙 —『太陽コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて—」，第2回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.9.

近藤明日子, 田中牧郎ほか2名

「『明六雑誌コーパス』の開発 —近代語コーパスのモデルとして—」，第2回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.9.

田中牧郎

「コーパスによる学習語彙の分類」Castel/J企画パネル「言語に関するデータベース，コーパスの構築とその活用について」（名古屋外国語大学）2012.8.

田中牧郎, 山元啓史

「平安時代日本語の感情形容詞と感情動詞 —『源氏物語』『今昔物語集』のコーパス分析を通して—」，国立国語研究所国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」（国立国語研究所）2012.8.

田中牧郎

「明治後期から大正期の漢語の層 —『太陽コーパス』の語彙レベルによる類型化—」，第104回漢字漢語研究会（早稲田大学）2012.8.

田中牧郎

「近代書き言葉における文語法から口語法への推移 —『太陽コーパス』の助動詞の分析を通して—」，国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクト・オックスフォード大学VSARPJプロジェクト合同シンポジウム「通時コーパスと日本語史研究」（国立国語研究所）2012.7.

富士池優美, 田中牧郎

「今昔物語集の返読文字について —形態素解析の前処理を通して—」，日本語学会2012年度春季大会（千葉大学）2012.5.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・日本語学会 2012 年度春季大会シンポジウム「グローバル市民社会の日本語学」(千葉大学) (企画・司会) 2012.5.

【その他の学術的・社会的活動】

国立国語研究所が実施した「外来語言い換え提案」「病院の言葉を分かりやすくする提案」の成果を受けて国立国語研究所の外部で始まった同様の活動に協力を続けている。また、国立国語研究所の活動自体の、普及、啓発活動もいくつか行った。

1. 医学生への助言

日本医療学会医学生部会「医療ことばを創る会」では、国立国語研究所の「病院の言葉を分かりやすくする提案」を受けて、医療用語を分かりやすくするための活動を行っている。この活動の月例会に、参加し、医学生に対する助言を行った。<http://www.jhcs.jp/s/bukai/index.html>

2. 原子力用語を分かりやすくする検討への協力

関西電力・原子力安全システム研究所が実施している、原子力用語を分かりやすく説明するためのワーキンググループの月例会等に田中牧郎が参加し、分かりやすい説明方法の検討や報告書執筆などに協力した。

3. 医療者の研修会での講師

田中牧郎「病院の言葉を分かりやすくする提案」(平成 24 年度東海北陸ブロック「医療安全管理研修」講演、国立病院機構名古屋医療センター) 2013.1.28.

4. ラジオ出演

田中牧郎「伝えるための病院の言葉」NHK ラジオ第 2 放送「私の日本語辞典」, 2012.10.6,13,20,27(再放送: 10.13,20,27, 11.3.) 4 回シリーズ <http://www.nhk.or.jp/r2bunka/nihon/1210.html>

5. 雑誌記事企画協力・取材

田中牧郎「医療コミュニケーション」(特集「言葉の力を活かしたコミュニケーション」), 『宣传会議』844 号, pp.78-79. 2012.9.1.

6. 新聞記事取材・コメント

「イライラするカタカナ語は? be ランキング」『朝日新聞』土曜 be 版, 2012.12.8.

丸山 岳彦（まるやま たけひこ）言語資源研究系 准教授

1972生

【学位】博士（学術）（国際基督教大学、2013）

【学歴】神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業（1995）、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科日本語日本文化専攻修士課程修了（1997）、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻博士課程単位取得退学（2000）

【職歴】株式会社 ATR 音声言語通信研究所 客員研究員（2000）、国際電気通信基礎技術研究所 ATR 音声言語コミュニケーション研究所 研究員（2001）、独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2004）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009）、同 准教授（2011）

【専門領域】言語学、日本語学、コーパス日本語学

【所属学会】日本語文法学会、言語処理学会

【受賞歴】

2006 言語処理学会第12回年次大会 優秀発表賞「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」（共著）

【2012年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」：共同研究員

研究目的：

コーパス言語学の立場から、日本語複文構文について分析・考察を行う。

研究成果：

本年度は、本プロジェクトにおいて2回の研究発表会（5月13日・学習院大学、9月29日・九州大学）およびシンポジウム「複文構文の意味の研究」（12月15日～16日・国立国語研究所）を開催した。これら全てにおいて、研究会開催の実務を担当した。また、12月のシンポジウムでは、コーパス言語学の立場から中間報告を行い、コーパスを用いた日本語研究と複文研究の流れについて発表した。これらの開催記録およびハンドアウト・予稿集を、本プロジェクトのWebページを通じて一般に公開した。

また、理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会（3月2日・国立国語研究所）においても、「複文構文プロジェクト・中間報告 コーパス言語学」と題して報告を行った。さらに、「複文に関する研究文献情報の検索ツール」と題したWebページを整備し、複文研究に関する文献情報を検索するためのツールに関する情報を一般に公開した。本プロジェクトの最終成果物として、ひつじ書房から論文集『日本語複文構文の研究』を刊行する予定となっている。そのうち、「第3部 コーパス言語学・語用論」編の編集と取りまとめを担当した。

領域指定型共同研究プロジェクト「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」：共同研究員

研究目的：

コーパス言語学の立場から分析・考察を行う。

研究成果：

共同研究発表会（2月23日・国立国語研究所）において、コーパスを用いた自発音声の非流暢性（自己修復の分類と出現傾向）について研究発表を行った。

【研究業績】

《博士学位論文》

丸山岳彦

「発話の実時間的産出から見た非流暢性の記述的研究」, 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科, 2013.3.

【講演・口頭発表】

Takehiko Maruyama

"Corpus linguistics in Japan: Design and compilation of large-scale corpora of written and spoken Japanese" (ロシア科学アカデミー東洋学研究所) [招待講演] 2012.6.

Takehiko Maruyama

"Speech segmentation by clausal and non-clausal boundaries in Japanese", The Fifth International Conference on Cognitive Science, Abstracts Volume 2: Workshop "Spoken discourse corpora as a window on cognitive mechanisms of speech production"/ Воркшоп «Электронные корпуса звучащей речи как инструмент изучения когнитивных механизмов речепорождения», pp.782-783. Kaliningrad, 2012.7.

柏野和佳子, 立花幸子, 保田 祥, 飯田 龍, 丸山岳彦, 奥村 学, 佐藤理史, 徳永健伸, 大塚裕子, 佐渡島紗織, 椿本弥生, 沼田 寛

「書籍テキストへの文体情報付与の試み —『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に—」, 『第2回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』 pp.155-164. (国立国語研究所) 2012.9.

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「「語りかけ性」を有すると判断される書きことばの表現」, 『第2回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』 pp.43-50. (国立国語研究所) 2012.9.

丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた文末表現のバリエーションの分析 (2)」, 『第2回 コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』 pp.207-214. (国立国語研究所) 2012.9.

丸山岳彦

「日本語コーパスの50年」, 名古屋地区 NLP セミナー [招待講演] 2012.11.

丸山岳彦

「自発的な話し言葉の分析 一発話の実時間的産出と非流暢性」, 国際基督教大学 IERS 教育研究所 2012 年度 第12回公開講演会, [招待講演] 2013.2.

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「書きことばにおける「語りかけ」は何のために用いられるのか」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』 pp.143-152. (国立国語研究所) 2013.2.

柏野和佳子, 立花幸子, 保田 祥, 飯田 龍, 丸山岳彦, 奥村 学, 佐藤理史, 徳永健伸, 大塚裕子, 佐渡島紗織, 椿本弥生, 沼田 寛

「BCCWJ 図書館サブコーパス全テキストへの文体情報付与結果の分析」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』 pp.63-70. (国立国語研究所) 2013.2.

保田 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「アノテーターコメントを用いた「語りかけ性」分析の試み 一頻度情報から捉え難いテキスト性質の解明に向けて—」, 『言語処理学会 第19回年次大会 発表論文集』 pp.358-361. (名古屋大学) 2013.3.

丸山岳彦

「BCCWJに対する節境界ラベルのアノテーション」,『言語処理学会 第19回年次大会 発表論文集』

pp.154-157. (名古屋大学) 2013.3.

丸山岳彦

「節間関係のアノテーション」, NII テキストアノテーションワークショップ, [招待講演] 2013.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

政策研究大学院大学

山口 昌也 (やまぐち まさや) 言語資源研究系 准教授

1968 生

【学位】博士（工学）（東京農工大学，1994）

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業（1992），東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了（1994），東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了（1998）

【職歴】東京農工大学工学部 助手（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

【所属学会】社会言語科学会，日本教育工学会，電子情報通信学会，日本語学会，言語処理学会，情報処理学会

【受賞歴】

2007 財団法人博報児童教育振興会 第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト

「文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究」：リーダー

研究目的：

単語周辺の文脈情報から、複合的な言語要素（例：複合動詞）の意味記述（文脈情報）を合成的に導出する理論の確立を目指す。

研究成果：

複合的言語要素として、複合動詞に对象を絞り、複合動詞と前項・後項動詞との関係を合成的意味記述という観点から研究した。研究の過程で、次の三つの研究成果を得た。

1. 複合動詞と構成動詞との関係を分析するための基礎資料として、「Web データに基づく複合動詞用例データベース」を構築した。本データベースには、複合動詞約 3000 語と構成動詞約 1000 語を収録する。データベースは、複合動詞の検索、用例・格要素一覧の閲覧機能をつけた上で、Web 上に公開した。
2. 複合動詞と構成動詞の用法の類似性を定量的に表す指標として、複合動詞の格要素が構成動詞で用いられる割合「重複度」を提案し、試行実験を行った。
3. 実験結果は、研究者が用例を集め、検索する環境として、全文検索システム『ひまわり』を拡張した。拡張した機能の使用例として、「青空文庫」の作品（10677 件）から『ひまわり』用検索データへの変換結果を作成し、一般に公開した。

【研究業績】

《データベース類》

- ・Web データに基づく複合動詞用例データベース (<http://csd.ninjal.ac.jp/comp/>)
- ・Web データに基づくサ変名詞用例データベース (<http://csd.ninjal.ac.jp/sahen/>)
- ・日本語複合動詞リスト (<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> の「Web データに基づく複合動詞用例データベース」参照)
- ・全文検索システム『ひまわり』用「青空文庫」パッケージ (<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> の全文検

索システム『ひまわり』参照)

【講演・口頭発表】

山口昌也

「複合動詞・構成動詞間の意味的な共通性を計る指標の評価」, 『言語処理学会第19回年次大会予稿集』 pp.757-760. (名古屋大学) 2013.3.

山口昌也

「Webデータに基づく複合動詞データベースの構築」, 『第2回日本語コーパスワークショップ予稿集』 pp.215-220. (国立国語研究所) 2012.9.

山口昌也

「個人用コーパスの作成とアノテーションを支援する環境の実現」, 『第3回日本語コーパスワークショップ予稿集』 pp.369-372. (国立国語研究所) 2013.3.

佐野香織, 山口昌也

「コメント機能を含む相互教授作文支援システム実践分析」, *Proceedings of CASTEL/J 2012* (Web版, http://2012castelj.kshinagawa.com/proceedings/Koutou/21/21_3_2_sano.pdf)
(名古屋外国語大学) 2012.8.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研の一般公開でことばのワークショップ「コーパスを作つてみよう ー全文検索ひまわりー」
講師, 2012.10.20.

山崎 誠 (やまざき まこと) 言語資源研究系 准教授

1957生

【学位】修士（文学）（筑波大学，1983）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業（1980），筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第5学年中退（1984）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員（1984），同言語体系研究部第一研究室 研究員（1988），同 主任研究官（1993），同 第一研究室 室長（1995），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員（2001），同研究開発部門第一領域長（2003），同研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

【所属学会】日本語学会，計量国語学会，言語処理学会，語彙研究会，日本語教育学会，社会言語科学会，情報知識学会，日本語文法学会，日本行動計量学会，情報処理学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事，言語処理学会 理事・編集委員

【2012年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「テキストにおける語彙の分布と文章構造」：リーダー

研究目的：

本研究は、一定のまとまりをもつテキストにおいて、それを成り立たせるために働く一貫性や結束性という特徴を語彙（とくに内容語）の分布から計量的に明らかにすることを目指した。また、語彙の分布を時系列にそって分析することによって、テキストの構造や展開を客観的に捉える方法を開発することにも重点を置いた。

研究成果：

プロジェクトリーダーとしてのとりまとめを行い、報告書をホームページで公開した。本プロジェクトは、これまで十分でなかった個々のテキスト内で語彙がどのように使用され、どう推移していくかという動的なテキスト研究である。具体的には、次のことを明らかにした。(1) 多義語が同一テキストの中の一定のまとまりの範囲では同じ意味で使われる傾向があることを示した [担当：山崎誠]。(2) テキストにおける結束性を段落間の類似度の分布として視覚化して示した [担当：山崎誠]。(3) 科学的入門書における「てている」の持つ「話題提供」「結論」の機能を明らかにした [担当：江田すみれ]。(4) 学術論文におけるメタ言語表現の分析をとおして論文の記述タイプよりも学術分野間の違いのほうが大きいことを示した [担当：清水まさ子]。

【研究業績】

《著書・編書》

Yukio Tono, Makoto Yamazaki and Kikuo Maekawa

A Frequency Dictionary of Japanese: Core Vocabulary for Learners, Routledge, 2013.2.

《その他の出版物・記事》

山崎 誠，内山清子，江田すみれ，小森理，清水まさ子，高崎みどり，馬場俊臣，馬場康維，村田 年

『テキストにおける語彙の分布と文章構造 成果報告書』，国立国語研究所共同研究報告 12-06,
pp.12-06. 2013.3.

【講演・口頭発表】

山崎 誠

「共起語集合の頻度分布と語の属性との相関」，第3回コーパス日本語学ワークショップ（国立国

語研究所) 2013.2.28.

山崎 誠

「コーパス日本語学のための理論的整備－定量的研究の理解のために－」, 第2回一橋日本語教育研究会大会（一橋大学）2013.2.16.

山崎 誠

「段落間の類似度を利用したテキストの結束性の測定」, 第2回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2012.9.7.

山崎 誠

「テキストのタイプ・構成と語彙的結束性との関係」, 日本語教育国際研究大会名古屋 2012（名古屋大学）2012.8.19.

山崎 誠

「形態論情報を利用した BCCWJ 検索ツール『中納言』の機能とその日本語研究への活用」, 日本言語学会第144回大会（東京外国語大学）2012.6.16.

Makoto Yamazaki

“Quantitative analysis of the text structure using co-occurrence of words”, International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO2012) (Belgrade,Serbia) 2012.4.28.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・「中納言」講習会講師（国立国語研究所）2013.3.8.

John Bradford Whitman (ジョン・ブラッドフォード・ホイットマン)

言語対照研究系 教授, 研究系長

1954 生

【学位】博士（言語学）（ハーバード大学, 1985）

【学歴】Harvard University, Linguistics & Philosophy 卒業（1976），筑波大学文芸言語研究科修士課程修了（1980），Harvard University, Linguistics 博士課程修了（1985）

【職歴】ハーバード大学 助教授（1986），コーネル大学 助教授（1987），同 教授（2003），同 Chair（教授）（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授（2011），研究系長（2012）

【専門領域】言語学，歴史比較言語学，言語類型論，東洋言語学

【所属学会】日本言語学会，訓点語学会，アメリカ言語学会，国際韓国語学会

【学会等の役員・委員】*Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* (パリ) 編集委員, 『言語研究』(韓国) 編集委員, *Korean Linguistics* (オランダ Brill 社) 副編集長

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第3回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」：リーダー
研究目的

本研究の目的は日本語とその周辺の諸言語を主な対象とし、その形態統語的・音韻的特徴と変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することである。形態統語論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語にも見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能や形、歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語や周辺諸言語の歴史的再建を試みる。そして、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。上記の2つのテーマに沿って、プロジェクトを「統語論班」と「音韻再建班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は（1）類型論的観点と通時的言語学観点を組み合わせること、（2）言語類型論、国語学（日本語学）、言語学理論（統語理論・音韻理論）にわたる、幅広い理論・方法論的観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。

また、研究成果の公表もプロジェクトの目的である。各班別に、年に2回の共同研究発表会と年に1回の国際ワークショップを行う。「統語論班」の一部のメンバーは、海外の出版企画 *Mouton Handbook of the History of Japanese* と *Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar* で研究成果を発表する。残るプロジェクトメンバーは国内外の学問誌や論文集で研究成果を発表する。

研究成果

1. プロジェクトの「統語論班」と「音韻再建班」の両班を結成した。
2. 両班を合わせて5回の研究発表会を行った。そのほかに2013年3月、言語対照研究系の合同発表研究会の形で行い、プロジェクト内外の出席者が100人を超えた。そのほかに、米コーネル大学で研究発表会を主催し、プロジェクトメンバーを招き発表してもらった。
3. ムートン社ハンドブック (*Handbook of Historical Japanese Linguistics*) の執筆者42名から承諾を得、各章の要旨を含めた出版計画を出版社に提出し、出版契約を結んだ。各章の提出締め切りを2013年4月1日に定めた。「統語論班」のメンバーを幾人か執筆者として要旨を出してもらい、*Nominalizations as a source of main clause grammar* という題目で John Benjamins 社の言語類

型論学シリーズ *Typological Studies in Language* に提出する予定である。「音韻再建」のメンバー3人が Korean Linguistics (オランダ Brill 社) の特集号 “Korean Historical Linguistics” に論文を投稿した。

4. 2013年8月に海外で開催の Workshop on Altaic Formal Linguistics の Web サイトを開設し、招待発表者を決め、プロジェクトメンバーの参加を勧めた。

人間文化研究機構連携研究「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散」：リーダー

1. 第1回研究会・打ち合わせを行った。(国立国語研究所) 2012.8.1.
2. 国際シンポジウム「ヒト・穀物・言語の拡散－北海道・琉球を中心に」を開催した。(総合地球環境学研究所) (企画・運営) 2013.2.23-24.

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

John Whitman

“The relationship between Japanese and Korean” In David N.Tranter (ed.) *The Languages of Japan and Korea*, pp.24-38. Routledge, 2012.

John Whitman and Yuko Yanagida

“The formal syntax of alignment change” In Charlotte Galves, Sonia Cyrino, Ruth Lopes, Filomena Sandalo (eds.) *Parameter Theory & Linguistic Change*, pp.177-195. Oxford University Press, 2012.

John Whitman

“Misparsing and syntactic reanalysis” In Ans van Kemenade & N. de Haas (eds.) *Selected Papers from the 19th International Conference on Historical Linguistics*, pp.69-87. John Benjamins, 2012.

Jaklin Kornfilt and John Whitman.

“Genitive Subjects in TP Nominalizations” *SinSpeC: Working Papers of the SFB 732: Incremental Specification in Context*, 9, pp.39-72. Stuttgart University. 2012.

John Whitman

“The prehead relative clause problem” In Umut Özge (ed.) *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (MIT Working Papers in Linguistics)*, pp.361-380. Cambridge, Massachusetts, 2013.

【講演・口頭発表】

John Whitman

“The prehead relative clause problem” (ジェネーブ大学言語学科) [招待講演] 2012.5.15

John Whitman

“The prehead relative clause problem”, The 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics(ドイツ・シュトゥットガルト大学) [招待講演] 2012.5.18.

Andrew Joseph and John Whitman

“The diachronic consequences of the RTR analysis of Tungusic vowel harmony”, The 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics. (ドイツ・シュトゥットガルト大学) 2012.5.

John Whitman

“Japanese relative clauses”, Workshop on Japanese syntax, (Yokohama National University) [招待講演] 2012.6.

John Whitman

“Hidden vernaculars: The glossed text and premodern reading”, 国際シンポジウム “Thinking about Cosmopolitan and Vernacular in the Sinographic Cosmopolis”（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学）[招待講演] 2012.7.2.

ジョン・ホイットマン

「他言語を自言語で読むこと：「訓読」の普遍性について」, NINJAL セミナー「漢文訓読再発見」(富山大学) [招待講演] 2012.7.

Bjarke Frellesvig and John Whitman

“The historical source of the bigrade transitivity alternations in Japanese”, 国語研国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」NINJAL International Symposium on Valency Classes and Alternations in Japanese (国立国語研究所) 2012.8.

John Whitman

“The prehead relative clause problem” (ハーバード大学言語学科) [招待講演] 2012.10.

Redouane Djamouri, Waltraud Paul and John Whitman

“The constituent order of proto-Sino-Tibetan”, The 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL45) 2012.10.

ジョン・ホイットマン

「日琉祖語の音節末子音と連体形・已然形の起源」, ワークショップ「琉球諸語と古代日本語」(京都大学) [招待講演] 2013.2.

Andrew Joseph, Seongyeon Ko, and John Whitman

“Comparative consequences of the tongue root harmony analysis for proto-Tungusic, proto-Mongolic, and proto-Korean”, 国際シンポジウム Paradigm change in historical reconstruction: the TransEurasian languages and beyond (マインツ大学) [招待講演] 2013.3.

【研究調査】

- ・2012.8.12 米国ニューヨーク州 ジンポー語（ミャンマー）調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・International Workshop on Endangered Dialects in Korean and Japanese (企画・運営) 2012.10.
- ・第 22 回 Japanese Korean Linguistics Conference (企画・運営) 2012.10.
- ・Workshop on Suspended Affixation (米国コーネル大学) (企画・運営) 2012.10.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・論文指導

Edward Cormany コーネル大学博士課程言語学専攻（主査）

Jiwon Yun コーネル大学博士課程言語学専攻（副査）

Nan Li コーネル大学博士課程言語学専攻（主査）

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント・ヴィジャイ・パルデシ)

言語対照研究系 教授

【学位】博士（学術）（神戸大学，2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本語文法学会，日本言語学会，関西言語学会，国際類型論学会（ALT）

【学会等の役員・委員】日本語文法学会大会委員会委員：2010.4-2013.3.

【受賞歴】

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞：パルデシ・プラシャント，桐生和幸，石田英明，小磯千尋（編）2007.『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』(428ページ)。財団法人博報児童教育振興会2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000 The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to "The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000", Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: "The Passive and Related Constructions in Marathi."

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」：リーダー

研究目的：

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性（i）出来事の認識，（ii）その言語表現および（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約40言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。

本プロジェクトは，意味的他動性が（i）出来事の認識（言語・社会心理学班），（ii）その言語表現（言語類型論・対照研究班）および，（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得：第二言語習得班）にどのように反映されているのかを解明することを目標とし，班ごとに共同研究を進めた。

研究成果：

（i）は研究成果の一部が国際学会での発表，国際雑誌での論文掲載という成果が上がり，次の課題に向けて，引き続きデータ収集を行った。（ii）は共同研究会での議論等を踏まえ，成果を論文集の形でまとめるところまで進んだ。（iii）インドでのデータ収集，「なたね」のplatformで分析・公開が実現できた。類型論の方法論に基づく第2言語習得研究は新しい研究分野であり，その方法論について今後も引き続き研究を続ける。また，当初の目標に加えて，言語類型論班のメンバーを中心に，Mouton社 *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* の英文原稿の執筆計画作成を開始した。2014年中に刊行を目指す。

独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」：リーダー
2009年10月から2013年3月にかけて日本語研究の成果を日本語教育に応用する目的で、共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」を実施した。本プロジェクトで作成している「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」では編集方針、見出し語の内容、執筆・編集方法のいずれにおいても従来の辞書にはない新たな試みが行われ、共同研究報告書『日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成』を刊行した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Peter Hook, Prashant Pardeshi, Hsin-hsin Liang

“Semantic neutrality in complex predicates: Evidence from East and South Asia”, *Linguistics* 50 (3), pp.605-632. 2012.

Prashant Pardeshi, Shingo Imai, Kazuyuki Kiryu, Sangmok Lee, Shiro Akasegawa and Yasunari Imamura.

“Compilation of Japanese Basic Verb Usage Handbook for JFL Learners: A project report”, *Acta Linguistica Asiatica* 2(2), pp.37-64. 2012.

(Available online <http://revije.ff.uni-lj.si/ala/article/view/187>)

Prashant Pardeshi and Yuko Yoshinari.

“An investigation into the interaction between intentionality and the use of transitive/intransitive expression: A contrastive study of Japanese and Marathi”, *Journal of Japanese Linguistics* 28, pp.77-88. 2012.

《データベース類》

· NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) 1.10版 (2012.10公開) <http://nlb.ninjal.ac.jp/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システム。

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ

「〈共同研究プロジェクト紹介〉「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」」(Universals and Cross-Linguistic Variations in the Semantic Structure of Predicates), 『国語研プロジェクトレビュー』7, pp.23-29. 2013.2.

プラシャント・パルデシ

〈共同研究プロジェクト紹介〉「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成 —研究成果と今後の展望—」, 『国語研プロジェクトレビュー』4 (1), pp.28-35. 2013.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi

“Motion events in Marathi”, Department of Linguistics, Deccan College Post-Graduate and Research Institute, Pune, India. 2012.4.

Prashant Pardeshi and Shiro Akasegawa

“NLB: A Lexical-Profilng-Based Corpus Browsing System for the BCCWJ”, International Workshop on Corpus linguistics with a Special Focus on Korean and Japanese. (National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), Tokyo.) 2012.10.

赤瀬川史朗, プラシャント・パルデシ

「BCCWJ オンライン検索ツール NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) 実習」, 名古屋大学国際言語文化研究科・応用言語学講座（名古屋大学）2012.7.24.

赤瀬川史朗, プラシャント・パルデシ

「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) デモンストレーション」, 日本語教育国際研究大会 (ICJLE)
名古屋 2012 (名古屋大学) 2012.8.19.

プラシャント・パルデシ, 赤瀬川史朗

「BCCWJ 検索ツール NLB 実習およびその研究・教育への応用」(九州大学言語文化研究室)
2012.11.15.

プラシャント・パルデシ, 赤瀬川史朗

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』オンライン検索システム NINJAL-LWP for BCCWJへの
招待」(東北大学国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究所センター) 2013.2.19.

今井新悟, 赤瀬川史朗, プラシャント・パルデシ

「筑波ウェブコーパス検索ツール NLT の開発」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』
pp.199-206. (国立国語研究所) 2013.2.28.

【研究調査】

- ・2012.4 インド・プネー市にて日本語学習者から作文とインタビューデータを収集

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference (国立国語研究所) (企画・運営) 2012.10.12-14.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・プラシャント・パルデシ, 柏野和佳子, 今村泰也, 平本智弥
国立国語研究所ジュニアプログラム, 「めざせ! ことば博士! 辞書をつくってみよう!」(立川市錦
図書館) 2012.7.31
- ・プラシャント・パルデシ, 赤瀬川史朗
国立国語研究所ブース展示「基本動詞用法ハンドブックの作成」, 大学共同利用機関シンポジウム
2012 (東京国際フォーラム) 2012.11.17.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・博士論文審査
吉岡 乾 (東京外国語大学) (副査)

Anna Bugaeva (アンナ・ブガエワ) 言語対照研究系 特任准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（北海道大学， 2004）

【学歴】サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部日本語科卒業（1996），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（2000），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程修了（2004）

【職歴】オーストラリア ラ・トローブ大学言語類型論センター 客員研究員（2007），早稲田大学高等研究所 助教（2008），同 准教授（2011），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 特任准教授（2012.12）

【専門領域】言語学，アイヌ語学

【所属学会】Societas Linguistica Europaea (SLE), Association for Linguistic Typology (ALT), 日本言語類型論学会, 日本言語学会, 日本ロシア文学会

【研究業績】

《その他の出版物》

Anna Bugaeva

“Mermaid construction in Ainu,” In: Tsunoda Tasaku (ed.) *Adnominal Clauses and the ‘Mermaid Construction’: Grammaticalization of Nouns* (国立国語研究所共同研究報告 13-01.) pp. 667-677.

【講演・口頭発表】

アンナ・ブガエワ

「アイヌの言葉と文化」，市民講座 朝日カルチャーセンター，2013.1.25.

淺原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター 特任准教授

1975 生

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士前期課程修了（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士後期課程短期修了（2003）

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所助手・助教（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授（2012）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会，言語処理学会

【受賞歴】

2011 Yanyan Luo, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto

Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, "Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis"

2010 Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), "Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text"

2008 岩立将和, 淺原正幸, 松本裕治

言語処理学会第14回年次大会 優秀発表賞, 「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003 淺原正幸

平成15年度情報処理学会 山下記念研究賞, 「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2012年度の研究成果の概要】

超大規模コーパス構築プロジェクト：共同研究員

1. 2012年度は機材の調達と2名のPD フェローの採用を行い研究の環境整備を行った。
2. プロジェクト全体の計画立案を行い, 国内全国大会（言語処理学会年次大会 2013年3月）に発表した。
3. 海外に計画を発信するために国際会議 PACLING 2013に投稿し採択された。(2013年に発表予定)

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：共同研究員

1. 主として, 文境界アノテーション, 係り受けアノテーション, 時間情報表現アノテーション, 時間的順序関係アノテーションを行い, それぞれ国内の年次大会で発表を行った。
2. アノテーション関連の研究について論文誌「自然言語処理」に3本の論文を投稿し, このうち2本が2013年6月号に掲載された。関連する内容で現在EMNLP-2013に2本, PACLIC-2013に1本の国際会議論文を投稿中である。
3. 2013年3月に開かれた言語処理学会年次大会においてテーマセッション「コーパスアノテーションの可能性と共有化」を企画した(前川喜久雄との共同)。現在, 論文誌『自然言語処理』に「コーパスアノテーション—新しい可能性と共有化にむけての試みー」と題した特集号を企画中である(前川喜久雄との共同)。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Asad Habib, Masakazu Iwatate, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto

“Keypad for large letter-set languages and small touch-screen devices (Case study: Urdu)”,

International Journal of Computer Science Issues 9(3), pp. 47-58. 2012.5.

《国際会議録》

Asad Habib, Masakazu Iwatate, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto, Wajeeha Khalil

“Optimized and hygienic touch screen keyboard for large set languages”, Proceedings of International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication (ICMIMC-2013), (Malaysia) 2013.1.

Katsumasa Yoshikawa, Masayuki Asahara, Ryu Iida

“Identifying temporal relations by sentence and document optimizations”, Proceedings of the 24th International Conference on Computational Linguistics (COLING-2012) (Mumbai, India) 2012.12.

Akihiro Inokuchi, Ayumu Yamaoka, Takashi Washio, Yuji Matsumoto, Masayuki Asahara, Masakazu Iwatate and Hideto Kazawa

“Mining rules for rewriting states in a transition-based dependency parser”, Proceedings of the 12th Pacific Rim International Conference on Artificial Intelligence (PRICAI-2012) (Kuching, Sarawak, Malaysia,) 2012.9.

Katsuhiko Hayashi, Taro Watanabe, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto

“Head-driven transition-based parsing with top-down prediction”, Proceedings of the 50th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (Volume 1: Long Papers) (ACL-2012) (Jeju Island, Korea) 2012.7.

【講演・口頭発表】

宋 東旭, 淩原正幸, 古宮嘉那子, 小谷善行

「機械学習による中国語助詞の用法解析」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ』(国立国語研究所) 2013.3.

小西 光, 小山田由紀, 淩原正幸, 柏野和佳子, 前川喜久雄

「BCCWJ 係り受け関係アノテーション付与のための文境界認定」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ』(国立国語研究所) 2013.3.

淺原正幸, 前川喜久雄

「Web を母集団とした超大規模コーパスの設計」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ』(国立国語研究所) 2013.3.

淺原正幸

「係り受けアノテーション基準の比較」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ』(国立国語研究所) 2013.3.

保田 祥, 小西 光, 淩原正幸, 今田水穂, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」, 『第3回コーパス日本語学ワークショップ』(国立国語研究所) 2013.3.

吉川克正, 淩原正幸, 飯田 龍

「文内最適化による時間的順序関係推定」, 『言語処理学会第19回年次大会論文集』(名古屋大学) 2013.3.

淺原正幸, 松本裕治

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する係り受け・並列構造アノテーション」, 『言語処理学会第19回年次大会論文集』(名古屋大学) 2013.3.

小西 光, 淺原正幸, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現アノテーション」, 『言語処理学会第19回年次大会論文集』(名古屋大学) 2013.3.

淺原正幸, 前川喜久雄,

「Web を母集団とした超大規模コーパスの設計」, 『言語処理学会第19回年次大会論文集』(名古屋大学) 2013.3.

小西 光, 淺原正幸, 前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」, 第2回コーパス日本語学ワークショップ(国立国語研究所) 2012.9.

淺原正幸, 狩野芳伸, 小野 創, 植田禎子

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する読文時間・視線情報アノテーションに向けて」, 第1回テキストアノテーションワークショップ(国立情報学研究所) 2012.8.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- EACL-2012 Program Committee Member 2012.
- ACL-2013 Program Committee Member 2013.
- 言語処理学会年次大会でテーマセッションを企画 2013.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- 国語研の一般公開で「かかりうけゲーム」を展示 2012.10.

【大学院教育・若手研究者育成】

- 博士論文審査(副査)

東 藍(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科, 2013)

“A Study of Algebraic and Graph-Theoretic Frameworks for Generalized Forward-Backward Algorithms”

Asad Habib(奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科, 2012)

“Design and Development of Optimized Hygienic Input Systems for Touch Screen Gadget”

迫田 久美子（さこだ くみこ）日本語教育研究・情報センター教授、センター長

【学位】博士（教育学）（広島大学、1996）

【学歴】広島女学院大学文学部英米文学科卒業（1973）、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻修士課程修了（1992）、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士後期課程修了（1996）

【職歴】広島大学教育学部 講師（1996）、同 助教授（1998）、広島大学大学院教育学研究科 助教授（2001）、同 教授（2003）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授、センター長（2012）

【専門領域】日本語教育学、第二言語習得研究、誤用分析、日本語教授法

【所属学会】日本語教育学会、国立大学日本語教育協議会、日本言語学会、第二言語習得研究会、AATJ（American Association of Teachers of Japanese）

【学会等の役員・委員】日本語教育学会国際連携委員会 委員長、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 委員、外務省「海外における日本語の普及促進に関する有識者懇談会」委員、国際交流基金「日本語有識者懇談会」委員

【受賞歴】

2003 日本語教育学会奨励賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究—学習者の言語環境と日本語の習得過程に関する研究ー」：リーダー

研究目的：

日本語学習者の発話や作文のデータに基づき、言語環境の異なる日本語学習者の習得過程の比較を行い、その類似点と相違点を明らかにする。また、さまざまな観点からの日本語学習者の言語コーパスを構築する。

研究成果：

最も大きな成果としては、韓国語話者3名、中国語話者3名の日本語学習者の3年間の縦断調査による発話データ（約47時間分、約87万語）をC-JAS（Corpus of Japanese as a second language）として公開した。また、そのデータを分析、日本語学習者の誤用を学習者のストラテジーととらえ、習得過程で見られる日本語使用の特徴を取り上げ、「日本語非母語話者の工夫」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』（2012年5月 野田尚史編 くろしお出版）を執筆した。また、プロジェクトに関する具体的な活動としては、次の3つを行った。

1. 2012.11. 「コミュニケーションのための日本語教育研究」のシンポジウムにおいて、誤用分析に基づき、日本語学習者の言語習得に関する発表を行った。
2. 2013.1. 共同研究会を開催し、2012年度の成果発表を行うと同時に、日本語学習者の縦断調査の発話データ（C-JAS）を公開した。
3. 2013.3. NINJAL フォーラム「日本語を教えることの楽しさと難しさ」『グローバル社会の日本語のコミュニケーション—日本語を学ぶことはなぜ必要か—』で発表した。

学習者コーパスに基づく日本語学習者の習得に関する招待講演は、国内、海外合わせて11件、行った。また、海外19地域、12の異なる母語の日本語学習者の言語コーパスの構築のためのグランドプランを作成し、韓国、台湾、国内（広島・浜松）での事前調査を経て、3月に上海で第1回のデータ収集調査を実施し、コーパス構築のための活動を開始した。

【研究業績】

《データベース類》

- ・日本語学習者発話コーパス C-JAS (Corpus of Japanese as a second language)

<https://ninja-sakoda.sakura.ne.jp/c-jas/web/>

《その他の出版物・記事》

迫田久美子

「〈共同研究紹介〉 日本語教育研究・情報センターの共同研究プロジェクト」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (3), pp.105-106. 国立国語研究所, 2012.

迫田久美子

「日本語学習者の発話コーパスと動詞の発達」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (3), pp.107-116. 国立国語研究所, 2012.

【講演・口頭発表】

迫田久美子

「『わかる』から『できる』へ繋ぐ日本語教育—誤用の原因からシャドーイングへ」, 北京日本学研究センター「日本語教育学研究講座」(北京) [招待講演] 2012.5.

迫田久美子

「コミュニケーション能力を高めるために—誤用の分析からシャドーイングへ—」, 国際交流基金ベトナム日本文化交流センター, ベトナム日本人材協力センター (VJCC) 『日本語教育セミナー』(ハノイ) [招待講演] 2012.6.

迫田久美子

「日本語学習者のコミュニケーション—誤用の原因と運用のストラテジー」(タマサート大学, バンコク) [招待講演] 2012.6.

迫田久美子

「日本語教育のためのシャドーイング研究—習得研究から運用力養成へ—」, AJALT 会員研修 (東京) [招待講演] 2012.6.

迫田久美子

「『わかる』から『できる』へ繋ぐ日本語教育—誤用の原因からシャドーイングへ」(太平洋立命館大学, 別府) [招待講演] 2012.6.

迫田久美子

「学習者はなぜ間違うのか—誤用産出から運用力の向上へ—」, 韓国日本学会国際学術大会 (淑明女子大学, ソウル) [招待講演] 2012.8.

迫田久美子

「日本語学習者のコミュニケーション—誤用の原因と運用のストラテジー」, 香港日本語教育研究会 (香港) [招待講演] 2012.11.

迫田久美子

「誤用に見る日本語学習者の知恵と工夫—指導へどう生かすか—」, 日本語教育学会研究集会 (山口大学) [招待講演] 2012.12.

迫田久美子

「日本語学習者の発話データから何がわかるか?—第二言語習得研究におけるコーパスの役割—」, 第 84 回第二言語習得研究会 (お茶の水女子大学) [招待講演] 2013.2.

迫田久美子

「コミュニケーションのための日本語教育研究を実践に生かすには？」、国際交流基金関西国際センター設立15周年記念講演会「コミュニケーションのための日本語教育と関西国際センターの実践」（国際交流基金関西国際センター）[招待講演] 2013.3.

迫田久美子

「これからの外国語教育の在り方について」、シンポジウム『外国語教育の未来を拓く』（国際文化フォーラム）[招待講演] 2013.3.

迫田久美子

「日本語を教えることの楽しさと難しさ」、NINJAL フォーラム『グローバル社会の日本語のコミュニケーション—日本語を学ぶことはなぜ必要か』（学術情報センター）[企画・講演] 2013.3.

野山広、カール・フォルスグラフ、田中牧郎、小木曾智信、迫田久美子

「言語に関するデータベース、コーパスの構築とその活用について」、第5回「日本語教育とコンピュータ」国際会議（Castel/J）（名古屋）[パネルセッション] 2012.8.

迫田久美子、木下藍子、小西円、李在鎬

「日本語学習者の縦断的会話コーパス『C-JAS』の構築」、日本語教育学会（北星学園大学）[デモンストレーション] 2012.10.

【研究調査】

- ・2012.11 浜松市 日本語学習者発話コーパス調査（事前調査1 就労者対象）
- ・2012.11 広島市 日本語学習者発話コーパス調査（事前調査2 日本語学校留学生対象）
- ・2012.12 台湾台北市 日本語学習者発話コーパス調査（事前調査3 台湾東吳大学対象）
- ・2013.3 中国上海市 日本語学習者コーパス調査（本調査 上海海事大学学生対象）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・シンポジウム「コミュニケーションのための日本語教育」（企画・運営）2012.11.
- ・NINJAL フォーラム「グローバル社会における日本語のコミュニケーション」（企画・運営）2013.3.

【他の学術的・社会的活動】

- ・立川市副校長研修会「外国語としての日本語再発見—外国人から学ぶ日本語の仕組み—」（講演）2013.1.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・NINJAL チュートリアル講師
第7回「日本語教育に生かす第二言語習得研究—学習者にとって何が難しいのか—」（北海道大学）2012.6.24.
第10回「日本語教育に生かす第二言語習得研究—学習者にとって何が難しいのか—」（南山大学）2012.10.28.
- ・大学院非常勤講師
広島大学大学院教育学研究科 集中講義 2013.2.
首都大学東京大学院人文科学研究科 集中講義 2012.9.

野田 尚史 (のだ ひさし) 日本語教育研究・情報センター 教授

1956 生

【学位】 博士（言語学）（筑波大学, 1999）

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業（1979），大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了（1981），大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退（1981）

【職歴】 大阪外国語大学外国語学部 助手（1981），筑波大学文芸・言語学系 講師（1985），大阪府立大学総合科学部 講師（1991），同 助教授（1993），同 教授（1999），大阪府立大学人間社会学部 教授（2005），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授（2012）

【専門領域】 日本語学，日本語教育学

【所属学会】 日本語学会，日本語教育学会，日本語文法学会，日本言語学会，社会言語科学会，言語処理学会，計量国語学会，日本語用論学会，関西言語学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 理事・評議員，日本語文法学会 副会長・評議員，日本語教育学会 理事，日本言語学会 評議員，日本語用論学会 外部査読委員，言語系学会連合 運営委員

【受賞歴】

2006 第4回日本語教育学会奨励賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」のサブプロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」：リーダー

研究目的：

文法を重視した従来の日本語教育からコミュニケーションを重視した新しい日本語教育に転換するためにはどのような研究が必要かを明らかにすることを目的とする。

研究成果：

1. 野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』（2012年5月, くろしお出版）の出版や、国立国語研究所日本語教育研究・情報センター主催のシンポジウム「コミュニケーションのための日本語教育研究」（2012年11月, 東京・星陵会館）の開催、中国日語教学研究会江蘇分会大会での基調講演「日本語教育のための日本語研究」（2012年11月, 蘇州大学）などがある。
2. 非母語話者の日本語についての研究は、これまででは発話や作文という日本語を産出する言語活動についてのものが中心だった。読解や聴解という日本語を理解する言語活動についての研究が不足しているという現状認識から、非母語話者の読解過程を明らかにする共同研究を開始した。その研究成果としては、日本語教育国際研究大会でのパネルセッション「文章表現の分析と学習者の読解困難点調査に基づく読解教材の作成—グルメサイトのクチコミを読む教材を例にして」（2012年8月, 名古屋大学）や、日本語教育学会2012年度春季大会での口頭発表「上級日本語学習者の読み誤り—学習者は学術論文をどこで読み誤るか—」（2012年5月, 拓殖大学）、フランス日本語教師会特別勉強会での講演「実践的な日本語読解教材の作成—グルメサイトのクチコミを例にして—」（2013年2月, パリディドロ第7大学）などがある。

【研究業績】

《著書・編書》

三宅和子, 野田尚史, 生越直樹（編）

『「配慮」はどのように示されるか』(シリーズ社会言語科学 1), ひつじ書房, 2012.

野田尚史 (編)

『日本語教育のためのコミュニケーション研究』, くろしお出版, 2012.

《論文・ブックチャプター》

野田尚史

「とりたてとコンテクスト」澤田治美 (編), 『ひつじ意味論講座第6巻 意味とコンテクスト』

pp.165-181. ひつじ書房, 2012.

野田尚史

「動詞の活用論から述語の構造論へ 一日本語を例とした拡大活用論の提案一」, 三原健一, 仁田義雄編『活用論の前線』 pp.51-77. くろしお出版, 2012.

野田尚史

「コミュニケーション能力を高める日本語教材」, *Journal CAJLE* 12, pp.1-21. Canadian Association for Japanese Language Education, 2012.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「〈共同研究プロジェクト紹介〉 日本語教育のためのコミュニケーション研究」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (3), pp.117-124. 国立国語研究所, 2013. (オンライン版).

野田尚史

「絶妙のタイミングで来る執筆依頼」, 『日本語学』 31 (14), p.67. 明治書院, 2013.

野田尚史

「著書紹介 野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』」, 『国語研プロジェクトレビュー』 3 (2), pp.103-104. 国立国語研究所, 2012. (オンライン版).

野田尚史

「2010年・2011年における日本語学界の展望 総説」, 『日本語の研究』 8 (3), pp.1-4. 日本語学会, 2012.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語教育とは?」, 国際交流基金関西国際センター設立15周年記念講演会「コミュニケーションのための日本語教育と関西国際センターの実践」(大阪, 国際交流基金関西国際センター) [招待講演] 2013.3.30.

野田尚史

「実践的な日本語読解教材の作成 一グルメサイトのクチコミを例にしてー」, フランス日本語教師会特別勉強会 (Cercle de Linguistique Japonaise (CELIJA) 共催), (パリディドロ第7大学) [招待講演] 2013.2.23.

野田尚史

シンポジウム「コミュニケーションのための日本語教育研究」(国立国語研究所日本語教育研究・情報センター主催), (東京, 星陵会館) [趣旨説明] 2012.11.17.

野田尚史

「実践的な日本語読解 一インターネットのクチコミを例にしてー」, 江蘇大学外国语学院日語学科学術講演会 (中国, 江蘇大学) [招待講演] 2012.11.5.

野田尚史

「日本語教育のための日本語研究」，中国日語教学研究会江蘇分会大会，基調講演（中国，蘇州大学）〔招待講演〕2012.11.3.

野田尚史

「配慮表現の多様性をとらえる方法と視点」，シンポジウム「日本語の配慮表現の多様性」，（東京，科学技術館）2012.9.22,23.

野田尚史，桑原陽子，播磨涼子

「グルメサイトのクチコミに使われる文章・表現の分析」，日本語教育国際研究大会 名古屋 2012，パネルセッション「文章表現の分析と学習者の読解困難点調査に基づく読解教材の作成 一グルメサイトのクチコミを読む教材を例にしてー」（名古屋大学）2012.8.19.

藤井明子，花田敦子，藤原未雪，野田尚史

「上級日本語学習者の読み誤り ー学習者は学術論文をどこで読み誤るかー」，日本語教育学会 2012 年度春季大会（東京，拓殖大学）2012.5.27.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・日本語教育国際研究大会名古屋 2012，パネルセッション「文章表現の分析と学習者の読解困難点調査に基づく読解教材の作成 一グルメサイトのクチコミを読む教材を例にしてー」（名古屋大学）（企画・運営）2012.8.19.
- ・シンポジウム「日本語の配慮表現の多様性」（東京，科学技術館）（企画・運営）2012.9.22-23.
- ・第 6 回 NIJAL フォーラム「グローバル社会における日本語のコミュニケーション ー日本語を学ぶことはなぜ必要かー」（一橋大学一橋講堂）（司会）2013.3.10.

【研究調査】

日本語学術振興会の専門研究員として，それぞれの地域の言語学・言語教育学分野に関する学術研究動向を調査。

- ・2012.11 中国，2013.2 フランス，2013.3 タイ

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL ニホンゴ探検 2012，ことばのミニ講義「ことばのパズル」講師（国立国語研究所）2012.7.21.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
東京外国語大学，大阪府立大学

宇佐美 洋（うさみ よう）日本語教育研究・情報センター准教授

【学位】博士（日本語学・日本語教育学）（名古屋外国語大学、2012）

【学歴】東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1997）

【職歴】新潟大学留学生センター 講師（1997），国立国語研究所日本語教育センター第三研究室 研究員（1999），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同 主任研究員（2004），同 日本語教育基盤研究センター評価基準グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 日本語教育研究・情報センター准教授（2010）

【専門領域】評価論，言語能力論，日本語教育

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，待遇コミュニケーション学会，PAC分析学会

【学会等の役員・委員】日本語教育学会 評議員，同 学会誌委員，同 調査研究推進委員，同 国際連携委員，社会言語科学会発表賞 選考委員，日本語検定 審議委員

【受賞歴】

2011 日本語教育学会第9回日本語教育学会奨励賞

2011 日本語教育学会第6回日本語教育学会林大記念論文賞

2011 国立国語研究所第3回所長賞

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（「社会における相互行動としての「評価」研究」を担当）

1. 日本語非母語話者が書いた謝罪文を母語話者が読む際，どのような観点を，どのようなプロセスで使用しているかを質的・量的方法論によって精査し，「評価プロセスモデル」として理論化した。このモデルは，言語運用の「評価」というものを，従来の言語教育分野におけるとらえ方とはまったく異なる理念に基づきとらえたものであり，理論的に高い意義を持つだけでなく，教育実践（特に日本語母語話者に対するコミュニケーション教育）への応用の可能性も持つものである。2012年度は学会や講演等において，このモデルについての広報を行った。
2. 上記理論も踏まえつつ，自らの評価のあり方を自覚・内省するための「評価ワークショップ」を大学，ボランティア日本語支援者研修などで複数回実施し，そこで行われた参加者同士のやり取りについて分析を行い，評価ワークショップの教育的効果や，今後に向けてのワークショップ実施手法の改善等について考察を行った。
3. 他者の言語運用を第三者として一方的に評価するだけでなく，自分自身の言語運用に対しても内省を促していくための状況を設定し，そうした場においてどのような評価（自己評価も含む）が行われているかについての調査を開始した。

【研究業績】

《博士学位論文》

宇佐美洋

「学習者の日本語書きことばに対する母語話者評価の多様性に関する研究—謝罪文を対象とした「評価プロセスモデル」の構築—」，名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科，2012.5.

《論文・ブックチャプター》

宇佐美洋

〈特集〉「「学会誌の回顧と展望」「社会」分野—研究観の再考と拡張を促すための原動力として—」,
『日本語教育』153, pp.55-70. 2012.12.

宇佐美洋

「日本語能力試験における「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」とは何か」,
Japanese Studies Journal, 29(1), pp.1-15. (Thammasart University) 2012.9.
(http://www.asia.tu.ac.th/journal/content_JSjournal29_1_55.html)

ナヨアン R. フランキー, 横山紀子, 磯村一弘, 宇佐美洋, 久保田美子

「インドネシア語話者による日本語の長短母音の習得に関する調査—聞き取り・読み上げ発話・自然発話のデータから—」, 『音声研究』16 (2), pp.28-39. 2012.8.

宇佐美洋, 田中真理, 徳井厚子

「評価の「個人差」に着目することの意味—より深い自己認識につなげるための評価論—」, 『ヨーロッパ日本語教育』16, pp.36-50. 2012.6.

《その他の出版物・記事》

宇佐美洋

「言語運用評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる」, 『国語研プロジェクトレビュー』3 (3), pp.125-132. 2013.3.

【講演・口頭発表】

宇佐美洋

「難解文書の書き換えプロセスに見られる「評価」への意識」, 日本語教育学会 2012 年度秋季大会（北海学園大学）2012.10.

宇佐美洋

「「評価プロセス」の普遍性と個別性を探る—「学習者の書いた謝罪文」を題材として—」, 2012 年日本語教育学会国際研究大会（名古屋大学）2012.8.

西原陽子, 鈴木伸一, 井頭昌彦, 宇佐美洋 他

「「できる」とはどういうことなのか?—他領域との協働による課題解決にむけて—」, 2012 年度日本語教育学会春季大会 学会創立 50 周年記念パネルセッション（拓殖大学）2012.5.

【研究調査】

- ・2012.12-2013.2 日本語母語話者同士, また母語話者と非母語話者の間の対面対話における相互評価に関するインタビュー調査（国立国語研究所内）
- ・2013.1-2013.2 日本語母語話者による, 他者の書いたメール文, および自分の書いたメール文の評価に関するインタビュー調査（国立国語研究所内）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・日本語教育学会『日本語教育』第 155 号（2013 年 8 月発行予定）の特集「エンパワーメントとしての日本語支援」を, ワーキンググループ代表として企画・編集

【その他の学術的・社会的活動】

- ・青山学院女子短期大学総合文化研究所にて, 講演「無意識の「統制」を乗り越えるために—外国人の日本語に対する母語話者からの評価をきっかけとして—」[招待講演] 2013.3.
- ・言語管理研究会 第 28 回定期例研究会（千葉大学）にて, 講演「自己と向き合うための評価研究—個人の能力を伸ばす教育から, コミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ—」[招待講演] 2012.9.

- ・国立国語研究所「職業発見プログラム」でワークショップ実施（2回）2012.9.
- ・東京女子大学言語科学専攻新入生オリエンテーション合宿でのワークショップ「「ことばで人とつながる」って、どういうこと？」実施。2012.6.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・客員准教授
政策研究大学院大学日本言語文化研究プログラム（博士課程）
- ・大学院生指導
政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター連携「日本言語文化研究プログラム」（博士課程）において、主指導教員としてナヨアン R. フランキーの博士論文を審査
同プログラムにおいて、副指導教員としてグエン・ソン・ラン・AINの博士論文執筆を指導

野山 広 (のやま ひろし) 日本語教育研究・情報センター 准教授

1961生

【学位】修士（文学）（早稲田大学, 1988), 修士（日本語応用言語学）（モナッシュ大学, 1995), 修士（教育学）（早稲田大学, 1996)

【学歴】早稲田大学卒業（1985），早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988），豪州モナッシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995），早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996），早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】文化庁文化部国語課専門職員（日本語教育調査官）（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域主任研究員（2004），同領域長（2005），同整備普及グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター上級研究員（2009），同准教授（2010）

【専門領域】応用言語学，日本語教育学，社会言語学，多文化・異文化間教育，言語政策・計画研究

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，異文化間教育学会，移民政策学会，日本言語政策学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会理事（広報委員会委員），日本語教育学会理事（大会委員会副委員長），移民政策学会理事（企画委員），日本語プロフィシェンシー研究会副会長（地域の日本語教育研究担当），港区国際化推進プラン検討委員会委員長

【2012年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト

「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトでは、主として旧センター（日本語教育基盤情報センター）で実施した縦断調査（約2年半）で得られた日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備、分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ、蓄積する。そのことで、多言語・多文化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得、言語生活の実態をより的確に捉え、日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ答えようとする、応用言語学的アプローチの基盤を築くのが目的である。

研究成果：

(1) 以下のことが明らかになった。

1. 調査方法：縦断調査の場で、形成的評価としてOPIを活用することの可能性と課題
 2. 日本語学習者の会話の特徴：OPIの文字化データから明らかになったこと
 - 1) 言い切りの形の有無が曖昧、2) 声真似による引用（直接話法と省略）、3) 地域方言と社会方言（地域特有のインプット）、4) 地域の言語生活・環境がもたらす話題の展開、5) 発音の化石化とスタイルの習慣化など
 3. 事例研究：スタイルの課題の分布と経年変化（社会言語科学会で共同発表JASS29、パネル発表JASS30）
- (2) 「話し合い」を通した外国人支援の可能性を探ることで、以下のことが明らかになった。
1. 学習者の発話量の不均衡はOPIの日本語会話力とは必ずしも相関せず、以下の1), 2) の要因が大きく影響していること。

- 1) 滞日年数や年齢などによって、参加者間に非対称な関係性が生じる可能性がある。
- 2) 「話し合いの目的」が共有されないことで、参加者間の関係性や話し合いの流れに影響を与える。
2. 話し合いの過程に生じる問題（発話量の不均衡や言いたいことが言えない・他者の話が分からぬ）を、日本語学習者は自分の日本語力に帰属させる傾向が強いこと。
3. 学習者同士の話し合いの場は実は少なく、情報共有の場としての意義が大きいこと。

【研究業績】

《著書・編書》

鎌田 修・嶋田和子 編 (平田オリザ, 牧野成一, 川村宏明, 伊東祐郎, 野山 広, 川村宏明 著)
『対話とプロフィッシュンシー —コミュニケーション能力の広がりと高まりをめざして—』, 凡人社, 2012.5.

《その他の出版物・記事》

野山 広

「地域日本語教育 —その概念の誕生と展開」, 『日本語学』3月号〈特集 ことばのデータ集：日本語教育編〉 pp.11-22. 明治書院

《辞書・辞典類》

野山 広

『異文化コミュニケーション事典』, 春風社, 2013.1. の中の以下の 9 項目を執筆

- 319 欧州言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)
- 528 日本人移民 (Japanese migrants)
- 529 移民国家 (immigrant nation / country of immigration)
- 533 多文化家族 (multicultural families)
- 538 外国人集住地域 (areas of concentrated foreign settlement)
- 553 定住外国人と第三国定住 (foreign residents and third country resettlement)
- 554 オールドカマーとニューカマー (old comers & new comers)
- 555 国際労働移動 (international labor migration)
- 570 アイヌ (Ainu people)

【講演・口頭発表】

野山 広, 嶋田和子, 山辺真理子, 藤田美佳, 森本郁代

「散在地域に定住する外国人の日本語習得と言語生活支援の実態に関する縦断的研究 —OPI の枠組みを活用した形成的フィールドワークの結果を踏まえながら—」, 『2012 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.31-42. (パネルディスカッション), (北海学園大学) 2012.10.

野山 広, 嶋田和子, 岡部真理子, 今村圭介

「『日本語会話データベース縦断調査編』の構築と展望 —OPI の枠組みを活用した学習者会話データの公開の意義, 限界と今後の可能性—」, 『社会言語科学会第 30 回大会発表論文集』 pp.176-185. (ワークショップ), (東北大) 2012.9.

鎌田 修, 牧野成一, 野山 広, 嶋田和子, 平田オリザ

「日本における地域定住外国人に必要とされる『対話力』の実現」

「日本語教育における対話教育の重要性 —プロフィッシュンシーとコーパス分析の視点から—」, 『日本語教育とコンピュータ国際会議 (CASTEL/J 2012)』 (パネルディスカッション), (名古屋国

際センター) 2012.8.

野山 広

「日本における地域日本語教育の展開と複言語・複文化主義 —CEFR の考え方と枠組みを踏まえつつ—」, 欧州日本語教師会ポスター発表 (ロンドン大学 SOAS) 2012 年第 1 回 AJE ワークショップ : 「CEFR・JF スタンダードを生かした日本語教育」 2012.8.

野山 広, 今村圭介

「日本語学習者会話データベース縦断調査編の活用方法」

“Database of Japanese language learners conversation that has been collected by the Longitudinal Survey” and a consideration of methods for its utilization.

日本語教育とコンピュータ国際会議 (CASTEL/J 2012 in NAGOYA) (ポスター発表), (名古屋外国語大学) 2012.8.

野山 広, 嶋田和子, 山辺真理子, 今村圭介

「日本語非母語話者の発話スタイルの特徴と課題 —外国人散在地域の定住外国人の縦断 OPI データから—」, 2012 年日本語教育国際研究大会 (ICJLE, NAGOYA) (ポスター発表), (名古屋大学) 2012.8.

野山 広, 森本郁代

「多人数による話し合い場面からみえてくること —OPI の枠組みを活用した縦断調査の結果を踏まえて—」, 2012 年度日本語プロフィシェンシー研究会第 1 回例会 (京都外国語大学) [招待講演] 2012.6.

【研究調査】

- ・ 2012.9, 2013.3 秋田県能代市 日本語学習者の会話力と言語生活の実態に関する縦断調査 (フォローアップ調査)

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 日本語教育とコンピュータ国際会議 (CASTEL/J 2012) (企画・運営: 実行委員長) 2012.8.

【その他の学術的・社会的活動】

2012 年度中に、大学の特別講座 (お茶の水女子大学, 東京大学), 自治体・教育委員会 (千葉市, 能代市等) や NPO, 国際交流協会等 (浜松市, 西東京市, 練馬区, 札幌市) の研修等 (合計約 10 数回, 1 回 2 時間~3 時間) に講師として招聘され, 研究成果の一部を活用しながら研修やワークショップを行った。

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院客員教授
政策研究大学院大学日本語教育指導養成プログラム (修士課程)

島村 直己 (しまむら なおみ) 日本語教育研究・情報センター 上級研究員

1952 生

【学位】修士（教育学）（東京教育大学，1978）

【学歴】東京教育大学教育学部卒業（1976），東京教育大学大学院教育学研究科修士課程教育学専攻修了（1978），筑波大学大学院教育学研究科博士課程教育学専攻中退（1978）

【職歴】国立国語研究所言語教育研究部第一研究室研究員（1978），同主任研究官（1987），同室長（1988），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域主任研究員（2001），同日本語教育基盤情報センター主任研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター上級研究員（2009）

【専門領域】言語教育

【所属学会】全国大学国語教育学会，日本語学会，日本読書学会，日本教育心理学会

【2012年度の研究成果の概要】

基本度 1001 位～1500 位までの語彙の意味記述を行った。近代日本人のリテラシーについての記述的研究を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

島村直己

「日本語の基本語彙に関する研究」，『国語研プロジェクトレビュー』3（3），pp.133-141. 国立国語研究所，2013.

島村直己

「改定常用漢字表を検証する」，『国語教育史研究』第 12 号，pp.38-41. 国語教育史学会，2012.

《その他の出版物・記事》

島村直己，佐藤亮一，正保 勇，飛田良文

「日本語基本語事典—基本 501 位～1000 位—（試行版）」

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 日本語教育研究・情報センター 研究員

【学位】修士（日本語教育）（ウィスコンシン大学、1993）

【学歴】金沢女子大学文学部英米文学科卒業（1991），ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了（1993）

【歴史】国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員（2009）

【専門領域】日本語教育学，社会言語学，リテラシー，個人・社会の多言語性

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，移民政策学会，日本質的心理学会

【2012年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員

研究目的：

現代日本における多民族多言語化の大きな担い手である外国人の言語能力・言語使用の実態，及びその背景にある要因を社会言語学的アプローチから明らかにすることを目的とする。研究対象者は，欧米においては研究の知見が蓄積されながら，日本では研究が進んでいない南アジア出身者（特にパキスタン人）とし，欧米の言語人類学や社会言語学における知見を参考にしつつ，言語観や言語使用意識に関する量的・質的研究を行う。また，個人的バイリンガリズムは社会的役割や社会的文脈と関連しているため，必要に応じて社会学，文化人類学，経済学等の他領域の研究者と連携体制をとる。本研究は，日本の多言語化現象の実態を明らかにするだけではなく，外国人のコミュニケーションを日本語能力の観点から単眼的に評価する日本語教育のパラダイムを再検討するための基礎的研究として貢献することを目指す。

研究成果：

2013年度に実施する言語意識に関する量的調査の実施にむけて，予備的な調査を行った。さらに調査への協力体制を築くために集住地においてシンポジウム「越境する家族の子どもの現状と支援—富山に住む外国人の子どもたち—」を実施した。また，質的調査の実施にむけて，集住地における言語景観調査及び職場における言語環境の調査を在日パキスタン人の経済活動を研究する学際的研究チーム（文化人類学，経済学，地理学）と合同で実施した。これらの成果は，「移民の複言語能力と言語生活—在日パキスタン人移民を例として—」（国立国語研究所日本語教育研究・情報センター公開研究発表会，2013年1月），「滞日パキスタン人の言語使用」（NINJAL サロン，2012年6月），「多文化共生社会における日本語教育の役割についての一考察—少数派滞日パキスタン人の言語生活を事例に—」（2012年日本語教育国際研究大会，名古屋市，2012年8月）で発表した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「福田友子著『トランクナショナルなパキスタン人移民の社会的世界—移住労働者から移民企業家へ』」，『移民政策研究』5, pp.172-174. 明石書店, 2013.

《その他の出版物・記事》

福永由佳

「学習支援の実態理解 富山・移民生活研究会」，北日本新聞，2013年2月24日版，30面

【講演・口頭発表】

福永由佳

「研究者としての実践：移民コミュニティの言語生活研究会における当事者とのコミュニケーション」，第10回情報保障研究会（ウィルあいち）2013.3.

福永由佳

「アメリカにおける識字教育の展開：親と子を結ぶ識字プログラム」，「日本の移民コミュニティと移民言語」研究会（国立民族学博物館）2013.3.

福永由佳

「多文化共生社会における日本語教育の役割についての一考察—少数派滞日パキスタン人の言語生活を事例に—」，2012年日本語教育国際研究大会（名古屋市）2012.8.

【研究調査】

・2013.2.21-2.25

富山市・射水市・金沢市：パキスタン人集住地における言語景観及び職場における言語使用に関するインタビュー調査及び観察調査（富山市・射水市），パキスタン人の就業上のコミュニケーションに関するインタビュー調査及び観察調査（金沢市）

・2012.12.2-12.8

アメリカ・テネシー州ルイズビル：National Center for Family Literacyが運営するFamily Literacy Programの実践に関するインタビュー及び訪問調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・シンポジウム「越境する家族の子どもの現状と支援—富山に住む外国人の子どもたちー」，第3回移民コミュニティの言語生活研究会（代表：福永由佳 トヤマヤボニカとの共催）（サンシップ富山）2013.2.23（企画・運営）
- ・非識字者の支援ツール開発への専門的知見の提供（カシオ計算機（株），2012年12月～）

V

資 料

1 運営会議

運営会議規程

- ・委員は20名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究系長、センター長、その他所長の氏名する教授又は客員教授若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2012年度の開催状況

○第1回 2012年4月24日（メール会議）

議事

1. 「国立国語研究所長選考手続きに関する申合せ」について
2. 「国立国語研究所長選考手続きに関する申合せの取扱い」について
3. 「大学共同利用機関法人間文化研究機構国立国語研究所特任助教募集要項」について
4. その他

○第2回 2012年7月10日 10:30～13:30（八重洲富士屋ホテル）

審議

1. 前回議事概要（案）について
2. 人事関連事項について
 - ・所長候補者選考委員会の設置について
 - ・客員教員の選考について
 - ・名誉教授の選考について
 - ・特任准教授の選考について

報告

1. 今後の共同研究の展開について
2. 「日本語教育研究・情報センターのあり方」に関するワーキンググループについて
3. 外部評価委員会について
4. 平成23事業年度に係る業務の実績に関する報告について
5. 平成25年度概算要求（案）について
6. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第3回 2012年7月19日（メール会議）

議事

1. 前回議事概要（案）について

2. 「大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所特任助教募集要項」(案)について
3. その他

○第4回 2012年10月19日 15:00～17:30（フクラシア東京ステーション）

審議

1. 前回議事概要（案）について
2. 人事関連事項について
 - ・所長候補者の選考について
 - ・特任助教の選考について
3. 業務・組織の将来展開について

報告

1. Mouton社との出版協定について
2. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第5回 2012年2月15日 10:30～13:00（八重洲富士屋ホテル）

審議

1. 前回議事概要（案）について
2. 人事関連事項について
 - ・「大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所研究教育職員募集要項」(案)について
 - ・人事委員会の設置について
 - ・客員教授の選考について
3. 業務・組織の将来展開について

報告

1. 平成24事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
2. 平成25年度計画（案）について
3. 平成25年度予算について
4. 平成25年度の共同研究の体制について
5. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

所長候補者選考委員会規程

- ・委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
- ・委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。

- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2012年7月10日 所長候補者選考委員会設置
2012年7月25日 所長候補者選考委員会（第1回）開催
2012年8月31日 所長候補者選考委員会（第2回）開催（メール審議）
2012年10月19日 運営会議に適任者名簿を提出
現国立国語研究所長 影山太郎氏を所長候補者に決定
人間文化研究機構長に推薦（2012年10月23日）

（2）人事委員会

人事委員会規程

- ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者若び研究所内の者若干名で組織する。
- ・委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

人事委員会審議状況

2012年4月19日（第1回：メール審議）、2012年6月22日（第2回）
言語対照研究系 特任准教授としてブガエワ・アンナ（Anna Bugaeva）氏を運営会議に推薦
(2012年7月10日開催の運営会議で採用決定)
2012年6月22日（第2回）、2012年10月18日（第4回）
時空間変異研究系 特任助教として竹田晃子氏を運営会議に推薦
(2012年10月19日開催の運営会議で採用決定)
2012年8月1日（第3回：メール審議）、2012年10月18日（第4回）
研究情報資料センター 特任助教として籠宮隆之氏を運営会議に推薦
(2012年10月19日開催の運営会議で採用決定)

（3）名誉教授候補者選考委員会

名誉教授称号授与規程

- ・研究所の教授として10年以上勤務し、学術研究上特に功績があった者。
- ・研究所の教授としての勤務年数が前号の規定に満たないが、学術研究上特に顕著な功績があった者。
- ・研究所の所長又は副所長として、研究所の運営に関し功績が特に顕著であった者。
- ・名誉教授の選考は、研究所の運営会議において行う。

名誉教授候補者選考委員会開催状況

2012年4月27日

角田太作氏（元国立国語研究所教授）の在職中の業績から名誉教授の称号授与に足りる功績があるものと判断、運営会議に推薦

2012年7月10日開催の運営会議で称号授与決定（称号授与日：2012年4月1日）

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置し、この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、研究所の「研究」「組織・運営」「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証する。

自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関する事項、外部評価委員会の評価結果に関する事項を担当する。委員会には組織・運営部会と、研究・教育部会を置く。

組織・運営部会では、年度計画の作成、業務実績報告書の作成、研究教育実施体制・業務運営に係る自己点検・評価の実施、外部評価委員会の開催を行う。2012年度に部会は2回開催した。

研究・教育部会では、各研究系及びセンター、共同研究プロジェクトの自己点検・評価を実施する。2012年度に部会は4回開催した。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

- 委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関する事項、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関する事項、共同研究プロジェクト等の評価に関する事項、その他評価に関する事項について審議する。
- 委員会は10名以内の委員をもって組織する。
委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。
委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。
- 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

○「組織・運営」「管理業務」の評価

研究所の活動全般に関する事項、24年度実績報告書および自己点検評価に基づく評価を行う。

評価項目：教育研究等の質の向上の状況（研究に関する目標、教育に関する目標）、業務運営の改善及び効率化に関する目標、財務内容の改善に関する目標、自己点検・評価及び当該状況に係

る情報の提供に関する目標、その他業務運営に関する目標

○「研究」（共同研究プロジェクト）の評価

研究系長・センター長及び各共同研究プロジェクトのリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて実施するもので、ヒアリングは自己点検報告書で十分に把握できなかった事項を確認するために所内公開で行う。

ヒアリング点検項目：共同研究の推進、研究実施体制、共同利用の推進、国際化、研究成果の発信と社会貢献、若手研究者育成

評価シートの作成：自己点検報告書の内容及びヒアリングの内容を踏まえ、プロジェクト毎に作成

評価シートの構成：総合評価、特に成果があがったと思われる点、今後改善を要する点

24年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

・平成24年度外部評価委員会（第1回）2012年12月27日11:30～13:30（八重洲富士屋ホテル）
議事

1. 第二期中期目標・中期計画、24年度計画と実績報告及び評価について

2. 平成24年度共同研究プロジェクトについて

3. その他

・平成25年度外部評価委員会（第1回）2013年5月21日10:30～12:30（八重洲富士屋ホテル）
議事

1. 前回議事概要（案）確認

2. 第二期中期目標・中期計画・平成24年度実績に係る評価結果の確認について

3. 第二期中期目標・中期計画・平成25年度計画について

4. その他

・平成24年度監事監査での検討事項について

・その他

共同研究プロジェクトヒアリング

開催状況

・11月6日～7日（2日間）

2012年9月終了の共同研究プロジェクトに係るヒアリング（研究成果報告）

独創・発展型5件、領域指定型1件、萌芽・発掘型4件

・2月9日～10日（2日間）

2012年度基幹型共同研究プロジェクト及び研究系・センター自己点検評価ヒアリング（研究成果報告及び外部評価委員評価）

基幹型15件、研究系・センター7件

・2月20日、22日（2日間）

2012年度領域指定型、独創・発展型、萌芽・発掘型共同研究プロジェクト自己点検評価ヒアリング（研究成果報告）

領域指定型7件、独創・発展型3件、萌芽・発掘型5件

3 広報

- 国語研 Web サイト <http://www.ninjal.ac.jp/>
各種催し物、データベース等、国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介。
- 国立国語研究所要覧 2012/2013
国語研の特色や研究系、センターの活動、共同研究プロジェクトの紹介冊子。
- 国立国語研究所リーフレット 2012/2013
- NINJAL 英文リーフレット
- 国語研からの御案内（メールマガジン）
シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。29回発行。

4 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰を行い、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年2回行う。

- 第5回所長賞：2012年度前期（2012年4月1日～9月30日）
 - ・金 愛蘭（時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員）
〈論文〉
論文「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」（『阪大日本語研究別冊3』2011年2月刊行）により、2012年9月8日に田島毓堂学術賞を受賞。本論文は、日常語として定着した外来語のうち基本語化した2つの語を取り上げ、膨大な通時的新聞コーパスを使用し、日本語化するメカニズムを詳細に追求したもので、着眼点、調査・分析方法とも高く評価された。
 - ・米田純子（研究推進課研究支援グループ 専門職員）
〈研究支援〉
複数の国際シンポジウムの開催に尽力し、若手職員の育成に大きな役割を果たしたことに加え、統計数理研究所と国立国語研究所の連携協定に基づく山形県鶴岡市における大規模な言語調査において、情報通信インフラの整備を初めとする両研究所研究者への多大な支援によりプロジェクトを成功に導いた功績は極めて多大であると認められる。
- 第6回所長賞：2012年度後期（2012年10月1日～2013年3月31日）
 - ・窪薙晴夫（理論・構造研究系 教授・系長）
〈ジャーナル特集号編集〉
世界的に定評のある学術専門誌 *Lingua* の1つの号を、8本の論文からなる特集号（Vol.122, Issue13 Special issue）として編集した。特集号の編集は、当該分野における第一人者が行うもので、内1本は自身の論文“Varieties of pitch accent systems in Japanese” (*Lingua* Vol.122, Issue13 (Oct.2012), pp.1395-1414.) が掲載された。
 - ・上野善道（理論・構造研究系 客員教授）

〈論文〉

世界的に定評のある学術専誌 *Lingua* に論文 “Three Types of Accent Kernels in Japanese” (*Lingua* Vol.122, Issue13 (Oct.2012), pp.1415-1440.) が掲載された。

- ・朝日祥之 (時空間変異研究系 准教授)

〈著書〉

単著『サハリンに残された日本語権太方言』を平成 24 年 10 月に明治書院より刊行した。サハリンに現在でも残る日本語権太方言の特徴とそれを取り巻く社会言語学的状況について論じ、多言語社会であったサハリンの中での日本語の役割等、接触言語学的な視点から問題提起をした。

- ・儀利古幹雄 (理論・構造研究系 PD フェロー)

〈学会発表賞受賞〉

日本言語学会大会における口頭発表・ポスター発表のうち特に優れていると認められる発表に対して授与される日本言語学会大会発表賞を、日本言語学会第 144 回大会（2012 年春季、東京外国語大学）「町名のアクセント：アクセントの平板化と言語内的要因」により受賞した（受賞決定：2012 年 10 月 30 日）。

- ・大滝靖司 (理論・構造研究系 プロジェクト奨励研究員)

〈学会発表賞受賞〉

日本言語学会大会における口頭発表・ポスター発表のうち特に優れていると認められる発表に対して授与される日本言語学会大会発表賞を、日本言語学会第 144 回大会（2012 年春季、東京外国語大学）「父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造」により受賞した（受賞決定：2012 年 10 月 30 日）。

5 研究教育職員の異動（2012 年度中の異動者）

2012.4.1	教授・センター長	迫田 久美子	採用	広島大学教授より
2012.4.1	教授	野田 尚史	採用	大阪府立大学教授より
2012.4.1	副所長	木部 暢子	再任	
2012.4.1	研究系長	ジョン・ホイットマン	新規	
2012.4.1	特任准教授	淺原 正幸	任用更新	
2012.4.1	客員教授	上野 善道	任用更新	
2012.4.1	客員教授	益岡 隆志	任用更新	
2012.4.1	客員教授	真田 信治	任用更新	
2012.4.1	客員教授	松森 晶子	任用更新	
2012.4.1	客員教授	田窪 行則	任用更新	
2012.4.1	客員教授	狩俣 繁久	任用更新	
2012.4.1	客員准教授	青木 博史	任用更新	
2012.4.1	客員教授	近藤 泰弘	任用更新	
2012.4.1	客員教授	伝 康晴	任用更新	
2012.4.1	客員教授	ビヤーケ・フレレスビッグ	任用更新	
2012.4.1	客員准教授	下地 理則	任用更新	
2012.4.1	客員准教授	ハイコ・ナロック	任用更新	

2012.4.1	客員教授	中山 峰治	採用
2012.4.1	客員教授	井上 史雄	採用
2012.4.1	客員教授	鳥飼 玖美子	採用
2012.4.1	客員教授	南 雅彦	採用
2012.5.1	客員教授	白井 恭弘	採用
2012.5.17	客員教授	アレキサンダー・ボビン	採用
2012.6.1	客員教授	柴谷 方良	採用
2012.7.1	客員教授	アーミン・メスター	採用
2012.8.18	客員教授	アレキサンダー・ボビン	退職
2012.8.31	客員教授	アーミン・メスター	退職
2012.8.31	客員教授	ビャーケ・フレレスビッグ	退職
2012.9.24	客員教授	ピーター・フック	採用
2012.10.1	客員教授	金水 敏	採用
2012.11.1	特任助教	竹田 晃子	採用
2012.11.16	客員教授	ピーター・フック	退職
2012.12.1	特任准教授	アンナ・ブガエワ	採用 早稲田大学准教授より
2012.12.31	客員教授	柴谷 方良	退職
2013.3.31	上級研究員	島村 直己	定年退職

VI

外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所

平成 24 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 25 年 6 月 25 日

目 次

はじめに	1
1. 評価結果報告書	2
1. 平成 24 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果.....	3
2. 平成 24 年度「共同研究プロジェクト」に関する評価結果.....	5
2. 資料	7
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	8
2. 国立国語研究所外部評価委員会規則	9
3. 国立国語研究所平成 24 年度外部評価委員会（第 1 回）議事次第	11
国立国語研究所平成 25 年度外部評価委員会（第 1 回）議事次第	12

はじめに

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948(昭和23)年に創設されました。以来、独立行政法人を経て、2009(平成21)年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所となり、活発な活動を展開しています。新たに設置された国立国語研究所は、創設からの長い伝統の中で蓄積された研究を踏まえながら、日本語研究および日本語教育研究の国際的拠点として国内および海外の大学・研究機関と大規模な理論的・実証的共同研究を展開することによって日本語の特質の全貌を解明し、言語の研究を通して人間にに関する理解と洞察を深めることを目的としています。また、共同研究の成果や関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供し、様々な応用面に寄与することも重要な使命としています。

このたび、第二期中期計画の3年目という節目にあたり平成24年度の研究所における活動全般について、外部評価委員会による評価を実施しました。

外部評価委員会は平成24年度に委員を一新し、従来の5名から8名（言語学の専門家ではない有識者を含む）に増員することにより、評価の一層の充実を図る体制を整えました。この外部評価委員会により、研究所の組織運営および研究所の活動の根幹となる大規模な15件の基幹型共同研究プロジェクトについての評価結果として本報告書が作成されました。なお、領域指定型、独創・発展型、萌芽・発掘型の共同研究プロジェクト24件については自己点検報告書とヒアリングによる自己点検評価を実施しました。

われわれ国語研の教職員は、この報告書で示された評価結果を真摯に受け止め、研究者社会と一般社会からの幅広い御支援を支えに、私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていきたいと思っています。

最後に、今回の評価に対する委員の皆様の御尽力に対し、心から御礼申し上げます。

平成25年6月
国立国語研究所長
影山 太郎

1. 評価結果報告書

平成 24 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 24 年 12 月 27 日 国立国語研究所平成 24 年度外部評価委員会（第 1 回）

平成 25 年 2 月 9, 10 日 平成 24 年度共同研究プロジェクトヒアリング

平成 25 年 5 月 21 日 国立国語研究所平成 25 年度外部評価委員会（第 1 回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 樋山 紘一

平成 24 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果

＜組織・運営＞

総合評価：

- ・研究・教育に関する目標もよく達成されている。特に、研究に関しては当初の目標を上回る実績が認められる。研究に関しては、日本語教育分野における国際的連携、教育に関しては、大学院教育の新たな展開に今後の期待が大きい。
- ・あえてここで強調するまでもないことだが、当研究所のミッションの最大のものは、日本語研究者のネットワークを効率的に構築することにある。日本語という主題は、多数の関係者の関心事であり、その知的エネルギーを有効に結集して取り組む必要があろう。国内の研究者ばかりか、諸外国の研究者、また司書、アーキヴィストなどのコーパス利活用者や学生・大学院生など、多様な関係者との対話を必須のものと了解してほしい。

個別評価：

教育研究等の質の向上の状況

1. 研究に関する目標

- ・自己点検評価の結果は適切であると判断される。研究、学術情報の収集・発信に関する積極的活動とその成果が高く評価される。日本語教育分野においても、国際的連携が期待される。
- ・国際的研究交流、とりわけオックスフォード大学やマックスプランク研究所とのジョイントシンポジウムは、当研究所のみならず、多数の欧米・アジア諸国研究者の参加を得て、予想以上の成果を収めたものと思われる。この経験を基礎として、国際出版への積極的な主導・参画にも取り組んでいただきたい。この成果は、今後における当研究所および、わが国における日本語研究の質を決定することになろうから。日本語研究の国際化の進展は、かならずや日本語それ自体の国際化を促すはずである。

2. 教育に関する目標

- ・自己点検評価の結果は適切であると判断される。大学院教育に関する新たな展開が期待される。
- ・連携大学院プログラムの充実はかなり困難な道であろう。一橋大学の件はともかくとしても、それ以外の多様な可能性を開拓すべきだろう。そのためには、当研究所のプレゼンスを高め、組織的にも開かれた体制を整備してほしい。

＜管理業務＞

総合評価：

- ・中期目標・中期計画・年度計画に従い、日本語研究の中核機関としての業務を深く認識した改善・改革が行われている。機関としての機能強化、予算の柔軟な執行、研究環境の整備などについての成果が高く評価される。防災・安全対策には、一層周到な対応が望まれる。
- ・研究の国際性の進展・増強に伴い、管理業務にあっても、これに十分に対応しうる資質や体制の整備にとりかかる必要があろう。直ちにとは言わぬまでも、数年先までには、それについての国内第一線に立つことを目指して、戦略的に行動してほしい。

個別評価：

1. 業務運営の改善及び効率化に関する目標

- 自己点検評価の結果は適切であると判断される。年度予算の柔軟な執行、外部利用者の便を図る研究図書室の改善が特に評価される。

2. 財務内容の改善に関する目標

- 自己点検評価の結果は適切であると判断される。省エネ・修繕経費などについては、可能な範囲でその結果・効果が記載されることが望ましい。
- とくに具体的なコメントではないが、科研費の申請および採択率の改善について、今後のポリシー設定を含めた、抜本的な検討を行っていただきたい。

3. 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

- 自己点検評価の結果は適切であると判断される。日本語研究の中核機関としての役割が果たされつつある。

4. その他業務運営に関する目標

- 自己点検評価の結果は適切であると判断される。立川断層の危険性が指摘されていることから、安全対策には一層の努力が必要と思われる。施設・設備の使用状況については、点検システムについて記載されることが望まれる。

担当： 権山 紘一
林 史典

平成 24 年度「基幹型共同研究プロジェクト」に関する評価結果

国立国語研究所は第二次大戦後まもなく設立され、日本人のための「国語及び国民の言語生活に関する科学的な調査、資料の作成、公表」の活動を行ってきた。また 1970 年代に入り、国による外国人に対する日本語教育推進の動きに伴い、1974 年には本研究所に日本語教育部が設置され(1976 年に日本語教育センターに改組)、日本語教育研究および教師研修の活動が始まった。2009 年人間文化研究機構大学共同利用機関となってからはこれらの活動を統合した国際的な視野での研究活動が求められる機関となったと理解する。この枠組みにおいて、基盤型研究プロジェクトの活動を外部評価者が総合評価した結果、「年度計画を上回って進捗している」となった。

良好な研究活動が認められ、高い評価を得たと考えられる。今回のヒアリングによって国内外の研究組織と理論的・実証的共同研究により日本語の特質を解明するとともに、応用研究による社会への還元が模索されてきたことが明らかになり、そのための研究基盤作りが徐々に功を奏していることが認められる。全評価者が高く評価したプロジェクトもある一方で、一部改めるべき点があるために総合して最高点には至らなかった。以下高く評価された点と改めるべき点について述べる。

特に高く評価されたのは日本語レキシコン、言語資源、言語類型論に関するプロジェクトである。日本語レキシコンに関するプロジェクトでは、音韻、文法、意味、形態的特性に関する広い領域を覆っており、国内外にわたる有機的な共同研究の連携および MOUTON 社などの言語学における有力出版社から研究成果を発表する準備が整えられたことなど海外への成果発信が高く評価できる。言語類型論研究でも国際的発信と共同研究の成果が高く評価された。この分野の研究は当研究所においては新しいものであり、外国人研究者を加えたことで新鮮な視点からの研究の萌芽が伺われ、今後の発展性を含むものとして期待される。

言語資源に関するプロジェクトでは、話し言葉コーパス構築以来蓄積されてきたノウハウに基づいて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) が構築され、その一般公開による利用の普及のための活動、さらには 100 億語コーパス開発および通時コーパス構築の着手、文理融合型の若手研究者の育成など目覚ましい展開を行ってきた点が高く評価された。さらにこのプロジェクトにおいても海外の有力出版社から成果を出版する見通しとなったことも高い評価につながった。

現時点までに、話し言葉コーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパスが公開された後、言語研究、自然言語処理研究においてコーパスを利用した研究が国内外で普及しつつあり、研究成果が出始めている。このような研究が浸透するためには、コーパスの利用方法の講習会などの普及活動とともに新しい研究手法を駆使する国内外の若手の研究者を養成することが強く望まれる。将来、通時コーパス、日本語学習者コーパスの構築が予定されており、さらに広い分野での利用が予測されることから、本研究所がコーパス研究の拠点となることが期待される。

他にも消滅危機方言調査研究は当研究所の長年の蓄積を継承しつつ、八丈島、与論島、喜界島など多地域での言語調査において重要な成果を上げつつあることが高く評価された。

日本語教育研究部門は、当評価年度に新任教授が赴任し、組織編成に着手したばかりであるが、学習者コーパスの構築をはじめ、本研究所の使命に沿う研究体制が確立されつつあることに期待している。

一方、改めるべき点としては、次のようなことがある。本研究所には鶴岡調査、岡崎調査などの豊かな研究成果の蓄積を活用する研究があり、言語変化の新たな理論構築につながる可能性がある。現

在の調査研究体制におけるプロジェクト間の連携・交流をより有機的に展開するとともに、この調査研究の成果の意義をさらに一般に発信することが期待される。

若手研究者育成については、ポスト・ドクター研究員を受け入れ、指導することで研究成果をあげているプロジェクトもあるが、所内研究費から割ける人件費の充当は必ずしも容易ではないと思われる。

例えばその方法として所内研究費以外の競争的資金の獲得が考えられる。実際に多くのプロジェクトリーダーは競争的資金を得ているが、予算を混合しない配慮をした上で、研究を活性化していけば、各プロジェクトの研究交流も拡大し、若手養成の資金ともなることから今後も競争的資金獲得にはさらに挑戦していただきたい。

担当： 仁科 喜久子

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿

- ◎ 横山 紘一 印刷博物館館長, 東京大学名誉教授, 元国立西洋美術館館長
専門 : フランス中世史
- 林 史典 聖徳大学言語文化研究所長, 筑波大学名誉教授, 元筑波大学副学長
専門 : 日本語史
- 仁科 喜久子 東京工業大学名誉教授
専門 : 日本語教育, コーパス言語学
- 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授, 日本語教育学会副会長
専門 : 日本語教育
- 後藤 齊 東北大学大学院文学研究科教授
専門 : コーパス言語学
- 渋谷 勝己 大阪大学大学院文学研究科教授, 日本学術会議連携委員
専門 : 日本語方言
- 早津 恵美子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
専門 : 日本語文法, 意味論
- 峰岸 真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
専門 : 東南アジア言語学

任期 : 平成 24 年 10 月 1 日 ~ 平成 26 年 9 月 30 日 (2 年)

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月1日

国語研規程第7号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程第7条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

国立国語研究所 平成 24 年度外部評価委員会（第 1 回）議事次第

日 時：平成 24 年 12 月 27 日（金）11:30～13:30

場 所：八重洲富士屋ホテル 3F けやきの間

議 事：

所長挨拶

外部評価委員と研究所出席者の紹介、定足数の確認、配布資料確認

委員会の任務の説明・委員長の選出

委員長職務代行者の指名

研究所の概要説明

議事 1 第二期中期目標・中期計画・22 年度～24 年度計画と実施状況の説明

議事 2 平成 24 年度共同研究プロジェクトの説明

国立国語研究所 平成 25 年度外部評価委員会（第 1 回）議事次第

日 時：平成 25 年 5 月 21 日（火）10：30～12:30

場 所：八重洲富士屋ホテル 3F 紅葉の間

議 事：

定足数の確認、配布資料確認

議事 1 前回議事概要（案）の確認

議事 2 第二期中期目標・中期計画・平成 24 年度実績（研究、組織・運営、管理業務）に係る評価結果の確認について

- ・基幹型共同研究プロジェクトの評価結果

- ・「組織・運営」、「管理業務」に係る評価結果

議事 3 第二期中期目標・中期計画・平成 25 年度計画について

議事 4 その他

- ・24 年度監事監査での検討事項について

- ・25 年度共同研究プロジェクト評価について

国立国語研究所 年報 2012年度

2013年12月20日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
TEL : 042-540-4300 FAX : 042-540-4333
<http://www.ninjal.ac.jp/>

